

V 第4次調査区の遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第64号住居跡 (第181図)

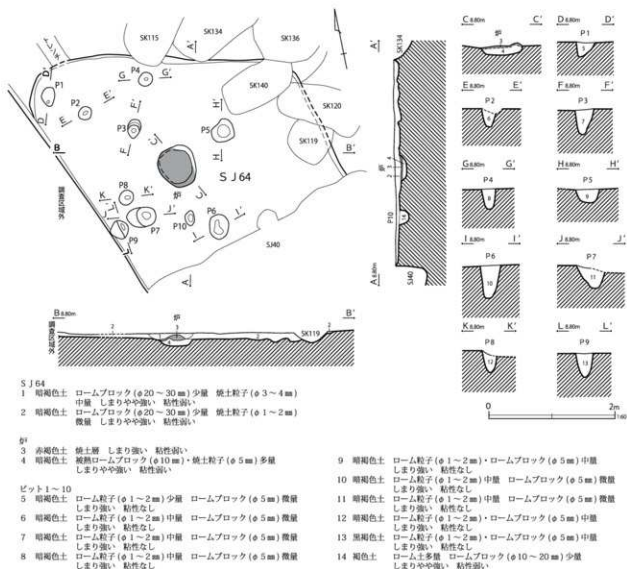
O-7・8グリッドに位置する。西側は調査区域外のため確認できず、その上、第40号住居跡、第115・119・120・134・136・140号土壇に壊されており、残りは非常に悪かった。

確認範囲での規模は、長軸3.80m、短軸3.71m、深さ0.21m、主軸方位はN-13°-Eである。

平面は隅丸方形と推定されるが、やや崩れた形である。覆土はロームブロックや焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。

床面からは炉跡とビットが確認された。炉跡は長軸0.66m、短軸0.61m、深さ0.14mで床面中央に位置すると推定される。平面は円形を呈し、掘り込み内に焼土層が堆積していた。

ビットは10基検出された。規模(長径×短



第181図 第64号住居跡

径×深さ)は、P 1は0.3m×0.21m×0.23m、P 2は0.23m×0.2m×0.29m、P 3は0.3m×0.21m×0.41m、P 4は0.23m×0.21m×0.33m、P 5は0.39m×0.31m×0.22m、P 6は0.39m×0.31m×0.54m、P 7は0.46m×0.31m×0.37m、P 8は0.25m×0.22m×0.34m、P 9は0.31m×0.3m×0.38m、P 10は0.22m×0.15m×0.15mである。そのうち、P 3・P 5～7の4基は、炉跡の周辺に比較的規則正しく配列されており、主柱穴の可能性が高い。それ以外のピットは床面上に散在しており、その性格は判断しがたい。ただし、構造や覆土の状況は全体的に共通することから、柱穴の一種と考えておきたい。なお、遺物は出土しなかった。

本住居跡の時期は、遺構の重複状況と住居構造から、古墳時代以前の所産と考えられる。加えて、本遺跡では弥生時代の遺構遺物は認められず、周辺に縄文時代前期の土壌や堅穴住居跡が検出されている。以上を踏まえ、本住居跡の時期は、縄文時代前期と推定しておきたい。

(2) 炉穴

第4次調査区では、炉穴が21基検出された(第182～184図)。そのうち、第20号炉穴はD-5グリッド、第22・23・26・29号炉穴はH-5・6グリッド、第18・19・24・25号炉穴はP-8グリッドに集中する。それ以外は調査区の中央から南側にかけて散在する。

炉穴の形状は長楕円形が比較的多い。掘り込みの底面には、ほぼ共通して火床面が認められ、焼土粒子を含む赤褐色土が堆積する。覆土は崩落土と自然堆積土を主体とする。

出土遺物は条痕文系土器を中心とし、第16号炉穴や26号炉穴では、比較的多くの破片が出土した(第185図)。

第10号炉穴(第182図)

O-11グリッドに位置する。規模は長径

0.54m、短径0.48m、深さ0.21mである。平面は円形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む褐色土の自然堆積と考えられる。明確な火床面は認められなかった。遺物は出土しなかった。

第11号炉穴(第182図)

O-11グリッドに位置する。第10号炉穴に隣接する。規模は長径0.53m、短径0.47m、深さ0.17mである。平面は円形である。覆土は焼土層が堆積し、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第12号炉穴(第182図)

M-8グリッドに位置する。撓乱により1/4ほど壊されている。規模は長径0.6m、短径0.38m、深さ0.39mである。平面は円形である。覆土は焼土層が堆積し、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第13号炉穴(第182図)

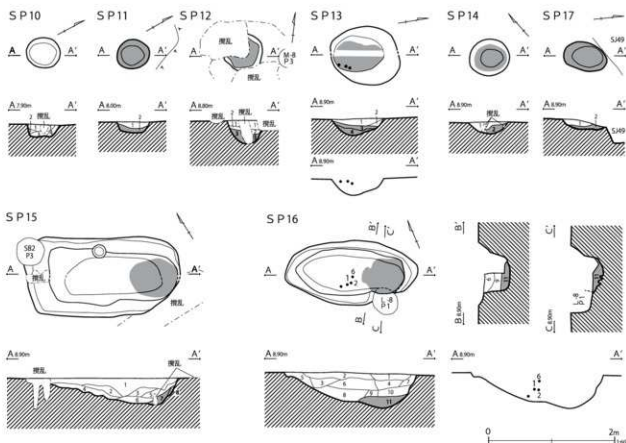
L-8グリッドに位置する。規模は長径1.16m、短径0.93m、深さ0.26m、長軸方位はN-30°-Eである。平面は楕円形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む暗赤褐色土の自然堆積で、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかったが、3点の自然礫が出土した。

第14号炉穴(第182図)

K-7グリッドに位置する。覆土の一部を撓乱に壊されている。規模は長径0.62m、短径0.59m、深さ0.19mである。平面は円形である。掘り込みは浅い。覆土は焼土と暗褐色土の自然堆積で、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第15号炉穴(第182図)

N-7グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡P 3と撓乱に壊されている。規模は長軸2.44m、短軸1.23m、深さ0.42m、長軸方位はN-57°-Wである。平面は隅丸長方形で



- SP10
1 褐色土 ローム粒子・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 灰色粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 しまり強い 粘性弱い
2 褐色土 ローム粒子・灰色粒子・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまり強い 粘性弱い
3 褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子中量 灰色粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)多量 しまり強い 粘性弱い
4 にぶい褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)多量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 しまり強い 粘性弱い

- SP11
1 極暗褐色土 ローム粒子($\phi 0.5$ mm)多量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・炭化物粒子中量 しまり強い 粘性弱い
2 赤褐色土 焼土層 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまり強い 粘性弱い

- SP12
1 暗褐色土 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・白色粒子少量 しまり弱い 粘性強い
2 褐色土 焼土粒子($\phi 5$ mm)中量 しまり強い 粘性強い
3 赤褐色土 焼土層 しまり強い 粘性強い

- SP13
1 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 0.5 \sim 1$ mm)多量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 しまり強い 粘性強い
2 にぶい赤褐色土 ローム由来の土 ローム粒子($\phi 1$ mm)多量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量 しまり強い 粘性強い
3 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)中量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)多量 しまり強い 粘性強い
4 暗赤褐色土 焼土層 しまり強い 粘性強い

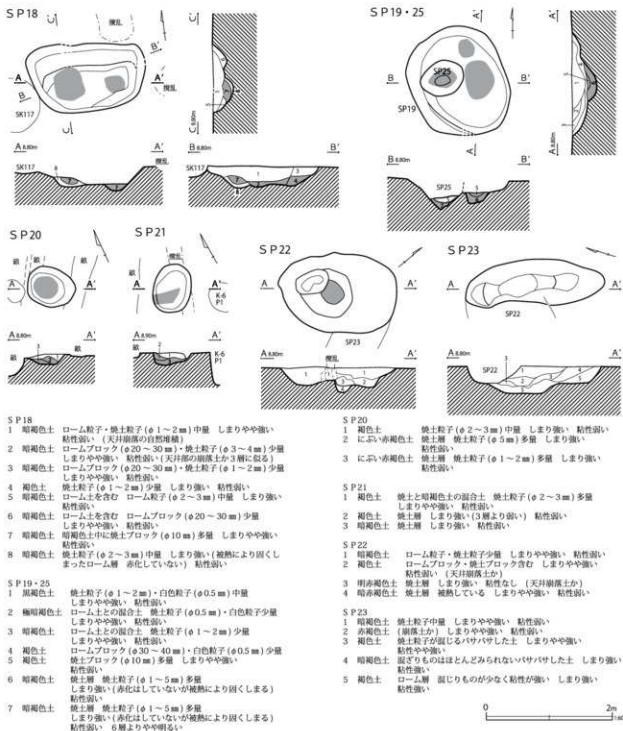
- SP14
1 褐色土 焼土と暗褐色土の混合土 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 しまりや強い 粘性弱い
2 赤褐色土 焼土層と暗褐色土の混合土 しまり強い 粘性なし

- SP15
1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 白色粒子($\phi 0.5$ mm)微量 しまりや強い 粘性弱い
2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子($\phi 1$ mm)・白色粒子($\phi 0.5$ mm)微量 しまりや強い 粘性弱い
3 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1$ mm)1層より多い 少量 しまりや強い 粘性弱い
4 暗褐色土 ローム粒子($\phi 0.5$ mm)微量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い
5 褐色土 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)多量 しまりや強い 粘性弱い
6 褐色土 焼土粒子($\phi 5$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 20 \sim 30$ mm)微量 しまりや強い 粘性弱い
7 赤褐色土 焼土層 しまり強い 粘性強い
8 明赤褐色土 焼土層 しまり強い 粘性強い

- SP16
1 褐色土 ローム土中量 褐色土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い
2 黒褐色土 ローム粒子・白色粒子・焼土粒子($\phi 0.5$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い
3 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)含む しまりや強い 粘性強い
4 明褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・褐色土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い
5 褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 しまり強い 粘性強い
6 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)・白色粒子($\phi 0.5$ mm)多量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量 しまりや強い 粘性強い
7 褐色土 褐色土粒子($\phi 3 \sim 5$ mm)中量 しまりや強い 粘性強い
8 暗褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子・焼土ブロック($\phi 5 \sim 10$ mm)多量 しまりや強い(2・3・6層より強い) 粘性強い
9 褐色土 焼土粒子($\phi 5$ mm)多量 褐色土粒子($\phi 3$ mm)少量 しまり強い 粘性強い
10 褐色土 焼土粒子($\phi 3 \sim 5$ mm)多量 しまりや強い 粘性強い
11 赤褐色土 焼土層 しまり強い 粘性強い

- SP17
1 焼土粒子含む
2 明赤褐色土 焼土層 しまり強い 粘性強い

第182図 第4次調査区炉穴(1)

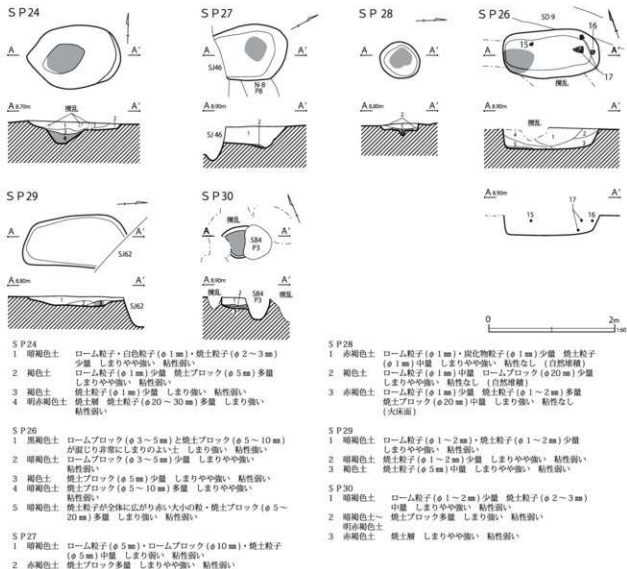


第183図 第4次調査区炉穴(2)

ある。掘り込みは東側が深い。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土や褐色土の自然堆積で、東側の底面から立ち上がりにかけて、焼土層が認められた。遺物は出土しなかった。

第16号炉穴(第182・185図)

L-8グリッドに位置する。L-8グリッドP1に壊されている。規模は長軸2.06m、短軸1m、深さ0.58m、長軸方位はN-64°-W



第184図 第4次調査区炉穴(3)

である。平面はアーモンド形である。掘り込みは東側が深い。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗・褐色土の自然堆積で、東側の底面に厚い火床面が認められた。遺物は野島式の条痕文系土器が出土した。

第17号炉穴(第182図)

M-6グリッドに位置する。規模は長径0.71m、短径0.43m、深さ0.17m、長軸方位はN-15°-Eである。平面は楕円形である。覆土は焼土層を中心とし、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第18号炉穴(第183図)

P-8グリッドに位置する。規模は長軸1.88m、短軸1.09m(推定)、深さ0.34m、長軸方位はN-87°-Wである。平面は隅丸長方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積と崩落土を中心とする。底面に2箇所の火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第19号炉穴(第183・185図)

P-8グリッドに位置する。第25号炉穴が入れ子状に位置する。規模は長軸1.78m、短軸

1.51m、深さ0.4m、長軸方位はN-32°-Wである。平面は楕円形である。覆土は焼土粒子を含む黒・暗褐色土等の自然堆積である。底面に2箇所の火床面が認められた。遺物は浮島式土器の口縁部が出土したが、混入と考えられる。

第20号炉穴（第183図）

D-5グリッドに位置する。全体的に畝跡の畝に壊されている。規模は長軸0.76m、短軸0.62m、深さ0.16m、長軸方位はN-43°-Wである。平面は楕円形である。覆土は焼土粒子を含む褐色土の自然堆積で、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第21号炉穴（第183図）

K-5グリッドに位置する。東側を畝に壊されている。規模は確認範囲で長軸0.78m、短軸0.59m、深さ0.2m、長軸方位はN-49°-Eである。平面は楕円形である。覆土は焼土粒子を含む褐色土の自然堆積で、底面の一部に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第22号炉穴（第183・185図）

H-5グリッドに位置する。掘り込みの一部が第23号炉穴と重複しており、堆積状況から本炉穴が新しい。規模は長軸1.88m、短軸1.26m、深さ0.39m、長軸方位はN-29°-Eである。平面は楕円形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積と崩落土である。南側の底面に火床面が認められた。遺物は鶴ガ島台式の条痕文系土器の胴部片が出土した。

第23号炉穴（第183・185図）

H-5グリッドに位置する。第22号炉穴に壊される。規模は長軸2.22m、短軸0.74m、深さ0.44m、長軸方位はN-23°-Wである。平面はアーモンド形である。覆土は焼土粒子を含む赤・暗褐色土の自然堆積である。底面に火床面は認められなかった。遺物は条痕文系土器の小片が出土した。

第24号炉穴（第184図）

P・Q-8グリッドに位置する。規模は長軸1.49m、短軸1m、深さ0.36m、長軸方位はN-87°-Eである。平面は楕円形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積と考えられる。掘り込みは漏斗状に深くなり、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第25号炉穴（第183図）

P-8グリッドに位置する。第19号炉穴の掘り込み内に入れ子状に造られる。規模は確認範囲で、長軸0.71m、短軸0.56m、深さ0.51m、長軸方位はN-72°-Eである。平面は楕円形である。覆土は第19号炉穴と同様で、底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

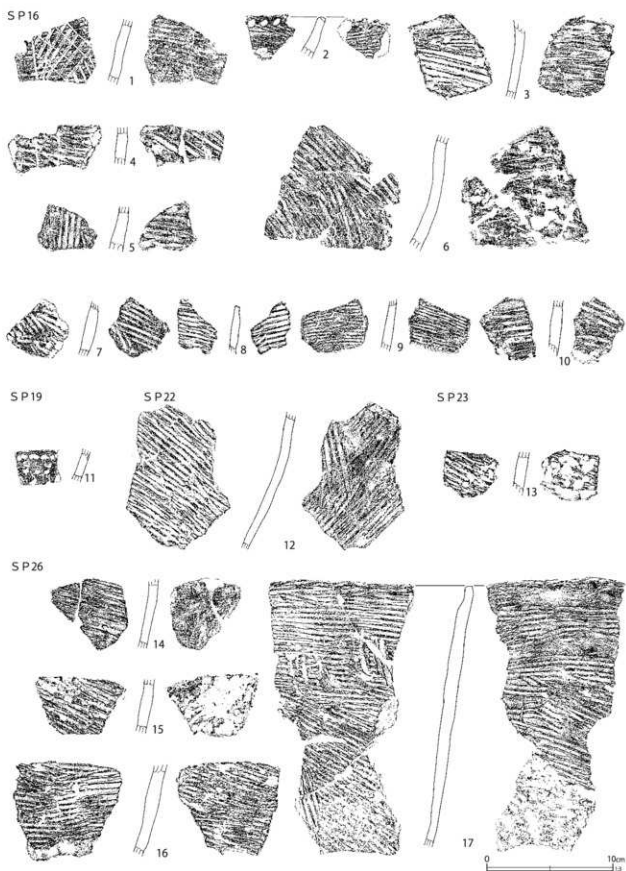
第26号炉穴（第184・185図）

H-5・6グリッドに位置する。第9号溝跡と攪乱により壊される。規模は長軸1.51m、短軸0.75m、深さ0.33m、長軸方位はN-71°-Wである。平面は隅丸長方形である。覆土はロームブロックや焼土ブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積と考えられる。底面の西側に火床面が認められた。遺物は比較的多く、茅山上層式の条痕文系土器が出土した。

17は口縁部から胴部にかけての大型破片で、口唇部は無文で、胴部は上半に横方向、下半に左上から右下方向の条痕が施される。胴部中位には、条痕文の上に縦方向の筋状の条線が3本前後施される。

第27号炉穴（第184図）

N-8グリッドに位置する。第46号住居跡とN-8グリッドP8に壊される。規模は確認範囲で、長軸1.08m、短軸0.9m、深さ0.35m、長軸方位はN-19°-Eである。平面は隅丸長方形であると考えられる。覆土は焼土粒子等を含む暗褐色土の自然堆積である。底面の北



第185図 第4次調査区炉穴出土遺物

側に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第28号炉穴（第184図）

K・L-7・8グリッドに位置する。規模は長軸0.62m、短軸0.57m、深さ0.28m、長軸方位はN-44°-Eである。平面は円形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む赤褐色土の自然堆積である。底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

第29号炉穴（第184図）

H-6グリッドに位置する。第62号住居跡に壊されている。規模は確認範囲で、長軸1.63m、短軸0.85m、深さ0.17m、長軸方位はN-4°-Wである。平面は隅丸長方形である。覆土は浅く、ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。火床面は認められなかった。遺物は出土しなかった。

第30号炉穴（第184図）

K-7グリッドに位置する。第4号掘立柱建物跡P3と攪乱に壊されている。規模は確認範囲で、長軸0.49m、短軸0.37m、深さ0.19m、長軸方位はN-16°-Eである。平面は楕円形であると考えられる。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。底面に火床面が認められた。遺物は出土しなかった。

(3) 土壌

第79号土壌（第186・187図）

O-11グリッドに位置する。東側は調査区域外のため、確認できなかった。規模は長軸1.34m、短軸1.03m（確認範囲）、深さ0.22m、長軸方位はN-21°-Wである。平面は円形である。覆土はロームブロックやローム粒子を含む黒褐色土の自然堆積で、覆土中から多くの縄文土器片が出土した。これらは縄文時代後期（堀之内2式期）を主体とする。いずれも小片で、完形遺物は出土しなかった。

1～8は縄文早期～前期にかけての土器片である。1は早期末、2・3は黒浜式古段階、5は諸磯a式新段階、6は諸磯b式、7は諸磯c式、8は十三菩提式にあたる。

9～11は堀之内1式、12・13は堀之内1式新段階、14～30は堀之内2式の土器である。深鉢を主体とするが、29・30は注口土器の口縁部と注口部である。

31は土器片錘の可能性もあるが、磨滅が激しく不明である。

土壌の形成時期は、縄文時代後期（堀之内2式期）と推定される。

第84号土壌（第188・189図）

O-8グリッドに位置する。規模は長軸2.1m、短軸1.31m、深さ9cm、長軸方位はN-47°-Wである。平面は隅丸長方形である。覆土は浅く、ロームブロックや焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。遺物は縄文時代前期の土製耳飾りが出土した。

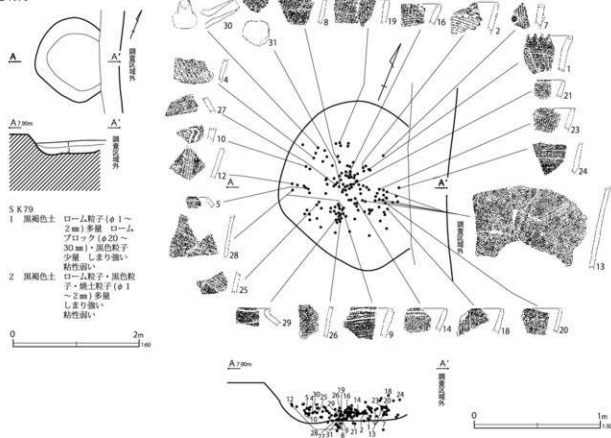
1は表裏面は無文で、ユビナデにより、やや凹ませる程度だが、側面に刻線を施す。

第100・131号土壌（第188～191図）

L-7グリッドに位置する。第100号土壌は、掘り込み内に貝層をもつ小規模な貝塚である。第131号土壌内に入れ子状に造られ、第100号土壌の方が新しい。第100号土壌の規模は長軸0.73m、短軸0.63m、深さ0.37m、長軸方位はN-10°-Wである。平面は楕円形である。覆土は貝のみで、貝層中から黒浜式期の土器片（2）が出土したことから、縄文時代前期中葉に形成された土壌と考えられる。

貝層は単層からなる。貝の総数は7,998点である。貝種は21種（巻貝8種・二枚貝13種）に加えて、微小貝とフジツボが確認された。その詳細な内訳は、第56表・第190図に示したが、アサリ（6,632点・82.92%）が大多数を占める。これにシオフキ（691点・8.64%）、ハマグリ（294

SK79



第186図 第79号土壌遺物出土状況

点・3.68%)、ナミマガシワ(220点・2.75%)が続く。

アサリが多数を占める点は、第21号住居跡の傾向と共通する。ただし、マガキやサルボウが少なく、シオフキやハマグリ、ナミマガシワが多い点は、本土壤の特徴といえよう。

次に殻長分布について、主要貝(アサリ・シオフキ・ハマグリ)を対象に、第57表・第191図を基にみていく。

まず、アサリ(1,940点)は、平均殻長35.7mm(標準偏差4.6)で、殻長35mm~39.9mmが706点と最も多い。また、これよりもやや小さい殻長30mm~34.9mmが、694点と次いで多い。

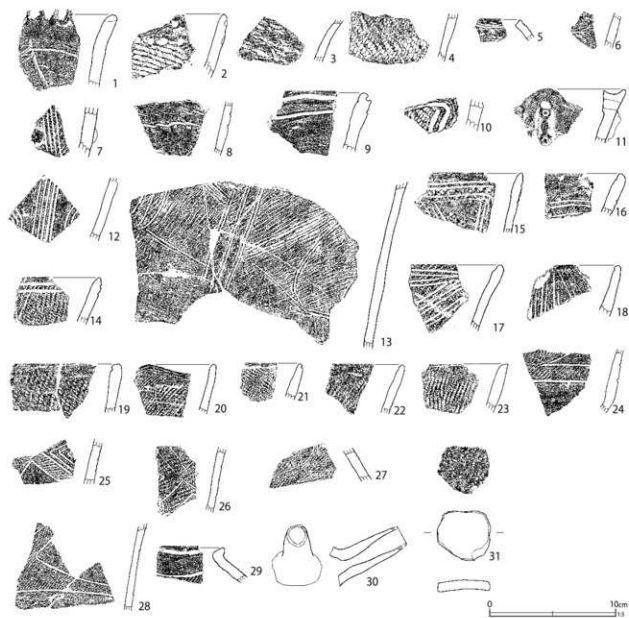
シオフキ(279点)は、平均殻長37.6mm(標準偏差7.5)で、殻長35mm~39.9mmが126点

と最も多い。

ハマグリ(115点)は、平均殻長38.8mm(標準偏差9.1)で、殻長45mm~49.9mmが43点と最も多い。ハマグリは第21号住居跡と同様に、標準偏差の幅が大きく、他の貝よりも殻長のばらつきがみられた。

これら3種の貝の平均殻長は、第21号住居跡で検出された一群よりも小さい。第21号住居跡では、アサリ40.7mm、シオフキ42mm、ハマグリ54.1mmと大きい。両遺構では母数が大きく異なるため、単純に比較はできないが、同時期に貝種と平均殻長に差異がみられる点は、注意を要する。

第131号土壌は、長軸0.95m、短軸0.8m、深さ0.92m、長軸方位はN-10°-Wである。平面は円形で、掘り込みは深く円筒形である。



第187図 第79号土壇出土遺物

覆土はローム粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。遺物は諸磯a式期の口縁部片(4)や条痕文系土器の小片(5・6)が出土した。5・6は埋没中の混入遺物と考えられる。

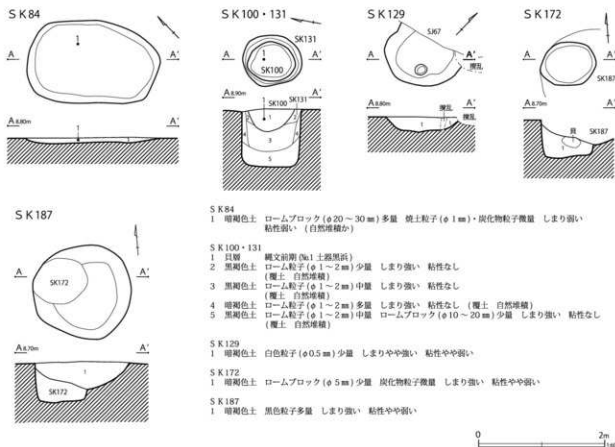
第100号土壇との関係は、第131号土壇が埋没した後に、再度掘り返され、貝層が形成されたと考えられる。

第131号土壇の時期を示す遺物は出土して

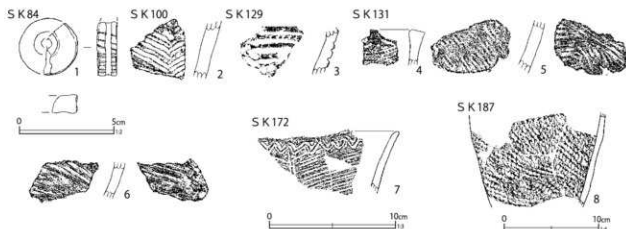
いないが、第100号土壇の貝層が、入れ子状を呈し、この土壇を再利用している状況から、前期段階(黒浜式以前)に形成されたと推定される。

第129号土壇(第188・189図)

P-8グリッドに位置する。北側を第67号住居跡と攪乱に壊されている。規模は確認範囲で、長軸1.03m、短軸0.92m、深さ0.45m、長



第188図 第84・100・129・131・172・187号土坑



第189図 第84・100・129・131・172・187号土坑出土遺物

軸方位はN-45°-Eである。平面は楕円形と考えられる。覆土は白色粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。遺物は諸磯B式古段階の深鉢片(3)が出土した。

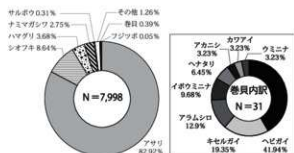
第172号土坑 (第188・189図)

F-4グリッドに位置する。第187号土坑に壊されており、遺存状況は良くない。規模は確認範囲で、長軸0.88m、短軸0.72m、深さ

第4次調査

第56表 第100号土壌貝類統計表(第190図)

目 種	ブロック	合計	貝種の割合
ヘビガイ		13	0.16%
キセル		6	0.08%
アラムシロ		4	0.05%
イボウミナ		3	0.04%
ヘナタリ		2	0.03%
アカニシ		1	0.01%
カワアイ		1	0.01%
ウミナ		1	0.01%
アサリ		6632	82.92%
シオフキ		691	8.64%
ハマグリ		294	3.68%
ナミマガシワ		220	2.75%
サルボウ		25	0.31%
イチヨウシラトリ		18	0.23%
マテガイ		18	0.23%
オオノガイ		16	0.20%
カガミガイ		13	0.16%
マガキ		7	0.09%
ハイガイ		1	0.01%
オキシジミ		2	0.03%
ウネナシトマヤガイ		3	0.04%
稚小貝		23	0.29%
フジツボ		4	0.05%
合計		7998	100%

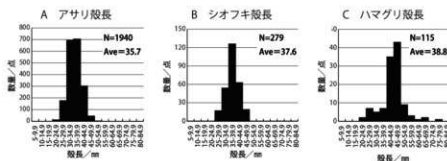


第190図 第100号土壌貝種組成

第57表 第100号土壌出土貝類殻長分布(第191図)

殻長分布 (mm)	0.0	5.0	10.0	15.0	20.0	25.0	30.0	35.0	40.0	45.0	50.0	55.0	60.0	65.0	70.0	75.0	80.0	小計	平均殻長	標準偏差
アサリ	-4.9	-9.9	-14.9	-19.9	-24.9	-29.9	-34.9	-39.9	-44.9	-49.9	-54.9	-59.9	-64.9	-69.9	-74.9	-79.9	-84.9	1940	35.7	4.6
シオフキ						17	54	126	63	19								279	37.6	7.3
ハマグリ					2	7	5	7	35	43	9	3	1	2			1	115	38.8	9.1

※本表には、出土したブロック・面が明確で、かつ殻長を計測できた貝のみを掲載している。



第191図 第100号土壌における主要貝の殻長分布図

0.42m、長軸方位はN-86°-Eである。平面は楕円形である。覆土はロームブロックや炭化物粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。この層の上層に貝が少量検出された。

貝は6種・162点で、その内訳は、アサリ97点、マガキ35点、シオフキ14点、オオノガイ13点、カガミガイ2点、オキシジミ1点である。アサリが60%ほどと、やや低い割合だが、検

出された貝の構成や割合は、第21号住居跡に通じる特徴といえよう。

遺物は諸磯a式の深鉢片(7)が出土した。

貝層は小規模なものの、縄文時代前期に形成された土壌と考えられる。

第187号土壌(第188・189図)

F-4グリッドに位置する。第172号土壌を壊す。規模は長軸1.56m、短軸1.50m、深さ0.81m、長軸方位はN-63°-Wである。平面は円形である。覆土は黒色粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。遺物は諸磯a式新段階の深鉢(8)が出土した。

(4) グリッド・一括出土遺物

各グリッドから出土した遺物ではあるが、帰属する遺構が不明な遺物、および帰属するグリッドも不明な遺物のうち、縄文時代の石器について取り上げた(第192~194図)。

1・2はポイントである。1はF-4グリッドから出土した。中段から先端側を欠損する。木葉形であったと考えられ、両側縁に細かな調整剥離を施す。横長の剥片を横置きに使用しており、表面に主要剥離面を残している。現存する長さ3.1cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ4.7gである。石材は青灰色のチャートを使用する。

2は第133号土壌から出土した。木葉形の完形品で、ごく短い茎部を持つ。両側縁は細かな調整剥離で成形され、裏面に節理面を残している。長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重さ6.0gである。石材は青灰色のチャートを使用する。

3~8は石鏃である。いずれも無茎で、3~7は凹基、8は平基である。3はE-5グリッドから出土した。横長の剥片を縦置きに使用し、裏面に主要剥離面を残している。右側縁は両面剥離で直線的に成形するが、先端部のみ両面加工で、中段に挟りを持つ。左側縁は長さ3.0

cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ2.0gである。石材は安山岩を使用する。

4は第133号土壌から出土した。先端部を欠損する。両側縁は緩やかな外反りのカーブを描き、基部はV字に深く挟入する。現存する長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.4gである。石材は青灰色のチャートを使用する。

5は第51号住居跡A区から出土した。ごく緩やかな凹基ないし平基の鏃で、両側縁が緩やかに外反する正三角形で、先端部は鈍角となる。長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ1.4gである。石材は頁岩を使用する。

6は第3号掘立柱建物跡のP6から出土した。正三角形のプロポーションで、基部は緩やかなV字に挟入する。長さ1.7cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ0.8gである。石材は赤褐色のチャートを使用する。

7は第42号住居跡から出土した。完形品で、正三角形のプロポーションを持ち、先端部は鋭角、基部は半円形に挟入する。長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gである。石材は青灰色のチャートを使用する。

8は表採品である。いびつな正三角形で、右脚が破損している可能性がある。先端部は鈍角である。長さ2.0cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重さ1.0gである。石材は黒曜石を使用する。

9・10は石鏃である。9は第47号住居跡から出土した。軸部のみ残存するが、この状態で使用されていた可能性もある。両側縁とも両面剥離で直線的に成形され、先端部は鈍角である。長さ3.7cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重さ1.6gである。石材は青灰色のチャートを使用する。

10はE-5グリッドから出土した。三日月型のつまみ部で、軸部を欠損する。横長の剥片を縦置きに使用し、表面に主要剥離面、裏面に自然面を残す。現存する長さ5.0cm、幅3.6

cm、厚さ0.9 cm、重さ14.2 gである。石材は赤玉石を使用する。

11～13はスクレイパーである。11は第62号住居跡B区から出土した。水滴形のプロポジションで、下端部から両側縁にかけて両面加工の刃部としている。長さ6.0 cm、幅4.3 cm、厚さ1.8 cm、重さ34.9 gである。石材は頁岩を使用する。

12は第53号住居跡G区から出土した。横長の剥片を縦置きに使用し、主に表面の調整剥離で楕円形のプロポジションをつくり出している。裏面に自然面、上端部に打面を残している。全体に使用に伴う摩耗がみられ、部分的に光沢を生じている。長さ3.6 cm、幅4.5 cm、厚さ1.2 cm、重さ19.5 gである。石材はホルンフェルスを使用する。

13は第47号住居跡から出土した。菱形の刃部に短いつまみ部が付属するいわゆる石匙で、裏面に自然面を残している。長さ3.5 cm、幅4.4 cm、厚さ1.1 cm、重さ11.6 gである。石材は青灰色のチャートを使用する。

14・15は磨製石斧である。14はP11から出土した。刃部先端のみが残存する。現存する長さ4.3 cm、幅3.6 cm、厚さ1.3 cm、重さ16.7 gである。石材は緑色岩を使用する。

15は第62号住居跡A区から出土した。刃部から右側縁部にかけての部分のみが残存するが、肉厚で断面楕円形の乳棒状の石斧であったものとみられる。現存する長さ7.7 cm、幅3.5 cm、厚さ3.2 cm、重さ104.0 gである。石材は緑色岩を使用する。

16～22は打製石斧である。16～19は楕形、20～22は短冊形である。

16は第178号土壌から出土した。粗大な石斧で、扁平な礫を素材とし、背腹および側縁部に自然面を残す。主に背面の調整加工で鈍角の刃部をつくり出している。長さ12.7 cm、幅

8.0 cm、厚さ4.0 cm、重さ495.8 gである。石材は黒色頁岩を使用する。

17は第62号住居跡C区から出土した。刃部欠損し、腹側に打割面、背面から左側縁部に自然面を残している。現存する長さ7.6 cm、幅5.1 cm、厚さ1.9 cm、重さ110.8 gである。石材はホルンフェルスを使用する。

18は第61号住居跡から出土した。腹面に扁平な自然面を残し、背面に加工が集中する肉厚の亀甲形の石斧である。また、自然面には擦痕が観察され、磨石としての二次利用が想定される。長さ8.0 cm、幅4.7 cm、厚さ2.1 cm、重さ53.9 gである。石材は安山岩を使用する。

19は第59号住居跡D区から出土した。小型の石斧で、表面のみ2回程程度の剥離で鈍角の刃部をつくり出している。長さ6.6 cm、幅3.7 cm、厚さ2.0 cm、重さ49.5 gである。石材はシルト岩を使用し、全体に風化が著しい。

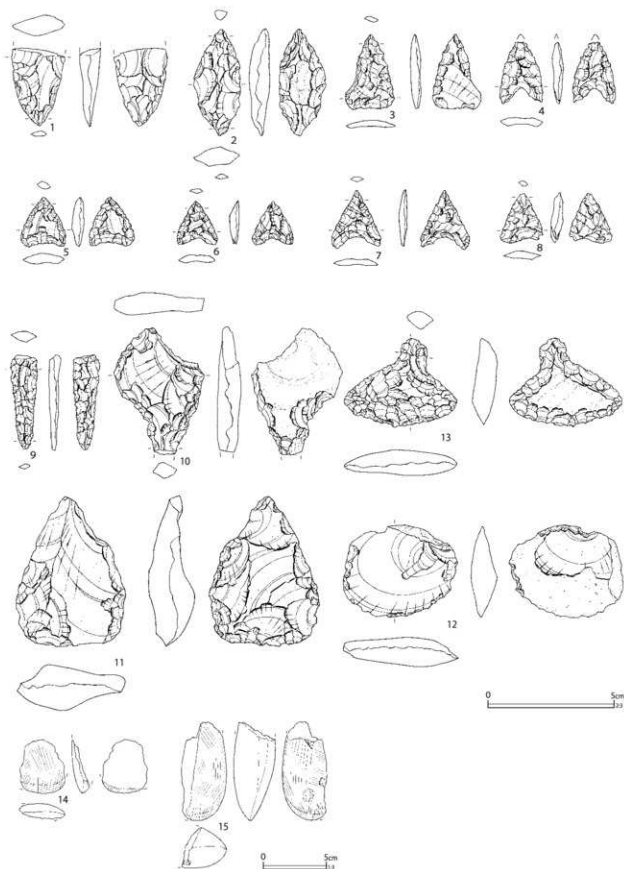
20は第57号住居跡B区から出土した。小型かつ肉厚の石斧で、腹面および左側縁部に自然面を残す。長さ6.9 cm、幅4.7 cm、厚さ2.3 cm、重さ71.6 gである。石材は流紋岩を使用する。

21は第63号住居跡から出土した。小型扁平で、背面からの簡単な加工で鈍角の刃部をつくり出している。長さ7.8 cm、幅4.8 cm、厚さ1.7 cm、重さ94.4 gである。石材は安山岩を使用し、全面に風化がみられる。

22は第40号住居跡A区から出土した。やや寸詰まりの台形で、背面から基部両側縁にかけて自然面を残し、背面のみ加工を施している。刃部は鈍角である。長さ7.0 cm、幅5.6 cm、厚さ1.5 cm、重さ80.6 gである。石材はホルンフェルスを使用する。

23～26は凹石である。

23は第178号土壌から出土した。片面のみ使用し、擦痕と複数の凹孔を持つ。現存する長さ7.8 cm、幅6.0 cm、厚さ6.7 cm、重さ279.4



第192図 第4次調査区グリッド出土石器(1)

gである。石材は安山岩を使用する。

24は第62号住居跡から出土した。石皿片を転用したもので、表裏に複数の凹孔を持つ。現存する長さ11.0 cm、幅8.0 cm、厚さ3.6 cm、重さ437.0 gである。石材は安山岩を使用する。

25は第54号住居跡G区から出土した。やはり磨石を転用したもので、両面に複数の凹孔を持つ。現存する長さ5.4 cm、幅7.6 cm、厚さ6.5 cm、重さ374.0 gである。石材は閃緑岩を使用する。

26は第62号住居跡A区から出土した。楕円形の磨石を転用したもので、全体の四分の一程度が残存するものとみられる。表裏に磨面を持ち、それぞれ1～2か所の凹孔を持つ。現存する長さ6.0 cm、幅4.5 cm、厚さ3.6 cm、重さ132.5 gである。石材は安山岩を使用する。

27～33は磨石である。27～29は扁平な円礫の表裏二面を使用するものである。27はD4グリッドから出土した。全体の二分の一程度が残存するものとみられる。現存する長さ8.7 cm、幅4.3 cm、厚さ3.9 cm、重さ147.8 gである。石材は安山岩を使用する。

28は第62号住居跡B区から出土した。側縁部に叩打痕が観察されることから、扁平な礫をある程度整形したうえで表裏二面を使用したものとみられる。長軸側中段から下を折損している。また、上端から左側縁部にかけて細

かな剥離が集中しており、叩き石に転用したものと考えられる。現存する長さ4.4 cm、幅5.8 cm、厚さ2.7 cm、重さ98.2 gである。石材は砂岩を使用する。

29は第62号住居跡B区から出土した。扁平な礫の表裏二面を使用するが、長軸両端を欠損する。現存する長さ4.7 cm、幅7.3 cm、厚さ3.8 cm、重さ174.4 gである。石材は砂岩を使用する。

30は第57号住居跡から出土した。楕円形の礫を全面使用したものとみられるが、破損が著しい。現存する長さ8.2 cm、幅6.9 cm、厚さ5.1 cm、重さ270.5 gである。石材は多孔質安山岩を使用する。

31は第45号住居跡A区から出土した。全体の三分の一程度が残存するものとみられる。現存する長さ7.9 cm、幅4.8 cm、厚さ3.9 cm、重さ185.6 gである。石材は安山岩を使用する。

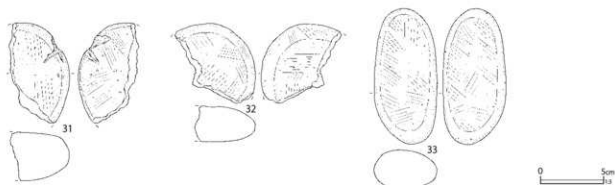
32は第42号住居跡から出土した。全体の三分の一程度が残存するものとみられる。現存する長さ6.4 cm、幅6.3 cm、厚さ2.9 cm、重さ151.7 gである。石材は安山岩を使用する。

33は第46号住居跡B区から出土した。完形品で、長楕円形の礫の表裏二面を使用する。長さ10.6 cm、幅5.0 cm、厚さ3.0 cm、重さ259.4 gである。石材は安山岩を使用する。



第193図 第4次調査区グリッド出土石器(2)

第4次調査



第194図 第4次調査区グリッド出土石器(3)

第58表 第4次調査区グリッド出土石器観察表 (第192～194図)

番号	種別	器種	大きさ・重さ	備考	図版
1	石製品	ポイント	長さ[3.1] 幅2.1 厚さ0.9 重さ4.7g	F4 チャート	174-1
2	石製品	ポイント	長さ4.3 幅1.8 厚さ0.8 重さ6.0g	SK133 チャート	174-1
3	石製品	石鏃	長さ3.0 幅1.9 厚さ0.4 重さ2.0g	E5 安山岩	174-1
4	石製品	石鏃	長さ[2.5] 幅1.7 厚さ0.5 重さ1.4g	SK133 チャート	174-1
5	石製品	石鏃	長さ1.9 幅1.8 厚さ0.5 重さ1.4g	SJ51A 頁岩	174-1
6	石製品	石鏃	長さ1.7 幅1.6 厚さ0.4 重さ0.8g	SB3P6 チャート	174-1
7	石製品	石鏃	長さ2.4 幅1.9 厚さ0.4 重さ1.1g	SJ42 チャート	174-1
8	石製品	石鏃	長さ2.0 幅1.7 厚さ0.5 重さ1.0g	表採 黒曜石	174-1
9	石製品	石鏃	長さ3.7 幅1.1 厚さ0.5 重さ1.6g	SJ47 チャート	174-1
10	石製品	石鏃	長さ[5.0] 幅3.6 厚さ0.9 重さ14.2g	E5 赤玉石	174-1
11	石製品	スクレイパー	長さ6.0 幅4.3 厚さ1.8 重さ34.9g	SJ62B 頁岩	174-1
12	石製品	スクレイパー	長さ3.6 幅4.5 厚さ1.2 重さ19.5g	SJ53G ホルンフェルス	174-1
13	石製品	スクレイパー	長さ3.5 幅4.4 厚さ1.1 重さ11.6g	SJ47 Na.5 チャート	174-1
14	石製品	磨製石斧	長さ[4.3] 幅[3.6] 厚さ[1.3] 重さ16.7g	P11 緑色岩	174-1
15	石製品	磨製石斧	長さ[7.7] 幅[3.5] 厚さ[3.2] 重さ104.0g	SJ62A 緑色岩	174-1
16	石製品	打製石斧	長さ12.7 幅8.0 厚さ4.0 重さ495.8g	SK178 黒色頁岩	174-2
17	石製品	打製石斧	長さ7.6 幅5.1 厚さ1.9 重さ110.8g	SJ62C ホルンフェルス	174-2
18	石製品	打製石斧	長さ8.0 幅4.7 厚さ2.1 重さ53.9g	SJ61 Na.3 安山岩	174-2
19	石製品	打製石斧	長さ6.6 幅3.7 厚さ2.0 重さ49.5g	SJ39D シルト岩	174-2
20	石製品	打製石斧	長さ6.9 幅4.7 厚さ2.3 重さ71.6g	SJ57B 流紋岩	174-2
21	石製品	打製石斧	長さ7.8 幅4.8 厚さ1.7 重さ94.4g	SJ63 安山岩	174-2
22	石製品	打製石斧	長さ7.0 幅5.6 厚さ1.5 重さ80.6g	SJ40A ホルンフェルス	174-2
23	石製品	回石	長さ[7.8] 幅[6.0] 厚さ[6.7] 重さ279.4g	SK178 安山岩	174-2
24	石製品	回石	長さ[11.0] 幅[8.0] 厚さ[3.6] 重さ437.0g	SJ62 Na.10 安山岩	174-2
25	石製品	回石	長さ[5.4] 幅[7.6] 厚さ6.5 重さ374.0g	SJ54G 閃緑岩	174-2
26	石製品	回石	長さ[6.0] 幅[4.5] 厚さ[3.6] 重さ132.5g	SJ62A 安山岩	174-2
27	石製品	磨石	長さ[8.7] 幅[4.3] 厚さ[3.9] 重さ147.8g	D4 安山岩	174-2
28	石製品	磨石	長さ[4.4] 幅[5.8] 厚さ2.7 重さ98.2g	SJ63B 砂岩	174-2
29	石製品	磨石	長さ[4.7] 幅[7.3] 厚さ3.8 重さ174.4g	SJ63B 砂岩	174-2
30	石製品	磨石	長さ[8.2] 幅[6.9] 厚さ[5.1] 重さ270.5g	SJ57 多孔質安山岩	174-2
31	石製品	磨石	長さ[7.9] 幅[6.8] 厚さ[3.9] 重さ185.6g	SJ45A 安山岩	174-2
32	石製品	磨石	長さ[6.4] 幅[6.3] 厚さ2.9 重さ151.7g	SJ42 安山岩	174-2
33	石製品	磨石	長さ10.6 幅5.0 厚さ3.0 重さ259.4g	SJ46B 安山岩	174-2

2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

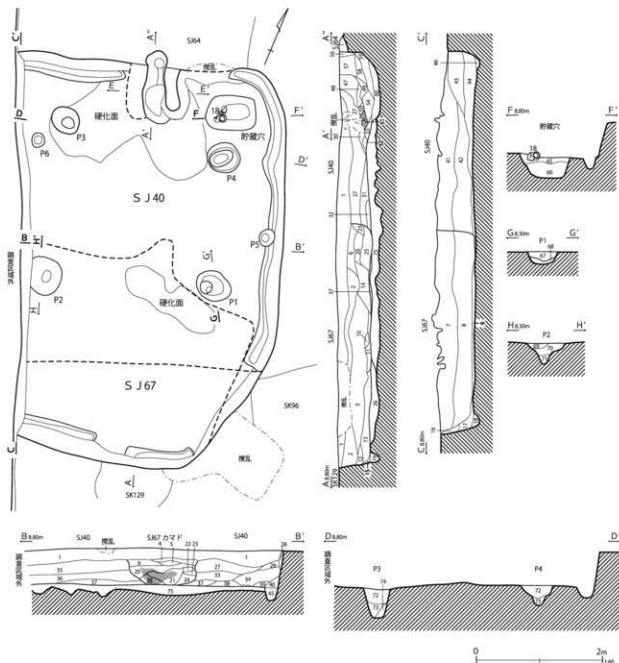
第40・67号住居跡（第195～202図）

本住居跡は、調査当時1軒の住居跡として調査を行なった。しかし、その後、2軒の住居跡と再認識した。

O-7・8、P-8グリッドに位置する。西側

は調査区域外のため確認できなかった。第40号住居跡は第64号住居跡を壊し、第83号土壌に壊されている。第67号住居跡は第40号住居跡と第96号土壌を壊し、第129号土壌に壊されている。

第40号住居跡の規模は、推定範囲で長軸



第195図 第40・67号住居跡（1）

S J 40・67	
1 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 焼土粒子($\phi 3$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
S J 67	
2 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 焼土粒子($\phi 2$ mm)・ 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積・埋没層土)
3 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)多量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm) 中量 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
4 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm) 少量 白色粘土粒子($\phi 3$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
5 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 白色粘土粒子($\phi 3 \sim 5$ mm)多量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
6 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
7 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
8 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
9 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ロームブロック($\phi 5 \sim 10$ mm) 多量 焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
10 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒 子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
11 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 焼土粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
12 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 3 \sim 4$ mm)多量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積 埋没層土)
13 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 焼土粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
14 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ 炭化物粒子($\phi 1$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
15 褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ロームブロック($\phi 20$ ~ 30 mm)多量 しまりや強い 粘性なし (埋没層土)
16 暗褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土・埋没層土)
17 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 焼土粒子($\phi 1$ mm)・ 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
18 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
19 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ロームブロック($\phi 50 \sim 100$ mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (埋没層土)
S J 67 カマド	
20 にい・赤褐色土	白色粘土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 5 \sim 10$ mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (前床土)
21 暗褐色土	焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 土割面が見える しまり強い 粘性なし (埋没層土)
22 にい・褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 白色粘土粒子($\phi 20$ mm) 前後)多量 しまりや強い 粘性なし (右側)
23 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土粒子($\phi 10$ mm前後) 少量 しまりや強い 粘性なし (右側)
24 にい・褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 白色粘土粒子($\phi 20$ mm) 前後)多量 しまりや強い 粘性なし (右側)
25 にい・赤褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 白色粘土粒子($\phi 10 \sim 20$ mm) 前後)多量 しまりや強い 粘性なし (左側)
S J 67 竈床	
26 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 ロームブロック($\phi 50$ ~ 100 mm)少量 しまりや強い 粘性なし (竈床)

S J 40	
27 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
28 黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 ロームブロック($\phi 20$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (埋没層土)
29 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1$ mm)少量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
30 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土粒 子($\phi 1$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
31 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
32 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 ロームブロック($\phi 20$ mm)・焼 土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまり や強い 粘性なし (自然堆積)
33 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・ 炭化物粒子($\phi 1$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 5$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
34 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 5$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
35 黒褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
36 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 ロームブロック・ 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
37 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
38 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 ロームブロック($\phi 40$ mm)・焼 土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
39 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)
40 褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 しまりや強い 粘性なし (埋没層土)
41 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 炭化 物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
42 黒褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化 物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
43 黒褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 2$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
44 暗褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・ロームブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)中 量 焼土粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
45 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (埋没層土)
46 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 焼土粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒子 ($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
S J 40 貯蔵穴	
65 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)中量 ロームブロック($\phi 20 \sim 30$ mm)・ 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い (壁 カマド由来の崩落土と自然堆積の混じった土)
66 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)少量 ロームブロック($\phi 20 \sim 30$ mm) 微量 しまり強い 粘性弱い (自然堆積 面じり物が少ない)
S J 40 ビット1～4	
67 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ロームブロック($\phi 20$ mm)少量 炭化物粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりや強い 粘性弱い (自然堆積)
68 にい・黄褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 ロームブロック($\phi 20$ mm)微量 しまりや強い 粘性弱い (自然堆積)
69 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 ロームブロック($\phi 20$ mm)・ 焼土粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い (自然堆積)
70 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりや強い 粘性弱い (自然堆積)
71 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまり強い 粘性弱い (掘立柱の埋没土)
72 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 ロームブロック($\phi 5$ mm)微量 しまりや強い 粘性なし (柱穴覆土 自然堆積)
73 黒褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)少量 しまりや強い 粘性なし (柱穴覆土 自然堆積)
74 暗褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 しまりや強い 粘性なし (柱穴覆土 自然堆積)
S J 40 竈床	
75 褐色土	ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 ロームブロック($\phi 40 \sim 50$ mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (竈床)

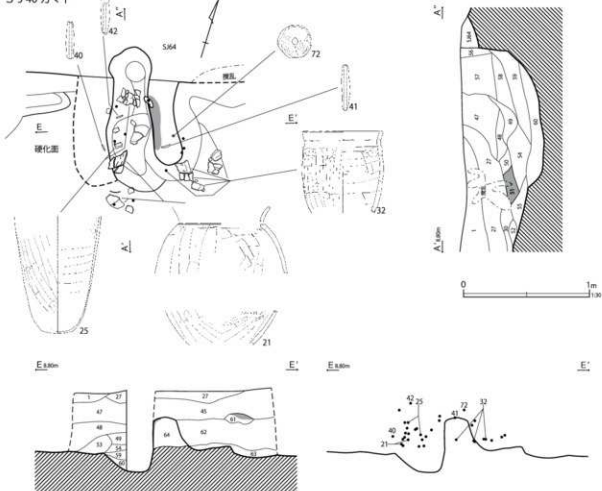
第196図 第40・67号住居跡(2)

4.97m、短軸4.28m、深さ0.6m、主軸方位はN-
20°-Wである。平面は方形と推定される。覆土
はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自
然堆積である。床面には掘り方と貼床を確認した。

貼床は全面に及び、褐色土が敷かれており、カマ
ド付近は特に硬化していた。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ビットが確
認された。カマドは長軸1.17m、短軸1.02m、深

S J 40 カマド



カマド

- 47 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土ブロック(10mm)中量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量
しまりやや強い 粘性なし (覆土)
- 48 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 5$ mm)少量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)中量 しまりやや強い 粘性なし (覆土)
- 49 黒褐色土 黒褐色土主体 ローム粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
- 50 灰黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 10$ mm)少量 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)微量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土)
- 51 赤褐色土 焼土粒子($\phi 5 \sim 10$ mm)多量 炭化物粒子($\phi 3$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 3$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土) 最も焼熟して焼土化している
- 52 黄褐色土 白色粘土ブロック しまりやや強い 粘性ややあり (カマド崩落土)
- 53 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ロームブロック($\phi 10$ mm)・焼土粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
- 54 暗赤褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土)
- 55 黒褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)

- 56 黒褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (標道内堆積土)
- 57 にぶい赤褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)中量 焼土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 5 \sim 10$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土) 焼熟してロームが焼土化している
- 58 暗赤褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土)
- 59 黒褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (標道内堆積土+灰層)
- 60 褐色土 焼土粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりやや強い 粘性なし (灰層)
- 61 にぶい黄褐色土 焼土粒子($\phi 5$ mm)中量 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 白色粘土ブロック($\phi 10$ mm)極めて多量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土)
- 62 暗褐色土 焼土粒子($\phi 2 \sim 2$ mm)中量 焼土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)・炭化物粒子($\phi 3$ mm)・白色粘土粒子($\phi 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
- 63 褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm) 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまり強い 粘性なし (自然堆積)
- 64 にぶい黄褐色土 灰白色粘土主体 焼熟面側が赤く焼けている (カマド壁)

第197図 第40号住居跡

さ0.66mで、北壁の中央からやや東寄りに位置する。その構造は煙道から煙出しにかけて壁面を掘り込み、天井部と袖部は白色粘土を用いて構築

している。覆土はローム粒子や焼土粒子、炭化物粒子等を含む黒褐色土で、崩落土と考えられる。カマド内部はよく焼けており、底面には灰層が確

認できた。この覆土中から、土師器甕(21・25・28)等が出土した。このカマドは、袖の西側に白色粘土の堆積が認められた。廃棄時に意図的に破壊された可能性もある。

貯蔵穴は長軸0.81m、短軸0.56m、深さ0.4mで北東隅角に位置する。平面は隅丸長方形である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土の自然堆積(カマド崩落土の流入土を含む)と考えられる。覆土中から土師器甕(18・19)が出土した。

壁溝はカマド周辺と南壁を除いて全周する。幅0.22m×0.37m、深さ5cm～16cmで、覆土は住居跡と同様である。

ピットは6基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.57m×0.47m×0.2m、P2は0.62m×0.56m×0.34m、P3は0.48m×0.42m×0.47m、P4は0.53m×0.48m×0.33m、P5は0.3m×0.25m×0.23m、P6は0.25m×0.2m×0.03mである。P1～P4は主柱穴である。覆土は黒・暗褐色土の自然堆積である。P5とP6は規模も小さく、P5は壁材を支える支柱穴、P6はP3に関わる補助穴とも想定されるが詳細は不明である。

第67号住居跡は、第40号住居跡の南側に位置する。この住居跡は事前に把握できず、第40号住居跡として調査を進めた。しかし、A-A'ラインとB-B'ラインの中央で確認した焼土・粘土層が、カマドであることを調査中に再認識し、図上復元を行った。

推定範囲は長軸3.06m、短軸3.82m、深さ0.57m、主軸方位は真北を向く。平面は南北軸の短い長方形と推定される。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面は第40号住居跡の床を再度掘り返し、一部貼床(第26層)を造成している。カマド周辺は硬化していた。

床面からはカマド、壁溝が確認された。カマドは規模は不明だが、北壁中央からやや東に位置す

る。A-A'ラインとB-B'ラインの土層から、カマドの構築に白色粘土を用いていたことがわかる(第22～25層)。また、第21層中には焼土も認められ、一定期間使用されていたことが窺われる。内部からは土師器の細片が出土した。

壁溝は南壁に部分的に確認された。幅0.22m×0.43m、深さ6cm～17cmである。覆土はローム粒子を含む黒・暗褐色土が堆積していた。

ピットは確認されなかった。

遺物は第40号住居跡として記録した。ただし、遺構の堆積状況から、第67号住居跡の範囲内から出土した遺物は、本来、第67号住居跡に帰属する遺物と考えられる。それを踏まえ、出土状況を見ると、第40号住居跡では、カマド内と床面北側に集中して分布する。それに対し第67号住居跡の範囲内では、遺物は散在している。

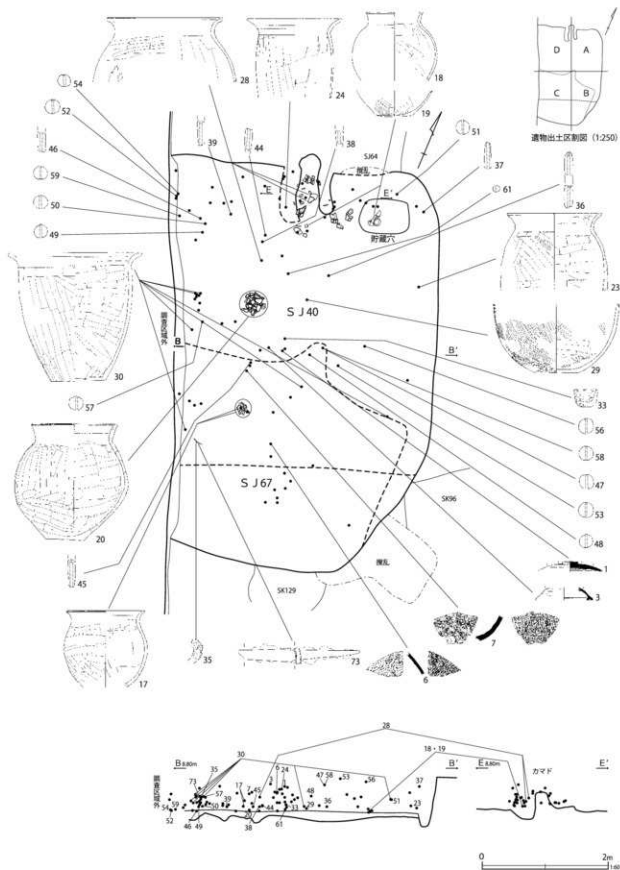
掲載遺物のうち、1・3・19・24・36～42・44・45・49～53・56～58は第40号住居跡の覆土から出土した。21・25・28は第40号住居跡カマド崩落土中から出土した。20・23・29・46・54・59・61は第40号住居跡の床面から出土した。18は第40号住居跡貯蔵穴から出土した。土鍾と土玉は第40号住居跡から多く出土した。

一方、6・7・17・30・47・48・73は第67号住居跡の覆土から出土した。30は第40号住居跡と第67号住居跡の覆土出土遺物が接合した。両住居跡では、主に古墳時代後期以降の土師器杯・高杯・甕・甌・ミニチュア土器・土製支脚・土鍾・土玉・焼成粘土塊・貝果欠痕泥岩・白玉、奈良時代の須恵器蓋・長頸壺・甕が出土した。

1～3は須恵器蓋である。1は端部を欠損している。擠み部分はやや扁平。2はかえり付蓋の端部である。1・2は新治窯産。3のかえり付蓋は、受け部とかえり部がほぼ水平で、天井部は弓張状に強くカーブする。胎土は緻密で、湖西窯産。

4は長頸甌か長頸壺の頸部である。湖西窯産か。

5は甕の胴部下半部である。外面平行タタキ、



第198図 第40・67号住居跡遺物出土状況

内面は目の細かい同心円文当て具痕が残る。6の甕は薄手で内面の同心円文当て具痕は幅広い。

7は瓶類の底部と推定される。胎土に細かい白色粒子が混じり、器面に細かなクラックが入る。こうした特徴から北総産須恵器の可能性が考えられる。

8の甕は器面にカキメがみられる。

9は坏の底部で、外面体部下半にヘラケズリが施され、三和窯産の可能性がある。

10～15は土師器坏である。10・11は坏身模倣坏、12は坏蓋模倣坏、13は半球形坏、15は有段口縁坏である。10は口縁部がやや内傾しつつ短く立ち上がる。内外面に横方向のミガキを施し、内面には黒漆の痕跡が認められる。11は口径が小さく、屈曲部はわずかに内傾する程度である。内面にミガキが放射状に施文される。12は口縁部を強くヨコナデし、凹凸が目立つ。13は器高が低く、口径が大きい。口唇部はわずかに内傾する。14は口縁部が外に開き、口唇部が外反する。器壁は厚い。15の有段口縁坏は段部が不明瞭で、内面に黒漆の痕跡がみられる。

16は高坏の接合部である。脚部は接合部分から大きく外に広がることから、短脚と考えられる。

17～29は甕である。17は小型の球胴甕で口唇部を面取りし、球胴形である。外面はヘラケズリの後に、胴部中央のみ横方向のナデが施される。18・19も小型の球胴甕で、同一個体と思われる。器壁は比較的薄手で、口縁部はやや外反しつつ直立する。口唇部は丸く突出する。頸部は強くヨコナデがなされ、屈曲部が明瞭である。胴部下半にはミガキが施される。20の球胴甕は口唇部を面取りし、頸部はヨコナデにより屈曲が明瞭である。器壁は厚く、胴部中央に最大径がくるが、口縁部と底部の軸が揃わずゆがむ。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。21の球胴甕は肩が張る。それに対して22は胴部上半が直線的である。23の長胴甕は口唇部を面取りし、口縁部は直立した

のちに外反する。口径に対し胴部最大径の方が大きい。器壁の厚さは一定せず、ややゆがむ。24は武蔵型甕で、口縁部が大きく外反する。25は長胴甕の胴部で、長胴化が著しい。28・29は常総型甕である。28は口唇部が突出し、口縁部は緩やかに外反する。内面下部に煤が付着する。29は胴部下半が丸く湾曲する。外面は斜め方向のミガキが密に施され、内面はヘラケズリの上にミガキが施される。

30・31は大型甕である。30は口縁部が横方向に大きく外反し、胴部は緩やかにカーブする。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデを施す。31は30よりも口縁部の外反の度合いは弱い。32は小型の甕か。口縁部はわずかに外反する。器壁は厚く、輪積み痕が各部に顕著に残り、凹凸が激しい。

33はミニチュア土器である。鉢形で、内外面にユビ押圧痕が残る。

34はカマドの土製支脚である。

35は土製勾玉である。73の刀子に接していたため、穿孔部付近に鉄錆が付着する。端部は欠損している。全体をユビナデで調整する。

36～46は土錘である。

47～61は土玉である。孔径がやや小さい。61のみやや小型である。

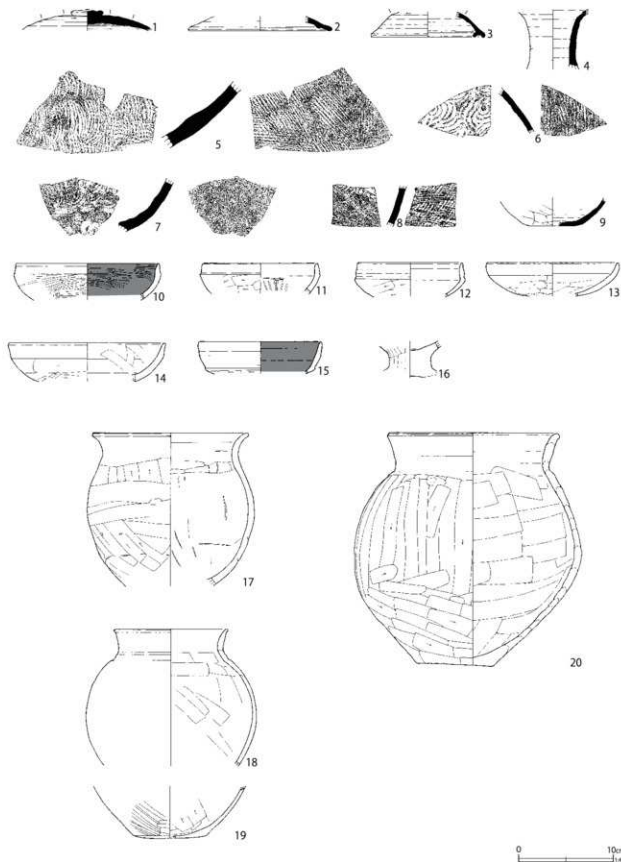
62～67は焼成粘土塊である。

68～71は貝巢穴痕泥岩である。

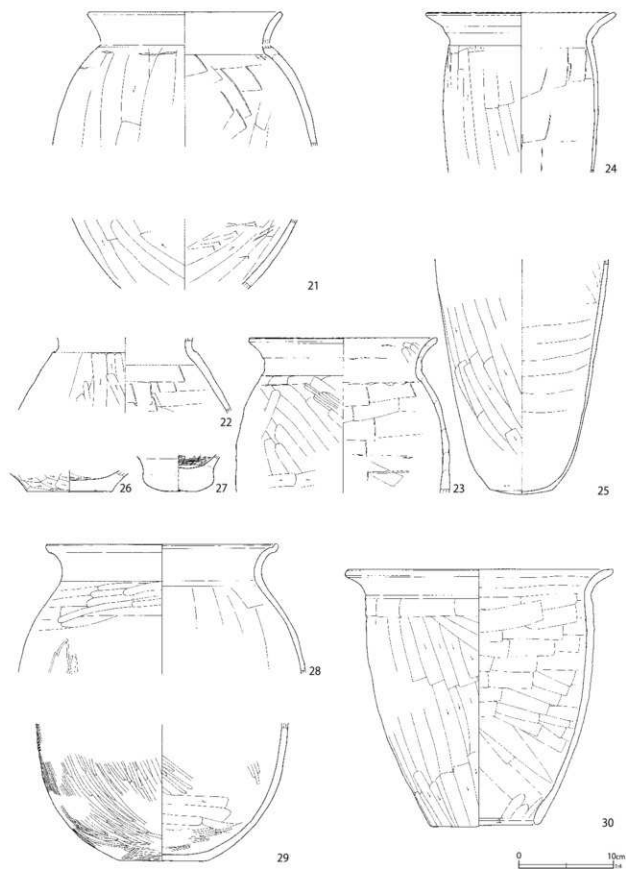
72は粘板岩製の白玉である。径2cmほどと大型で、各面に研磨痕が残る。

73・74は鉄製刀子である。73は茎部から刃部中程まで残る。刃部と背部に浅い間をもつ。背部は切先にかけてわずかに弧を描く。間部に鉄製の柄縁金具が伴う。茎部に目釘穴は認められなかった。74は刀子の茎部で、茎部先端付近に目釘穴が認められる。

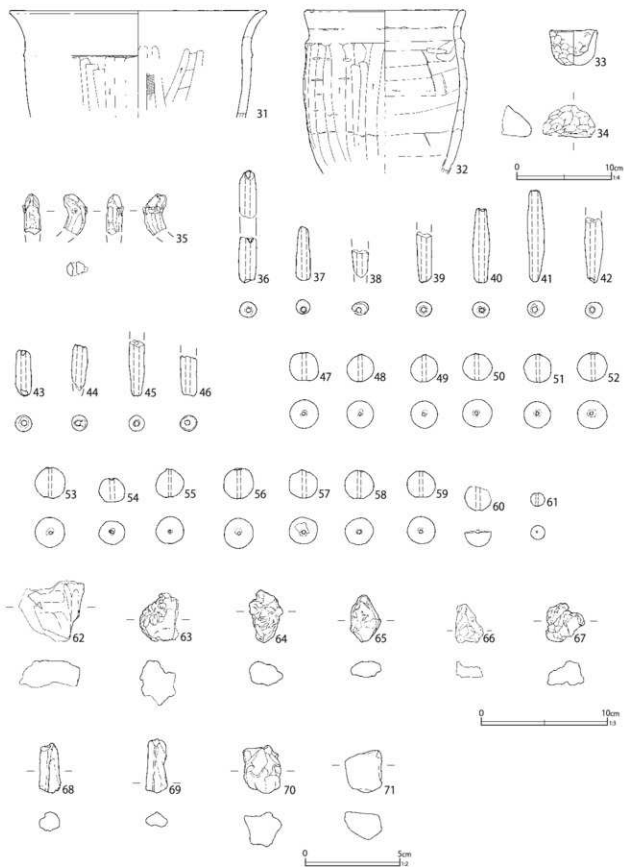
以上を踏まえると、本住居跡出土土器には、大きく古墳時代（7世紀後半）（3・7・15・25・28・29）、奈良時代（8世紀初頭）（1・2）の



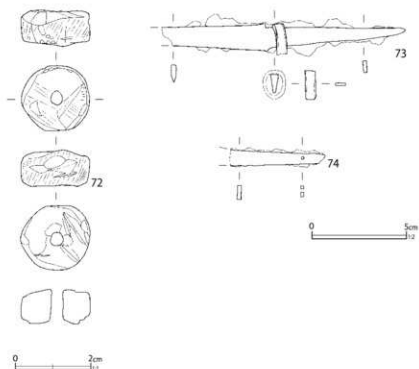
第199図 第40・67号住居跡出土遺物(1)



第200図 第40・67号住居跡出土遺物(2)



第201図 第40・67号住居跡出土遺物(3)



第202図 第40・67号住居跡出土遺物(4)

遺物に分けられるが、古墳時代後期の遺物(20・30)も含まれる。特に20は床面直上出土遺物であり、カマド出土遺物の時期と合わない。調査区域外に、本住居跡に重複する3軒目の住居跡が存在する可能性も想定されるが、C-C'ライン上の土層堆積ではそのような状況は確認できない。現状ではこれら出土遺物の年代差の背景は不明である。

ここでは第40号住居跡の時期は、カマド出土遺物を優先し、7段階(7世紀後半)としておきたい。第67号住居跡の時期は、出土須恵器から8段階(奈良時代前半)と推定される。

第42号住居跡(第203～205図)

N・O-7グリッドに位置する。西側は調査区域外のため、全体の約1/2を確認した。規模は長軸5.9m、短軸2.44m(確認範囲)、深さ0.7m、主軸方位はN-30°-Wである。掘り込みが深い。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む灰・黒・暗褐色土の自然堆積と考えられる。床面全体に掘り方と貼床を確認した。

貼床は広い範囲で硬化していた。

床面からは貯蔵穴と壁溝、ビット、焼土層が確認された。カマドは調査区域外にあると推定される。

貯蔵穴は北壁隅に位置する。規模は長軸1.23m、短軸0.84m、深さ0.53mである。平面は不整形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・褐色土の自然堆積である。

壁溝は確認範囲内では全周する。幅0.15m×0.35m、深さ4cm～13cmで、覆土は焼土粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。底面には、壁柱穴(P4～P20)が不規則に並ぶ。

ビットは20基検出された。そのうちP1～P3の規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.98m×0.94m×0.77m、P2は0.97m×0.67m×0.67m、P3は0.64m×0.34m×0.25mである。P1・2は主柱穴である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土で、柱を抜き取った後の自然堆積である。P3はP1を壊すように隣接する。掘り込みは浅く、性格は不明である。

第59表 第40・67号住居跡出土遺物観察表(第199～202図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[2.2]	—	ABEF	40	普通	灰黄褐	№.38 新治 備み径(3.4)	141-1
2	須恵器	蓋	(15.0)	[1.5]	—	ABEFG	10	普通	灰黄褐	B 新治 雲母多量 土師質	
3	須恵器	蓋	(11.8)	[2.7]	—	BEG	20	良好	灰	№.37 湖西	141-2
4	須恵器	長頸瓶	—	[6.4]	—	BEG	40	良好	灰	B・C 長頸壺かフラスコ類 湖西 夾雑物多量 外面降灰	141-3
5	須恵器	甕	—	[7.1]	—	BEG	5	良好	暗灰	A・B 夾雑物少量	164-3
6	須恵器	甕	—	[4.8]	—	BDEG	5	普通	灰	№.27 外面降灰 薄手 発泡している	164-3
7	須恵器	瓶類	—	[5.6]	—	BEG	5	良好	灰	№.35・C 北総か 厚手	164-3
8	須恵器	甕	—	[4.4]	—	B	5	良好	灰	B	164-3
9	須恵器	坏	—	[3.0]	(6.0)	BE	15	普通	黄灰	C 三和か(混入か) 白色粒子多量 薄手	164-3
10	土師器	坏	(14.9)	[3.9]	—	ABEFG	5	普通	にぶい赤褐	A・D 坏身模倣坏 内面漆	164-4
11	土師器	坏	(11.8)	[3.2]	—	ABG	15	普通	灰褐	B 坏身模倣坏	164-4
12	土師器	坏	(10.8)	[3.6]	—	ABDEG	25	普通	明赤褐	A・C 坏蓋模倣坏	164-4
13	土師器	坏	(13.6)	[3.5]	—	ABEFG	10	普通	褐	A 半球形坏	141-4
14	土師器	坏	(16.3)	[4.2]	10.2	BDEG	20	普通	にぶい赤褐	B	141-5
15	土師器	坏	(12.8)	[3.4]	—	BDEG	20	普通	灰灰	B 有段口縁坏 内面漆	164-4
16	土師器	高坏	—	[3.8]	—	ABDEG	25	普通	にぶい赤褐	B 短脚の高坏	141-6
17	土師器	甕	16.2	[16.3]	—	ABG	70	普通	灰黄褐	№.31・105・C 小型甕	141-7
18	土師器	甕	(11.6)	[14.5]	—	ABDEG	50	普通	にぶい橙	№.81・D 小型甕 外面風化激しい と同一個体か	142-1
19	土師器	甕	—	[5.5]	(7.6)	ABDEG	40	普通	にぶい橙	№.104・カマド・A 18と同一個体か	142-1
20	土師器	甕	17.7	24.6	8.0	ABDE	100	良好	橙	№.52	141-8
21	土師器	甕	(20.0)	[21.8]	—	ABEG	20	普通	明赤褐	№.102・116・カマド・貯蔵穴・D 外面 器面風化	142-4
22	土師器	甕	—	[8.0]	—	ABEG	20	普通	暗褐	貯蔵穴・B・D 長胴甕	142-2
23	土師器	甕	(19.7)	[16.5]	—	ABEG	20	普通	にぶい黄橙	№.48・A・D 長胴甕	142-3
24	土師器	甕	(19.6)	[17.0]	—	ADEG	15	普通	にぶい黄橙	№.15・A・D 長胴甕	142-5
25	土師器	甕	—	[24.9]	(6.6)	ADEG	60	普通	にぶい黄橙	№.97・111・カマド・A 長胴甕	143-1
26	土師器	甕	—	[2.3]	(9.0)	ABDEG	25	普通	にぶい赤褐	C	
27	土師器	甕	—	[3.9]	—	ABEG	70	普通	にぶい黄褐	B 底部か	
28	土師器	甕	(24.0)	[13.8]	—	ABEFG	25	普通	にぶい橙	№.16・91・92・カマド 常総型甕 内 面下部煤付着	143-2
29	土師器	甕	—	[14.6]	9.1	BEF	30	普通	にぶい黄褐	№.50・A 常総型甕 雲母多量	143-3
30	土師器	甕	28.1	27.2	10.9	ABDEFGJ	65	普通	明赤褐	№.5・7・29・40・45・46・B・C・D	143-4
31	土師器	甕	(26.8)	[11.4]	—	ABG	10	普通	にぶい橙	A・D 大型甕	143-5
32	土師器	甕	(16.6)	[17.4]	—	ABEFG	25	普通	明赤褐	№.85・87・119・カマド	143-6
33	土師器	鉢 ニホリ土器	(4.6)	3.7	—	BDEG	40	普通	にぶい黄褐	№.51 鉢形	143-7
34	土製品	支脚	—	3.3	—	ABDEG	90	普通	にぶい橙	A 中実	143-8
35	土製品	勾玉	長さ[3.2] 幅1.4 孔径0.4 厚さ1.2 重さ6.0g	—	—	BDE	70	普通	にぶい橙	№.30 73に接して出土したため、鉄銹 が付着している	168-1
36	土製品	土鍾	長軸長(7.3) 最大径(2.8) 孔径(0.8) 重さ11.3g	—	—	ABDEG	90	普通	明赤褐	№.49	169-3
37	土製品	土鍾	長軸長4.3 最大径1.1 孔径0.4 重さ4.5g	—	—	ABDEG	100	普通	橙	№.80	169-3

第4次調査

番号	種別	器種	大きさ・重さ	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
38	土製品	土罐	長軸長 2.2 最大径 1.3 孔径 0.4 重さ 2.2g	ABDEG	15	普通	明赤褐	№.66	169-3
39	土製品	土罐	長軸長 4.0 最大径 1.2 孔径 0.4 重さ 5.9g	ABDEG	50	普通	明赤褐	№.64	169-3
40	土製品	土罐	長軸長 5.9 最大径 1.3 孔径 0.4 ~ 0.5 重さ 9.5g	ABDG	100	普通	明赤褐	№.99	169-3
41	土製品	土罐	長軸長 6.3 最大径 1.3 孔径 0.5 重さ 11.1g	ABDG	100	普通	明赤褐	№.88	169-3
42	土製品	土罐	長軸長 5.1 最大径 1.4 孔径 0.4 ~ 0.5 重さ 8.4g	ABDG	60	普通	明赤褐	№.94	169-3
43	土製品	土罐	長軸長 3.7 最大径 1.3 孔径 0.5 重さ 5.7g	ABDG	40	普通	明赤褐		169-3
44	土製品	土罐	長軸長 3.7 最大径 1.2 孔径 0.4 重さ 5.2g	ABDEG	95	普通	明赤褐	№.65	169-3
45	土製品	土罐	長軸長 4.4 最大径 1.2 孔径 0.4 重さ 7.0g	ABDEG	50	普通	明赤褐	№.108	169-3
46	土製品	土罐	長軸長 3.2 最大径 1.3 孔径 0.4 重さ 5.6g	ABDEG	30	普通	明赤褐	№.55	169-3
47	土製品	土玉	最大高 2.2 径 2.2 ~ 2.3 孔径 0.3 重さ 12.1g	BDE	100	普通	にぶい褐	№.1 孔径が小さい 47 ~ 58 は似た作り	169-1
48	土製品	土玉	最大高 2.1 径 2.1 ~ 2.2 孔径 0.2 重さ 9.5g	BDE	100	普通	にぶい褐	№.3 孔径が小さい	169-1
49	土製品	土玉	最大高 2.1 径 2.1 孔径 0.3 重さ 9.4g	BDE	100	普通	にぶい褐	№.56 孔径が小さい	169-1
50	土製品	土玉	最大高 2.1 径 2.2 ~ 2.3 孔径 0.3 重さ 10.9g	BDE	100	普通	灰黄褐	№.57 孔径が小さい	169-1
51	土製品	土玉	最大高 2.2 径 2.1 孔径 0.2 ~ 0.3 重さ 9.3g	BDE	100	普通	にぶい橙	№.79	169-1
52	土製品	土玉	最大高 2.3 径 2.2 ~ 2.3 孔径 0.3 重さ 11.0g	BDE	100	普通	にぶい橙	№.61	169-1
53	土製品	土玉	最大高 2.5 径 2.3 ~ 2.4 孔径 0.2 重さ 12.7g	BDE	95	普通	にぶい黄橙	№.2	169-1
54	土製品	土玉	最大高 1.9 径 1.8 ~ 2.0 孔径 0.3 重さ 6.9g	BDE	100	普通	橙	№.60	169-1
55	土製品	土玉	最大高 2.2 径 2.1 ~ 2.2 孔径 0.2 重さ 9.6g	BDE	100	普通	橙	B	169-1
56	土製品	土玉	最大高 2.4 径 2.3 ~ 2.4 孔径 0.3 重さ 12.3g	BDE	100	普通	橙	№.4 下からの穿孔	169-1

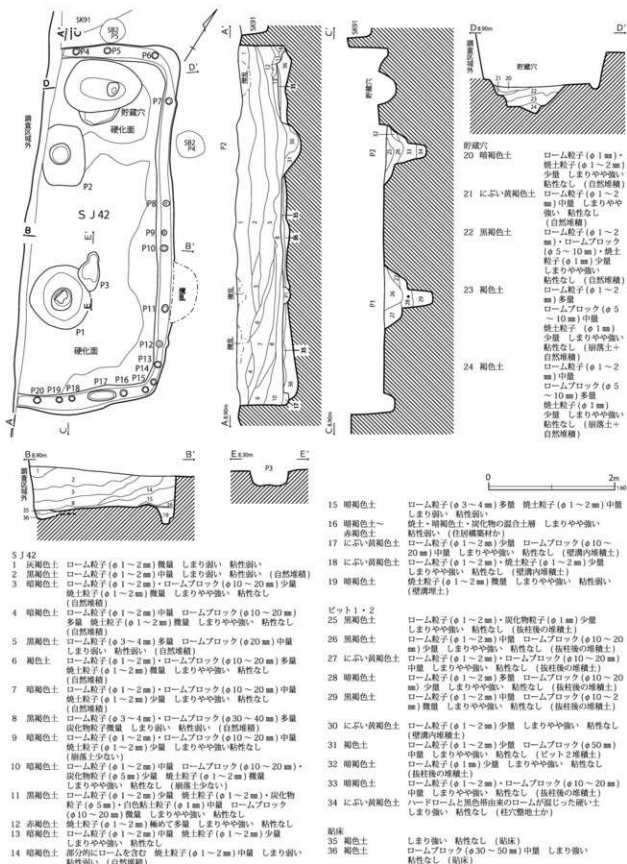
番号	種別	器種	大きさ・重さ	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
57	土製品	土玉	最大高 2.2 径 2.1 ~ 2.2 孔径 0.3 ~ 0.4 重さ 9.4g	DE	95	普通	にぶい黄褐	No. 41 下からの穿孔	169-1
58	土製品	土玉	最大高 2.2 径 2.1 ~ 2.3 孔径 0.3 重さ 9.9g	DE	100	普通	オリーブ黒	No. 1 下からの穿孔	169-1
59	土製品	土玉	最大高 2.1 径 2.2 孔径 0.3 重さ 9.5g	DE	100	普通	にぶい黄橙	No. 58	169-1
60	土製品	土玉	最大高 1.9 径 2.1 孔径 0.3 重さ 4.3g	DE	50	普通	にぶい黄橙	A	169-1
61	土製品	土玉	最大高 1.0 径 1.0 孔径 0.2 重さ 1.1g	DE	100	普通	黒褐	No. 125	169-1
62	粘土塊	—	長軸長 4.8 最大幅 4.8 厚さ 2.1 重さ 36.4g	DE		普通	浅黄	C 焼成している	170-2
63	粘土塊	—	長軸長 3.8 最大幅 2.8 厚さ 3.4 重さ 23.3g	DE		普通	灰黄褐	A 焼成している	170-2
64	粘土塊	—	長軸長 4.0 最大幅 2.5 厚さ 1.7 重さ 8.7g	DE		普通	にぶい橙	A 焼成している	170-2
65	粘土塊	—	長軸長 3.7 最大幅 2.3 厚さ 1.7 重さ 8.5g	DE		普通	にぶい黄橙	C 焼成している	170-2
66	粘土塊	—	長軸長 3.0 最大幅 2.7 厚さ 1.0 重さ 5.3g	AD		普通	にぶい黄橙	A 焼成している	170-2
67	粘土塊	—	長軸長 3.1 最大幅 2.9 厚さ 1.7 重さ 9.3g	AB		普通	にぶい橙	A 焼成している	170-2
68	貝殻穴焼灰器	—	長軸長 2.6 最大幅 1.1 厚さ 1.0 重さ 1.6g	—		普通	明褐灰	A	170-3
69	貝殻穴焼灰器	—	長軸長 2.9 最大幅 1.1 厚さ 0.7 重さ 1.6g	—		普通	明褐灰	A	170-3
70	貝殻穴焼灰器	—	長軸長 2.5 最大幅 2.0 厚さ 1.8 重さ 6.3g	—		普通	にぶい橙	A	170-3
71	貝殻穴焼灰器	—	長軸長 2.1 最大幅 2.0 厚さ 1.4 重さ 4.3g	—		普通	にぶい橙	A	170-3
72	石製品	白玉	最大径 18.0mm 孔径 3.5mm 厚さ 9.5mm 重さ 4.5g					No. 89・カマド 粘板岩 刃物痕	168-5
73	鉄製品	刀子	刀子・長さ 12.8 刃幅 0.9 普幅 0.3 鉄製縁金具・長さ 1.5 幅 0.6 厚さ 0.2 重さ 17.0g					No. 28	172-1
74	鉄製品	刀子	長さ [5.1] 普幅 0.2 幅 0.6 ~ 0.8 重さ 3.4g					A 刀子の基部か	172-1

P 4 ~ P20 は径 10cm 前後、深さ 6cm ~ 20cm と小規模である。

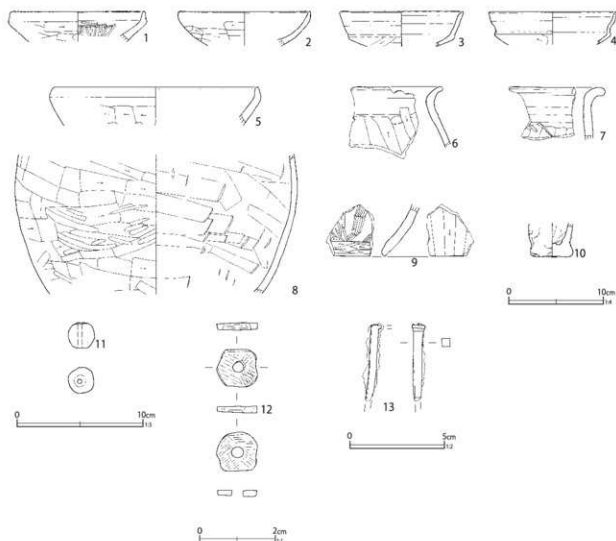
焼土層は壁面に沿って、床面上に分布する。B - B' ラインの第 16 層がこれに該当する。これは焼土や炭化物が暗褐色土に混ざった層で、壁面に沿って検出されたことから、住居の構築材に関

わる土と想定した。しかし、炭化材は未検出のため、焼失家屋ではない。

遺物は少なく、土器の小片が主体であった。平面的には P 1・2 付近にまとまるが、出土した標高にばらつきがある。床面直上から出土した遺物はなく、2 と 12 が床面より 10cm 程上位の覆土



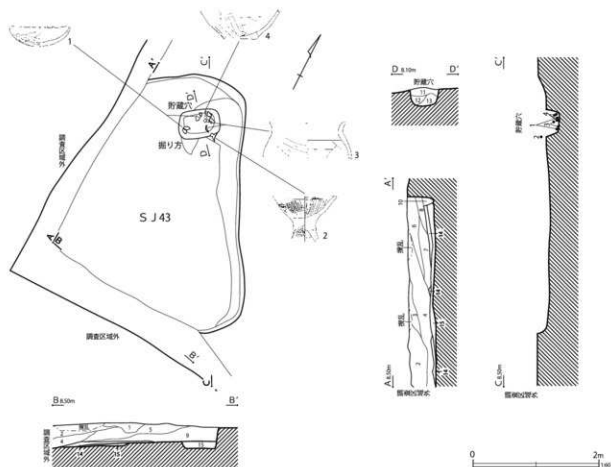
第203図 第42号住居跡 (1)



第205図 第42号住居跡出土遺物

第60表 第42号住居跡出土遺物観察表 (第205図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.0)	[2.9]	—	ABE	25	普通	にぶい褐	A 坏身模散坏	163-1
2	土師器	坏	(13.8)	[3.6]	—	ABEG	20	普通	褐灰	No. 11 半球形坏 内外面漆か 口唇部磨減	163-1
3	土師器	坏	(12.8)	[3.7]	—	ABDEG	15	普通	赤褐	A 有段口縁坏 口唇部面取り	163-1
4	土師器	坏	(13.2)	[3.5]	—	ABDG	10	普通	黒褐	B 内彎口縁坏	163-1
5	土師器	坏	(21.4)	[4.1]	—	ABEG	10	普通	にぶい赤褐	A 流入か	163-1
6	土師器	甕	—	[6.4]	—	BEG	5	普通	黄橙	No. 4・A 長胴甕	163-1
7	土師器	甕	—	[5.6]	—	BEG	5	普通	橙	A・B	163-1
8	土師器	甕	—	[14.8]	—	ABDE	40	普通	にぶい褐	球胴甕 内面工具痕顕著 外面黒斑	144-1
9	土師器	甕	—	[5.4]	—	ABEG	5	普通	にぶい橙	B	163-1
10	土師器	手捏ね土器	—	[3.6]	4.3	ABEG	80	普通	にぶい黄褐	No. 16 割れの一部が紙がれている(転用か)	144-2
11	土製品	土玉	最大高 2.0 径 2.0 ~ 2.1 孔径 0.3 重さ 8.3g			B	100	良好	黒	No. 12 白色粒子微量	169-2
12	石製品	白玉	最大径 11.0mm 孔径 3.0mm 厚さ 2.0mm 重さ 0.4g							No. 6 粘板岩	168-5
13	鉄製品	釘	長さ [4.1] 頭幅 0.6 ~ 0.7 身幅 0.5 重さ 3.4g						B		172-1



- S J 43
- | | | | |
|----------|---|-----------|--|
| 1 褐色土 | 粘質土 白色粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)多量 白色粘土ブロック中量 | 9 にぶい黄褐色土 | 粘質土 白色粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・黒色粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・粘土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)多量 しまりやや強い 粘性やや強い(覆土) |
| 2 暗褐色土 | ローム粒子($\phi 1$ mm)・ロームブロック($\phi 50$ mm)・黒色粒子($\phi 1$ mm)多量 しまり強い 粘性やや強い(覆土) | 10 褐色土 | 黒色粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)中量 ロームブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)多量 しまりやや強い 粘性弱い(硬質覆土) |
| 3 灰褐色土 | ややシルト質 白色粒子($\phi 1$ mm)・黒色粒子多量 しまり強い 粘性強い(覆土) | 貯蔵穴 | |
| 4 明赤褐色土 | ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・ロームブロック($\phi 30 \sim 40$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 しまり強い 粘性強い(覆土) | 11 灰褐色土 | ローム粒子多量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・炭化物粒子 少量 しまりやや強い 粘性弱い |
| 5 にぶい褐色土 | 粘質土 白色粘土ブロック($\phi 20$ mm) 白色粒子($\phi 1$ mm)多量 しまり強い 粘性強い(覆土) | 12 褐色土 | ローム粒子中量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性やや強い |
| 6 黒褐色土 | ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粒子($\phi 0.5$ mm)多量 しまり強い 粘性やや強い(覆土) | 13 褐色土 | ローム粒子・ロームブロック($\phi 20 \sim 30$ mm)中量 しまり強い 粘性やや強い |
| 7 暗褐色土 | ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・白色粒子($\phi 0.5$ mm)中量 ロームブロック($\phi 30 \sim 40$ mm)多量 しまりやや強い 粘性弱い(覆土) | 貼床 | |
| 8 黒褐色土 | ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・白色粒子($\phi 0.5$ mm)多量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性弱い(覆土) | 14 黄褐色土 | 貼床層 しまり強い 粘性弱い(貼床) |
| | | 15 褐色土 | ローム層 しまり強い 粘性強い(貼床) |

第206図 第43号住居跡

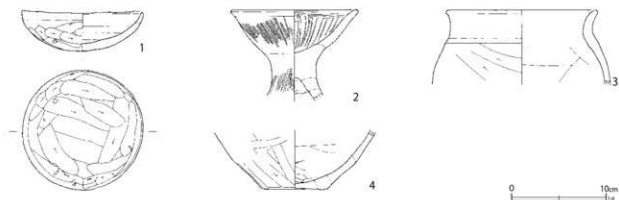
側にかけでは、調査区域外のため、確認できなかった。規模は確認範囲で、長軸4.11m、短軸3.05m、深さ0.48m、主軸方位はN-27°-Wである。確認面からの掘り込みが浅いが、これは後世の攪乱により、削平されていたためである。平面は隅丸方形である。覆土はローム粒子や白色粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積土である。床面には浅い掘り方と貼床が認められた。

床面からは貯蔵穴のみが確認された。

貯蔵穴は、北隅角に位置する。規模は長軸0.66m、短軸0.45m、深さ0.26mで、平面は隅丸長方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む灰・褐色土の自然堆積と考えられる。

遺物は貯蔵穴内から古墳時代後期の土師器杯・高杯・甕が出土した。

1は杯である。半球形杯で、口縁部は外反し、



第207図 第43号住居跡出土遺物

第61表 第43号住居跡出土遺物観察表(第207図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	12.6	4.3	9.5	BDEG	95	普通	にぶい黄橙	№1・2・P1 半球形坏	144-3
2	土師器	高坏	(12.8)	9.7	—	BDG	60	普通	橙	№1 短脚	144-4
3	土師器	甕	(15.6)	[7.9]	—	BCDEFG	60	普通	橙	№7・8・P1 小型の球胴甕か	144-5
4	土師器	甕	—	[6.3]	7.0	ABCEFG	30	普通	橙	№4・5・6・P1	144-6

口縁部は凹凸が激しい。外面にヘラケズリを施すが、器壁は厚い。

2は高坏である。坏部は身が深く、口縁部が外反する。口縁部はヨコナデ、胴部は内外面にミガキを施す。脚部との接合部は分厚い。脚部は中空で、外面にミガキ、内面はヘラケズリを施す。全体的に器壁は厚い。長脚化の始まる直前の高坏か。

3・4は甕である。3は口縁部が短く立ち上がり、わずかに外反する。頸部にはヨコナデにより浅い段を作る。4は平底の底部で、胴部のカーブから球胴形の長胴甕の可能性がある。

本住居跡の時期は、4段階（古墳時代後期前半）である。

第44号住居跡（第208～210図）

O-10グリッドに位置する。西側は調査区域外のため確認できなかった。規模は長軸3.47m、短軸2.8m（確認範囲）、深さ0.56m、主軸方位はN-20°-Wである。平面は方形である。覆土は白色粒子やロームブロックを含む褐色土等の自然堆積と考えられる。なお、本住居跡は、調査区南側の谷に落ち込む緩斜面に位置し、水の貯まり

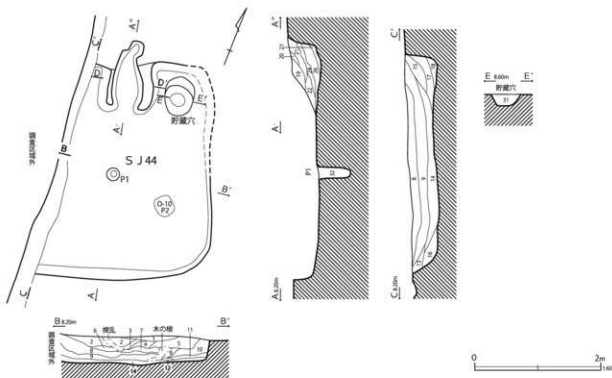
やすい箇所のためか、覆土は鉄分を多く含み、粘性も強い。床面に掘り方と貼床は確認できなかった。

床面からはカマドと貯蔵穴、ビツが確認された。カマドは長軸1.23m、短軸0.95m、深さ0.54mで、北壁中央に位置すると推定される。その構造は、燃焼部から煙出しにかけて、北壁を掘り込み、天井部や袖部は白色粘土で構築している。覆土は焼土や粘土を含む暗褐色土等の崩落土からなり、内部は赤く焼けていた。燃焼部から土師器坏や甕が出土した。

貯蔵穴は北東隅角に位置する。長軸0.62m、短軸0.47m、深さ0.18mで、平面は楕円形である。覆土は焼土粒子や炭化物粒子を含む黒褐色土の自然堆積と考えられる。内部から遺物は出土しなかった。

ビツは1基検出された。P1は長径0.2m、短径0.2m、深さ0.55mで、床面中央に位置し、主柱穴と考えられる。

遺物は少なく、カマド内とカマド右袖周辺に集中して分布する。そのうち、1・3はカマド燃焼



- S J 44
- 1 黒褐色土 白色粒子(φ2~3mm)・黒色粒子(φ2~3mm)・焼土粒子(φ2~3mm)多量 しまり強い 粘性弱い
 - 2 褐色土 白色粒子(φ2~3mm)・黒色粒子(φ2~3mm)・焼土粒子(φ2~3mm)中量 しまり強い 粘性強い
 - 3 にぶい黄褐色土 白色粒子(φ1~2mm)・黒色粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性強い
 - 4 褐色土 白色粒子(φ1~2mm)・黒色粒子(φ1~2mm)少量 白色粘土ブロック(φ30~40mm)含む しまり強い 粘性強い
 - 5 黒褐色土 ローム粒子(φ2~3mm)・焼土粒子(φ2~3mm)・炭化物粒子(φ2~3mm)多量 しまり強い 粘性弱い
 - 6 にぶい黄褐色土 白色粒子(φ1~2mm)・黒色粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性弱い
 - 7 にぶい黄褐色土 色調やや明るい 白色粒子(φ1~2mm)・黒色粒子(φ1~2mm)少量 白色粘土ブロック(φ30mm)含む しまり強い 粘性強い
 - 8 褐色土 鉄分をまだらに少量含む 褐色粘土(φ30~40mm)多量 しまり強い 粘性強い
 - 9 にぶい黄褐色土 鉄分をまだらに多量含む 褐色粘土(φ30~40mm)多量 しまり強い 粘性強い
 - 10 暗褐色土 白色粒子(φ3~4mm)多量 白色粘土ブロック(φ30~40mm)中量 しまり強い 粘性強い
 - 11 褐色土 ローム粒子(φ1~2mm)・黄褐色粘土ブロック(φ20~30mm)中量 しまり強い 粘性強い

- 12 褐色土 ローム粒子(φ3~4mm)・黒色粒子含む しまり強い 粘性強い
- 13 黒褐色土 ロームブロック(φ10~20mm)・黄褐色粒子(φ0.5mm)・黒色粒子多量 しまり強い 粘性強い
- 14 黒色土 ロームブロック(φ30~40mm)多量 しまり強い 粘性強い
- 15 にぶい黄褐色土 灰褐色層 しまり強い 粘性強い
- 16 暗褐色土 焼土粒子(φ1mm)少量 黄褐色粒子(φ1~2mm)多量 鉄分をまだらに中量含む しまり強い 粘性強い
- 17 黒褐色土 ロームブロック(φ10mm)・黄褐色粒子(φ0.5mm)・黒色粒子多量 焼土粒子(φ0.5mm)少量
- 18 にぶい黄褐色土 粘土粒子(φ3~4mm)多量 黒褐色粒子(φ2~3mm)少量 しまり強い 粘性強い (覆土)

- 野庭穴
- 31 黒褐色土 焼土粒子(φ2~3mm)・褐色粒子多量 炭化物粒子(φ1~2mm)中量 しまり強い 粘性強い
- ビット1
- 32 黒色土 (水没の海内内容物等、確認できず)

第208図 第44号住居跡(1)

部、2・4は床面直上から出土した。主に古墳時代後期の土師器・甕・瓶・土製支脚が出土した。

1・2は坏である。1は口縁部は厚く、底部は薄い。身はやや深い。口唇部は僅かに外反し、外面はヘラケズリ、内面はミガキを施す。2は半球形坏で、身は浅く、器壁は薄く一定しない。

3は球胴甕である。口縁部は短く外反し、胴部上半は肩が張らず、ナデ肩である。

4は瓶である。口縁部はわずかに外反する。外

面の一部と内面にミガキが入る。

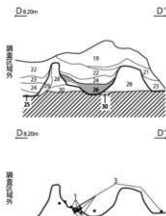
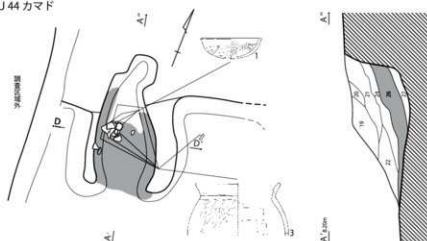
5はカマドの土製支脚である。下半部は欠失している。全体をユビナデとユビ押圧で調整するが、凹凸が激しい。中実だが、中心部は円筒形の空洞があり、有機物を芯材にしていた可能性がある。

本住居跡の時期は、5段階(古墳時代後期後半)である。

第45号住居跡(第211~215図)

M・N-7グリッドに位置する。住居跡の南

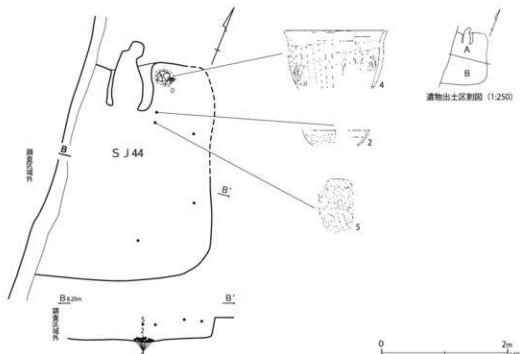
S J44 カマド



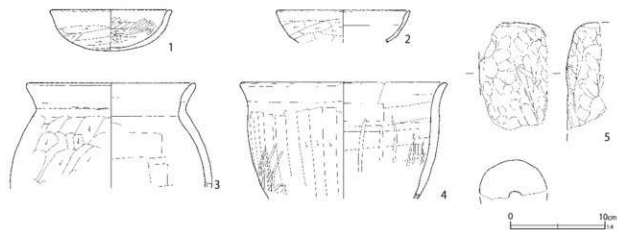
カマド

- 19 にぶい黄褐色土 黒色粒子 (φ 5mm) 含む 鉄分まだら (カマド天井部前底土 粘土)
 20 にぶい黄褐色土 黒色粒子 (φ 5mm)・黄褐色粒子多量 しまり強い 粘性強い
 (カマド天井部前底土 粘土)
 21 暗褐色土 ロームブロック (φ 20 ~ 30mm) 含む 黒色粒子 (φ 5mm)・褐色粒子多量
 しまり強い 粘性強い
 22 にぶい黄褐色土 焼土粒子 (φ 2 ~ 3mm) 中量 黒色粘土中量 しまり強い 粘性強い
 (カマド天井部前底土 粘土)
 23 褐色土 焼土粒子 (φ 2 ~ 3mm)・炭化物粒子多量 しまり強い 粘性強い
 24 暗褐色土 焼土粒子 (φ 5mm) 少量 しまり強い 粘性強い (カマド天井部前底土 粘土)
 25 褐色土 ロームブロック (φ 10 ~ 20mm)・焼土粒子 (φ 2 ~ 3mm)・炭化物粒中量
 しまり強い 粘性強い
 26 暗褐色土 灰・焼土ブロック (φ 30 ~ 40mm) 多量 しまり強い 粘性強い
 (天井部とカマド燃焼部の焼土)
 27 暗褐色土 焼土ブロック (φ 20 ~ 30mm) 多量 しまり強い 粘性強い
 28 にぶい褐色土 黒色粒子 (φ 1 ~ 2mm) 中量 しまり強い 粘性強い (カマド軸)
 29 褐色土 黒色粒子 (φ 1 ~ 2mm) 中量 焼土粒子・炭化物粒子多量 しまり強い
 粘性強い
 30 黒褐色土 黒色粒子 (φ 1mm) 少量 しまり強い 粘性強い

0 1m



第209図 第44号住居跡(2)・遺物出土状況



第210図 第44号住居跡出土遺物

第62表 第44号住居跡出土遺物観察表(第210図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.4)	4.3	—	ABDEG	35	普通	黒褐	No. 9・10・11	144-7
2	土師器	坏	(13.8)	[3.4]	—	ABDEG	20	普通	にぶい褐	No. 2 器壁も一定しない	
3	土師器	甕	(17.2)	[11.2]	—	ABDEG	30	普通	黒褐	No. 12・13・14・15・18・A 球胴甕	144-8
4	土師器	甕	(21.4)	[12.3]	—	ABDEG	70	普通	にぶい橙	No. 20・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30	144-9
5	土製品	支脚	長軸長 11.3 最大幅 7.1 厚さ 4.0 重さ 28.8g			ABEG	30	普通	にぶい褐	No. 1 中実	144-10

西部は調査区域外のため、確認できなかった。規模は長軸 5.24m、短軸 5.13m、深さ 0.64m、主軸方位は N-67°-W である。掘り込みが深い。平面は方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面の掘り方は、周辺部を深く掘り込み、全体に貼床を敷く。

床面からは壁溝、ピット、粘土・焼土ブロックが確認された。

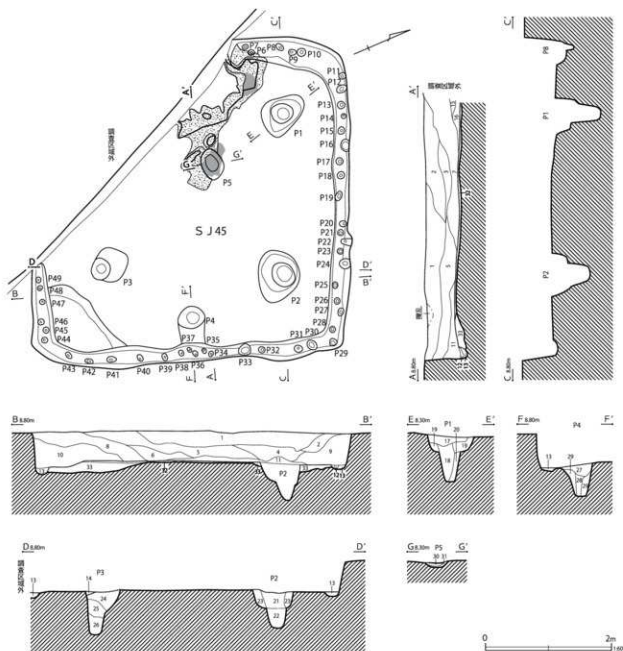
壁溝は確認範囲内を全周する。幅 0.17m × 0.5m、深さ 6cm ~ 15cm で、覆土は住居跡と同様である。底面には P 6 ~ P 49 とした壁柱穴が密にみつかった。

ピットは 49 基検出された。P 1 ~ P 5 の規模(長径×短径×深さ)は、P 1 は 0.75m × 0.54m × 0.75m、P 2 は 0.83m × 0.66m × 0.61m、P 3 は 0.53m × 0.49m × 0.72m、P 4 は 0.44m × 0.35m × 0.54m、P 5 は 0.5m × 0.35m

× 0.11m である。P 1 ~ P 3 は主柱穴、P 4 は入口ピットである。P 5 は覆土に焼土層が堆積するが、底面は被熱しておらず、炉とは判断しがたい。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土が主体をなし、抜柱後の堆積状況を示している。P 4 は P 1 ~ P 3 より一回り小さく、黒褐色土が堆積する。壁柱穴の P 6 ~ P 49 は、径 0.1m ~ 0.2m、深さ 0.1m ~ 0.3m と小規模である。これらは直線状というよりも、ギザギザに配列される傾向がみられる。

粘土・焼土ブロックは西壁中央部に、壁から床面中央にかけて分布する。これはカマドの残骸と考えられる。

遺物は中央部を除いて散在する。そのうち、4・6・8・10・11・34 は床面直上出土遺物である。本住居跡で出土した白玉は、34 を除いて覆土から出土した。主に古墳時代(7世紀後半)の土師器坏、甕、白玉、鉄製品が出土した。



第211図 第45号住居跡(1)

1は須恵器高台付坏か。新治窯産か。2は高台付坏の底部である。高台径は広く、坏底部が台部の接地面と同程度に低い。湖西窯産か。3は坏である。箱型坏の胴部片と思われる。新治窯産。1～3は混入遺物の可能性が高い。

4～7は土師器坏である。そのうち、6は内罅口縁坏、7は北武蔵型坏である。4は器高が低く、口縁部は短く外に開く。全体的に器壁が厚く、器

面は白く粉っぽい。内面に黒漆の痕跡がある。5は器高が高く、口縁部は長く外に開く。全体的に器壁は薄く、器面は白く粉っぽい。内外面に黒漆の痕跡がある。6は薄手で、口縁部の内湾部には輪積み痕が残る。7は口径が広く、身も深い。口縁部はわずかに内傾する。

8～12は甕である。8は球胴甕で、器壁は厚く、口縁部はわずかに外反する。9は武蔵型甕で、器

SJ45	
1 黒褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 焼土粒子(φ2~3mm)中量 しまり強い 粘性弱い
2 黒褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)・焼土粒子(φ2~3mm)多量 しまり強い 粘性弱い
3 暗褐色土	焼土粒子(φ2~3mm)・焼熟した粘土ブロック(φ30~40mm) 多量 しまり強い 粘性弱い
4 黒褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)中量 焼土粒子(φ2~3mm)少量 しまり強い 粘性弱い
5 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ10mm)微量 焼土粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性弱い
6 黒褐色土	ロームブロック(φ20~30mm)中量 焼土粒子(φ1~2mm)・ 炭化物粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性弱い
7 暗褐色土	焼土粒子(φ3~4mm)・焼熟した粘土中量 しまり強い 粘性弱い
8 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・焼土粒子(φ2~3mm)・炭化物粒子 (φ2~3mm)中量 しまり強い 粘性弱い
9 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)多量 焼土粒子(φ2~3mm)微量 しまり強い 粘性弱い
10 黒褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 焼土粒子(φ3~4mm)少量 しまり強い 粘性弱い
11 暗褐色土	ロームブロック(φ10~20mm)中量 焼土粒子(φ1~2mm) 少量 しまり強い 粘性弱い
12 黒色土	(床直上の自然堆積) 黒色土主体 ローム粒子(φ1~2mm)微量 しまり強い 粘性弱い
13 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 ロームブロック(φ5mm)中量 しまり強い 粘性弱い (硬質層土)
14 黄褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 ロームブロック(φ20~30mm) 含む しまり強い 粘性なし
15 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・焼土粒子(φ1~3mm)・焼土 ブロック(φ10mm)・灰白色粘土粒子(φ1~4mm)中量 灰白色粘土ブロック(φ10mm)少量 しまり強い 粘性弱い (自然堆積とカマド構築土の混在土)
16 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 焼土粒子(φ1~3mm)・焼土 ブロック(φ10mm)中量 灰白色粘土粒子(φ1~4mm)・灰白色 粘土ブロック(φ10mm)多量 しまり強い 粘性弱い

ビット1~5	
17 黒褐色土	ローム粒子(φ1mm)・焼土粒子(φ1mm)・白色粘土 粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性強い (板柱後の堆積土)
18 黒褐色土	ローム粒子(φ1mm)少量 白色粘土粒子(φ1~2mm) 微量 しまり強い 粘性なし (板柱後の堆積土)
19 黒褐色土	ローム粒子(φ1mm)中量 白色粘土粒子(φ1~2mm) 少量 しまり強い 粘性強い (板柱後の堆積土)
20 黒褐色土	ローム粒子(φ1mm)・白色粘土粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性強い (板柱後の堆積土)
21 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 焼土粒子(φ1mm)・ 炭化物粒子(φ1mm)微量 しまり強い 粘性なし (自然堆積)
22 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ20~30mm) 多量 しまり強い 粘性なし (板柱後の堆積土)
23 にふい黄褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)中量 ロームブロック (φ10~20mm)少量 しまり強い 粘性なし (板柱後の堆積土)
24 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 しまり強い 粘性強い (自然堆積)
25 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ10mm) 中量 しまり強い 粘性強い (自然堆積)
26 暗褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 ロームブロック(φ10 mm)中量 しまり強い 粘性強い (板柱後の堆積土)
27 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性強い 27層に似る
28 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 しまり強い 粘性なし (板柱)
29 黒褐色土	焼土層(焼熟した16層) しまり強い 粘性強い ロームブロック(φ30~40mm)含む 焼土粒子 (φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性強い
30 暗褐色土	
31 暗褐色土	
32 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 しまり強い 粘性なし (板柱)
33 にふい黄褐色土	ブラックバンド由来のロームブロック(φ30~50mm) 主体 しまり強い 粘性なし (板柱)

第212図 第45号住居跡(2)

壁は薄く、口縁部は「く」の字形に大きく外反する。10は球胴甕の底部片と思われる。11は常総型甕の口縁部で、口唇部が突出する。12は球胴甕の口縁部か。

13~36は粘板岩製の白玉である。24点の出土点数は、全遺構の中で最も多い。いずれも径は10mm前後とまとまるが、厚さとその形状はばらつきがみられる。各面に研磨痕がみられる。

37は不明鉄製品である。棒状だが、端部が細い。残存長14.9cmと長く、厚さは0.8~1.0cmと厚い。幅は折損部付近が1.2cm、端部は4mmと端部にかけて細くなる。

38は不明鉄製品である。無頭鎌のような形状だが、細身で端部付近は折損と錆により不明瞭で、刃部と判断するには困難である。下半中央に径1.5mm程の孔がある。

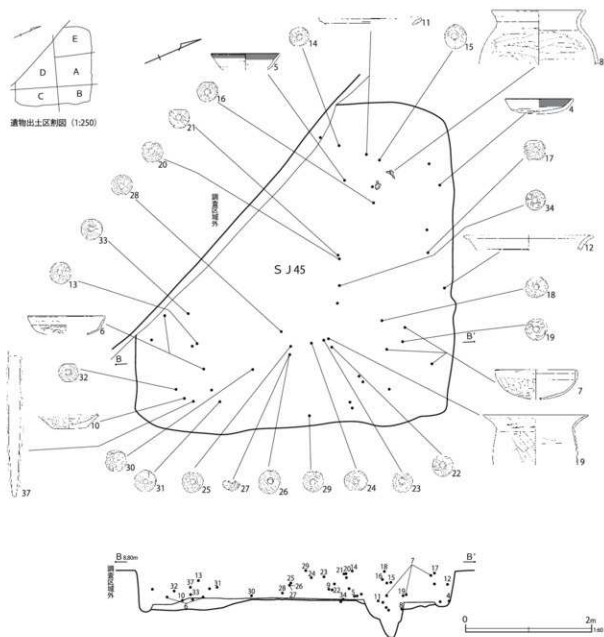
39~43は貝果穴痕泥岩である。

本住居跡の時期は、7段階(7世紀後半)である。

第46号住居跡(第216~220図)

N-8グリッドに位置する。第27号炉穴を壊し、第152号土壇に壊されている。規模は長軸5.99m、短軸5.1m、深さ0.46m、主軸方位はN-13°-Eである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロック、焼土粒子を含む黒・暗褐色土を主体とする自然堆積である。床面は2面あり、掘り方検出のために貼床を掘り下げたところ、第2面の床面と壁溝が検出された。住居跡を構築後、拡張していることが判明した。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ビットが確認された。住居跡は拡張しているが、カマドは単独で1基のみだった。カマドは長軸1.38m、短軸1.16m、深さ0.68mで、北壁中央からやや西寄りに位置する。これは、拡張前の床面と壁溝の中央部に位置するため、拡張後の壁面に対しては軸が



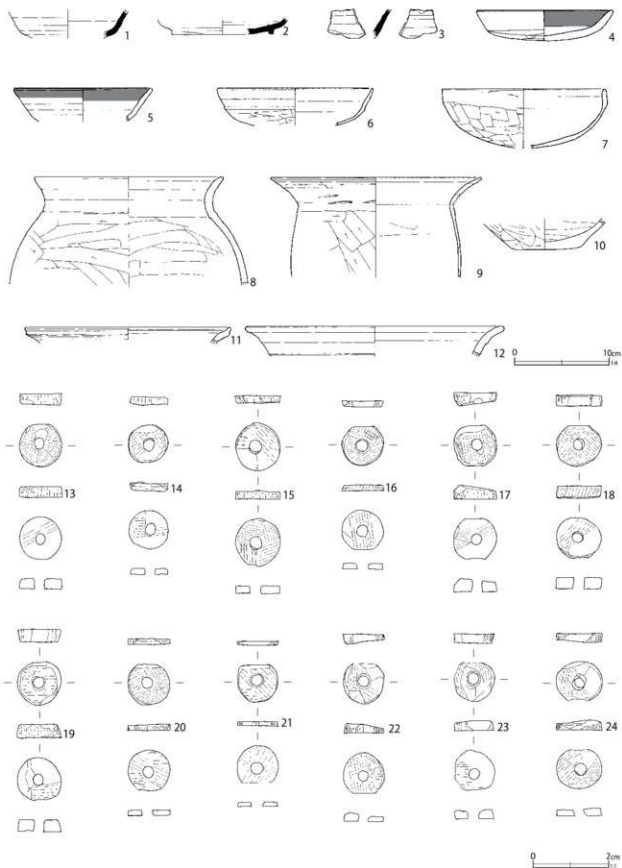
第213図 第45号住居跡遺物出土状況

ずれたことによる。カマドの構造は、煙道から煙出しにかけて、北壁を掘り抜き、天井部と袖部は白色粘土で構築している。袖部には補強材として、長胴甕が逆位で2個体ずつ設置されていた。燃烧部の掘り込みは深く、煙道から煙出しにかけては勾配が強い特徴がみられる。覆土は焼土粒子や粘土粒子等を含む暗・黄褐色土の崩落土が主体で、底面には灰層（第18層）が堆積していた。内部から遺物は出土しなかった。

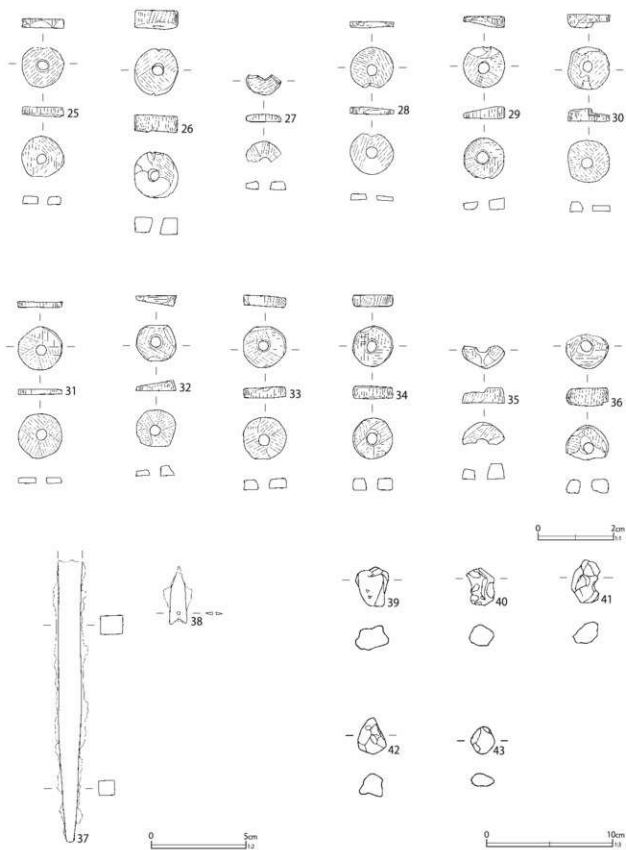
貯蔵穴は長軸0.97m、短軸0.72m、深さ0.37mで、北東隅角に位置する。平面は不整形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。内部から遺物は出土しなかった。

壁溝はカマドを除いて全周する。幅0.13m～0.31m、深さ4cm～12cmで、覆土は住居跡と同様である。

ビットは6基検出された。規模（長径×短径×深さ）は、P1は0.81m×0.67m×0.61m、



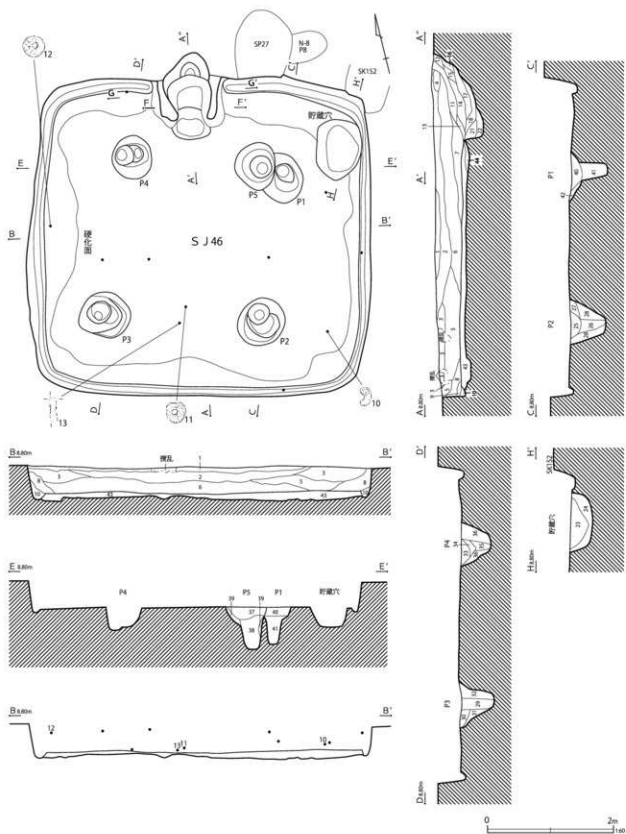
第214図 第45号住居跡出土遺物(1)



第215図 第45号住居跡出土遺物(2)

第63表 第45号住居跡出土遺物観察表(第214・215図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付坏	—	[3.0]	—	BEFG	10	普通	黄灰	A 新治か 高台付になるかは不明	
2	須恵器	高台付坏	—	[1.5]	(10.8)	BG	10	良好	灰	A 湖西か	
3	須恵器	坏	—	[3.0]	—	ABK	5	良好	灰	A 新治 箱形 胎土は大粒の白色小石多量	
4	土師器	坏	14.3	3.2	—	B	55	普通	にぶい黄橙	No.47・A 内面漆	145-1
5	土師器	坏	(14.4)	[3.5]	—	ABDEG	5	普通	にぶい黄橙	No.41 内外面漆	
6	土師器	坏	(16.4)	[3.9]	—	ABEFG	35	普通	にぶい橙	No.30・32・D 内彎口縁坏 細かな雲母	145-2
7	土師器	坏	(17.0)	[6.3]	—	ABDEG	60	普通	にぶい褐	No.24・38・39・A・D 北武蔵型坏 底部磨減激しい	145-3
8	土師器	甕	(19.8)	[11.6]	—	ABE	25	普通	明赤褐	No.44 球胴甕	145-4
9	土師器	甕	(22.2)	[10.6]	—	ABDEG	30	普通	にぶい赤褐	No.34・B 武蔵型甕 角閃石多量	145-5
10	土師器	甕	—	[3.2]	7.2	BDEG	70	普通	橙	No.28 球胴甕	145-6
11	土師器	甕	(21.6)	[1.7]	—	ABEFG	10	普通	にぶい黄橙	No.43 常総型甕(新治周辺) 内面黒底あり 大粒の白色粒子	
12	土師器	甕	(26.6)	[3.2]	—	ABG	10	普通	にぶい褐	No.7	
13	石製品	白玉	最大径11.5mm	孔径2.5mm	厚さ3.0mm	重さ6.0g				No.1 粘板岩	168-5
14	石製品	白玉	最大径10.2mm	孔径2.5mm	厚さ2.0mm	重さ0.3g				No.2 粘板岩	168-5
15	石製品	白玉	最大径11.8mm	孔径3.0mm	厚さ2.2mm	重さ0.4g				No.3 粘板岩 刃物痕	168-5
16	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径3.0mm	厚さ1.5mm	重さ0.3g				No.4 粘板岩	168-5
17	石製品	白玉	最大径11.2mm	孔径2.5mm	厚さ3.5mm	重さ0.6g				No.6 粘板岩	168-5
18	石製品	白玉	最大径12.0mm	孔径3.0mm	厚さ3.1mm	重さ0.6g				No.8 粘板岩 孔内横位回転痕	168-5
19	石製品	白玉	最大径11.5mm	孔径2.7mm	厚さ3.5mm	重さ0.6g				No.9 粘板岩	168-5
20	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径2.7mm	厚さ1.5mm	重さ0.3g				No.10 粘板岩	168-5
21	石製品	白玉	最大径10.5mm	孔径3.0mm	厚さ1.0mm	重さ0.2g				No.11 粘板岩	168-5
22	石製品	白玉	最大径10.5mm	孔径3.0mm	厚さ2.5mm	重さ0.4g				No.12 粘板岩か	168-5
23	石製品	白玉	最大径10.5mm	孔径3.0mm	厚さ2.5mm	重さ0.4g				No.13 粘板岩	168-5
24	石製品	白玉	最大径12.0mm	孔径3.0mm	厚さ2.5mm	重さ0.4g				No.14 粘板岩	168-5
25	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径3.0mm	厚さ2.5mm	重さ0.4g				No.15 粘板岩 孔内横位回転痕	168-5
26	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径3.0mm	厚さ4.5mm	重さ1.0g				No.16① 粘板岩	168-5
27	石製品	白玉	最大径(10.5)mm	孔径(3.0)mm	厚さ2.0mm	重さ0.1g				No.16② 粘板岩	168-5
28	石製品	白玉	最大径11.5mm	孔径3.0mm	厚さ1.8mm	重さ0.3g				No.17 粘板岩	168-5
29	石製品	白玉	最大径10.7mm	孔径3.0mm	厚さ3.0mm	重さ0.4g				No.18 粘板岩	168-5
30	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径3.0mm	厚さ3.2mm	重さ0.5g				No.19 粘板岩	168-5
31	石製品	白玉	最大径11.5mm	孔径2.8mm	厚さ1.3mm	重さ0.3g				No.20 粘板岩	168-5
32	石製品	白玉	最大径10.5mm	孔径3.0mm	厚さ2.6mm	重さ0.3g				No.21 粘板岩	168-5
33	石製品	白玉	最大径10.1mm	孔径3.0mm	厚さ3.0mm	重さ0.5g				No.22 粘板岩 孔内横位回転痕	168-5
34	石製品	白玉	最大径10.3mm	孔径2.9mm	厚さ3.2mm	重さ0.6g				No.23 粘板岩	168-5
35	石製品	白玉	最大径(1.1)mm	孔径3.0mm	厚さ4.0mm	重さ0.3g				D 粘板岩	168-5
36	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径3.0mm	厚さ4.5mm	重さ0.5g				C 粘板岩	168-5
37	鉄製品	棒状品	長さ[14.9]	幅0.8~1.2	厚さ0.8~1.0	重さ26.0g				No.27	172-1
38	鉄製品	不明	長軸長2.8	最大幅0.9	厚さ0.2	重さ1.9g				A	172-1
39	貝類(穴蝕)	—	長軸長2.1	最大幅1.7	厚さ1.0	重さ2.5g					170-1
40	貝類(穴蝕)	—	長軸長1.9	最大幅1.3	厚さ1.1	重さ1.4g					170-1
41	貝類(穴蝕)	—	長軸長2.2	最大幅1.2	厚さ1.1	重さ2.2g					170-1
42	貝類(穴蝕)	—	長軸長1.9	最大幅1.4	厚さ1.1	重さ2.0g					170-1
43	貝類(穴蝕)	—	長軸長1.4	最大幅1.2	厚さ0.6	重さ0.6g					170-1



第216図 第46号住居跡(1)

5 J 46	
1 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・焼土粒子(φ1~3mm)中量 しまり強い 粘性なし(覆土)
2 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 中量 しまりや強い 粘性なし(覆土) 少量 しまりや強い 粘性なし(覆土)
3 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 少量 しまりや強い 粘性なし(覆土)
4 黄褐色土	黄褐色土層 焼土粒子(φ10mm)・黒褐色粒子少量 しまりや強い 粘性強い
5 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)中量 ロームブロック(φ5~ 10mm)・焼土粒子(φ1~3mm)少量 しまりや強い (覆土)
6 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 多量 焼土粒子(φ1~3mm)中量 白色粘土粒子(φ10 ~30mm)少量 しまりや強い 粘性なし(覆土)
7 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm)・ 焼土粒子(φ1~5mm)・白色粘土粒子(φ1~3mm)中量 炭化物粒子(φ5mm)少量 しまりや強い 粘性なし (覆土)
8 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 少量 しまりや強い 粘性なし(硬質腐土・崩壊土)
9 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 中量 しまり強い 粘性なし(硬質腐土)
10 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 しまりや強い 粘性なし (硬質腐土)
貯蔵穴	
23 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)中量 焼土粒子(φ1~2mm) 少量 しまりや強い 粘性強い
24 暗褐色土	ブラックバンド(φ30~40mm)をブロック状に少量含む しまりや強い 粘性強い
貼床	
43 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)多量 ロームブロック(φ5~ 10mm)中量 焼土粒子(φ1mm)・白色粘土粒子(φ1mm) 少量 しまり強い 粘性なし(貼床)
44 にぶい黄褐色土	焼土粒子(φ1~3mm)・焼土ブロック(φ5~10mm)・ 白色粘土粒子(φ1~2mm)・白色粘土ブロック(φ5~10mm) 少量 しまり強い 粘性なし(貼床)

ビット1~5	ローム粒子(φ2~3mm)・炭化物粒子中量 しまりや強い 粘性強い
25 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 しまりや強い 粘性強い
26 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 しまりや強い 粘性強い
27 暗褐色土	ロームブロック(φ30~40mm)多量 しまりや強い 粘性強い
28 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・炭化物粒子(φ1~2mm)少量 しまりや強い 粘性強い
29 暗褐色土	ロームブロック(φ20~30mm)・焼土粒子(φ5mm)中量 炭化物粒子(φ1~2mm)少量 しまり強い 粘性強い
30 暗褐色土	ローム土をまだらに多量含む ロームブロック(φ20~ 30mm)中量 しまり強い 粘性強い
31 暗褐色土	ロームブロック(φ20~40mm)多量 しまり強い 粘性強い
32 褐色土	ローム粒子(φ2~4mm)多量 焼土粒子(φ1~2mm)微量 しまりや強い 粘性強い
33 暗褐色土	ロームブロック(φ20~30mm)少量 灰褐色土 (φ0.5mm)中量 しまり強い 粘性強い
34 暗褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 しまり強い 粘性強い
35 暗褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)中量 焼土粒子(φ5mm)少量 しまり強い 粘性強い
36 暗褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm)微量 しまり強い 粘性強い
37 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 中量 しまり強い 粘性なし
38 褐色土	ローム粒子(φ5~8mm)中量 しまり強い 粘性強い しまり強い 粘性強い(柱状腐土の崩壊土)
39 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 ロームブロック中量 しまり強い 粘性強い(柱状腐土の崩壊土)
40 暗褐色土	ローム粒子(φ3~5mm)中量 焼土粒子(φ5mm)少量 しまり強い 粘性強い
41 暗褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)多量 しまり強い 粘性強い
42 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量 炭化物粒子(φ1~2mm) 微量 しまりや強い 粘性強い

第217図 第46号住居跡(2)

P2は0.78m×0.7m×0.56m、P3は0.78m×0.7m×0.57m、P4は0.7m×0.63m×0.48m、P5は0.76m×0.65m×0.67m、P6は確認範囲で0.28m×0.24m×0.29mである。P1~P5は主柱穴と考えられる。P1はP5に壊されており、構築当初の主柱穴で、覆土は埋戻しに伴うローム粒子を多量に含む暗褐色土が堆積していた。覆土は暗褐色土を主体とし、抜柱後の堆積と考えられる。P6は掘り方確認時に検出された。

遺物は少なく、住居跡内に散在する。そのうち、10・11・13は床面直上、6・7はカマド左袖内、8・9はカマド右袖内、5はカマド崩落土から出土した。主に古墳時代(7世紀後半)の土師器・高杯・甕・勾玉・白玉が出土した。

1は須恵器小型壺か。器壁は厚く、下端に剥落痕があり、台がついていた可能性もある。白色粒子を多量に含む。混入か。

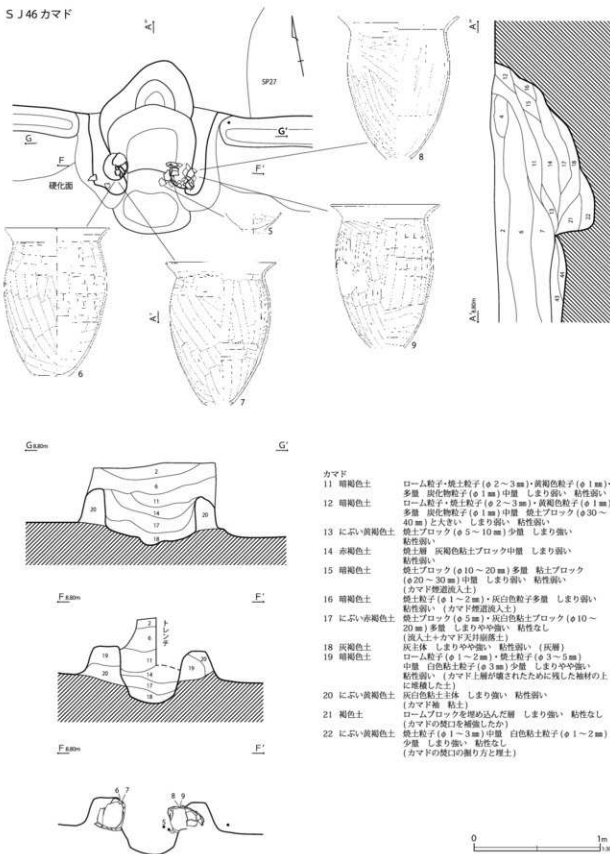
2~4は土師器環である。3・4は北武蔵型環である。2は器壁は厚く、口縁部は長く、外に開く。全体的に白く粉っぽい。内面と口唇部に黒漆の痕跡がある。3はやや身が深く、4は身が浅い。

5は小型台付甕か。底部(脚部部との接合部)は折損しており、剥落の形状から、本来脚部が付くものと思われる。器壁は薄く一定しない。外面は被熱により剥落が激しい。胎土に2mm~3mm程の小礫を含む。

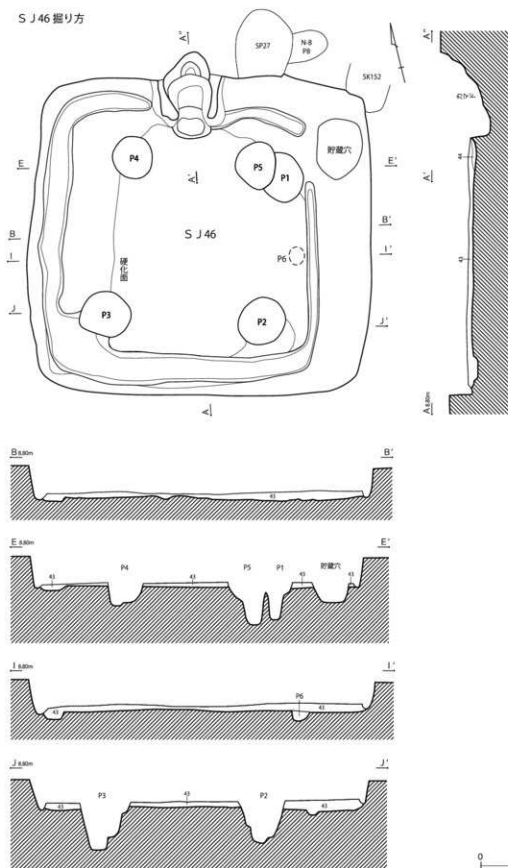
6~9は武蔵型甕である。いずれもカマドの袖材に使用されていた。長胴で口縁部が外反し、胴部上半に最大径が位置し、その部分が丸みを帯び、底部は細くなる。外面のヘラケズリと内面のヘラナデは、調整の順序や方向に若干の違いがみられる。

10は滑石製の勾玉である。平面は「C」字形であるが、縦方向・横方向ともにややゆがむ。穿孔部は両側にすり鉢状の穿孔痕がみられ、両側か

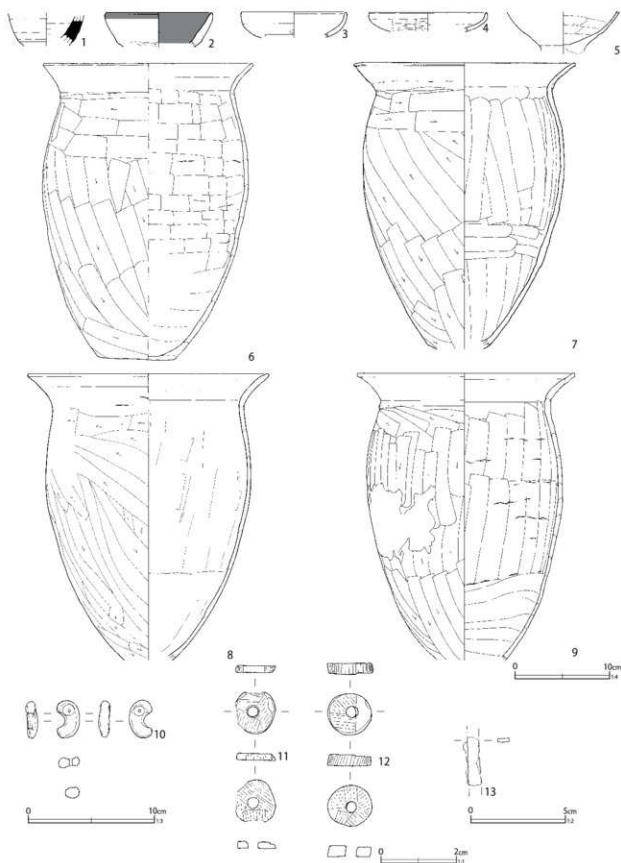
S J 46 カマド



第218図 第46号住居跡(3)



第219図 第46号住居跡(4)



第220図 第46号住居跡出土遺物

第64表 第46号住居跡出土遺物観察表(第220図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	炊煮器	甕	—	[3.5]	—	ABG	40	良好	灰	D 小型甕か、白色粒子多量、暗い色調高台部貼り付け痕	
2	土師器	坏	(11.0)	[3.6]	—	BDEG	20	普通	にぶい黄橙	B 内外面漆	
3	土師器	坏	(11.0)	[2.7]	—	BDEG	5	普通	橙	床面第2面・B 北武蔵型坏	
4	土師器	坏	(12.2)	[2.0]	—	ABDEG	15	普通	にぶい赤褐	C 北武蔵型坏	
5	土師器	台付甕	—	[4.5]	—	BCGK	60	普通	赤褐	No.12・カマド 小型台付甕か、胎土は2～3mmの小礫 被熱(転用材か) 外面風化 底部刺摩	145-7
6	土師器	甕	22.1	31.4	8.1	ABDEG	90	良好	橙	No.16・カマド 長胴甕	146-1
7	土師器	甕	23.2	[25.3]	(6.3)	ABDEF	80	普通	橙	No.16・カマド・A・C	146-2
8	土師器	甕	(25.2)	[30.2]	—	ABDE	30	普通	にぶい赤褐	No.15・カマド・B 長胴甕 内面磨減	146-3
9	土師器	甕	23.6	[30.4]	—	ABDEFG	80	普通	明赤褐	No.15・カマド 長胴甕	146-4
10	石製品	勾玉	長さ2.9	幅1.8	厚さ0.8	重さ5.8g				No.1 滑石	168-2
11	石製品	白玉	最大径12.0mm	孔径2.5mm	厚さ2.0mm	重さ0.3g				No.7 粘板岩	168-5
12	石製品	白玉	最大径11.8mm	孔径3.0mm	厚さ2.9mm	重さ0.6g				No.10 粘板岩	168-5
13	鉄製品	棒状品	長さ[2.6]	幅0.6	厚さ0.2	重さ1.3g				No.6	172-1

ら穿孔したと推定される。

11・12は粘板岩製の白玉である。各面に研磨痕が残る。厚さは一定しない。

13は棒状鉄製品である。

本住居跡の時期は、7段階(7世紀後半)である。

第48号住居跡(第221～223図)

L・M-7グリッドに位置する。規模は長軸3.61m、短軸3.44m、深さ0.35m、主軸方位はN-44°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には全面に掘り方と貼床が認められた。

床面からは間仕切溝とピットが確認された。間仕切溝と推定される溝は、北西壁中央から床面中央にかけて直線状に延びる。幅0.36m、長さ1.55m、深さ0.16mである。

ピットは3基検出された。P1は構造と位置ともに不規則で、その性格は判断しがたい。P2は間仕切溝の延長線上に位置し、主柱穴の可能性がある。P3は長軸0.5m、短軸0.44m、深さ0.43mと比較的掘り込みは整っている。南隅角に位置することを踏まえると、貯蔵穴の可能性も残る。

遺物は少なく、南東隅角に集中する。そのうち、5が床面直上出土遺物である。主に古墳時代後期の土師器坏・甕・白玉が出土した。

1～4は坏である。1は坏身模倣坏、2は半球形坏、3は有段口縁坏、4は埴形の坏である。1は器形がゆがんでいる。口縁部は内傾し、屈曲部に浅い段がみられる。内面に放射状のミガキを施す。2も器形はゆがみ、器壁が厚く、口唇部は直立する。3は口縁部外面の段と内面のヨコナデが強く、明瞭な段を形成する。内外面に黒漆の痕跡がある。4は埴形で内面口唇部に屈曲があるが、口縁部自体が短いためはつきりしない。外面に黒色処理の痕跡が残る。

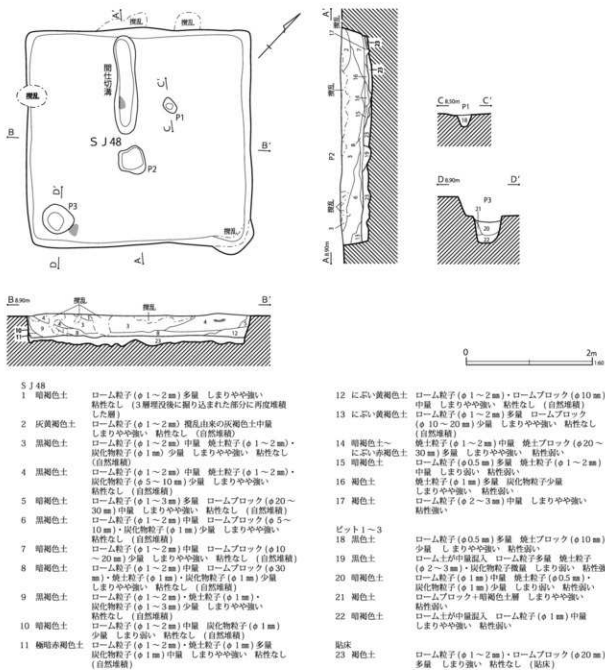
5は小型甕である。口縁部は大きく外反し、胴部は下半に最大径が位置する。内外面にヘラケズリを多用する。器形はゆがんでおり、口縁部と底部の中心軸が揃わない。

6は粘板岩製の白玉である。

本住居跡の時期は、6段階(7世紀前半)である。

第49号住居跡(第224・225図)

M-6グリッドに位置する。内部は攪乱により大きく削平されており、その上、西側は調査区域

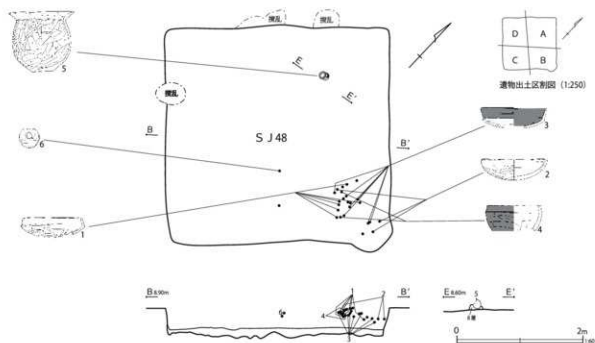


第221図 第48号住居跡

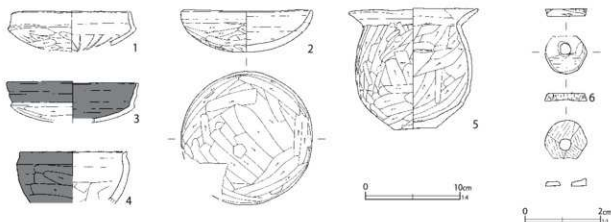
外のため、確認できた範囲はごく一部であった。規模は確認範囲で、長軸 4.62m、短軸 1.56m、深さ 0.37m、主軸方位は N-27°-W である。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロック、焼土・炭化物を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には掘り方と貼床をわずかに確認することができた。

床面からはカマド、壁溝、ビットが検出された。カマドは確認範囲で、長軸 0.79m、短軸 0.46m、深さ 0.14m で、東壁中央に位置する。その構造は、東壁を掘り込み、天井部や袖部は白色粘土で構築している。覆土は燃焼部底面の灰層と焼土層のみを確認した。内部から遺物は出土しなかった。

壁溝は南側壁面をめぐる。幅 0.19m ~ 0.52m、



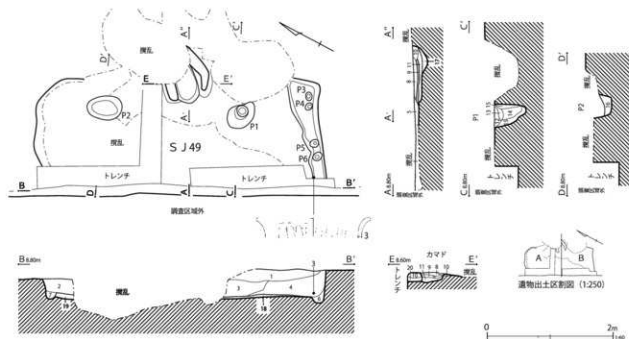
第222図 第48号住居跡遺物出土状況



第223図 第48号住居跡出土遺物

第65表 第48号住居跡出土遺物観察表(第223図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	11.9	[4.3]	—	ADEG	70	普通	赤褐	No.5・12・13・14・20・27・B 坏身模倣坏 内外面漆か	145-8
2	土師器	坏	13.8	4.5	—	ABDEFG	90	普通	にぶい橙	No.7・23・24 半球形坏	145-9
3	土師器	坏	15.8	[4.4]	—	BDG	60	普通	明赤褐	No.8・10・16・17・19・21・25・B 有段口縁坏 内外面漆	145-10
4	土師器	坏	(11.2)	[5.5]	—	ABDEG	20	普通	明赤褐	No.9・15・B 坏身模倣坏 外面黒色処理	147-1
5	土師器	甕	13.5	12.9	4.5	ABDEG	95	普通	橙	No.1 小型甕	168-5
6	石製品	白玉	最大径11.0mm	孔径3.2mm	厚さ2.0mm	重さ0.3g				No.2 粘板岩	



S J 49

- 1 黒褐色土 シルト質土 (φ20～30mm) を多量に含む マンガンを含み少量含む しまり強い 粘性弱い (自然堆積)
- 2 黒褐色土 ロームブロック (φ10～20mm)・焼土粒子 (φ1～2mm) 中量 しまり強い 粘性弱い (自然堆積)
- 3 黒褐色土 炭化物粒子 (φ20～30mm) 微量 マンガンをまだらに多量含む しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)
- 4 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 多量 焼土粒子 (φ1mm) 中量 しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 5 黒褐色土 ローム粒子 (φ0.5mm)・焼土粒子 (φ1～2mm) 多量 炭分をやや多く含む しまりやや強い 粘性強い
- 6 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 しまり強い 粘性強い
- 7 暗褐色土 焼土ブロック (φ10mm) 少量 粘土ブロック (φ10mm) 中量 しまり強い 粘性強い

カマド

- 8 赤褐色土 灰層 焼土ブロック (φ20～30mm)・炭化物粒子 (φ1～2mm) 中量 しまり強い 粘性強い (灰層)
- 9 明褐色土 焼土層 炭化物多量 しまり強い 粘性強い (灰床面)
- 10 にいり黄褐色土 粘土層 焼土ブロック (φ10～20mm) 少量 しまり強い 粘性強い (カマド構築土)
- 11 黒褐色土 焼土ブロック (φ0.5～10mm) 中量 粘土ブロック (φ10mm) 多量 しまり強い 粘性強い (灰層)

ビット1・2

- 12 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)
- 13 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 ロームブロック (φ5mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
- 14 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm)・ロームブロック (φ5mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (後柱後の堆積土)
- 15 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (柱表込が根柱の間に敷いた土)
- 16 黒褐色土 ローム粒子 (φ2mm)・焼土粒子 (φ1mm) 微量 しまりやや強い 粘性強い
- 17 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm)・ロームブロック (φ20mm) 少量 しまり強い 粘性強い (陥没が埋め戻し土 カマドは造りかえられた2度目の可能性もある)
- 18 暗褐色土 ロームブロック (φ20～30mm) 中量 しまり強い 粘性強い (陥没)
- 19 暗褐色土 焼土粒子 (φ1mm)・粘土粒子多量 しまり強い 粘性強い (陥没)
- 20 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 ロームブロック (φ10mm)・焼土粒子 (φ1mm) 少量 しまり強い 粘性強い (陥没)

第224図 第49号住居跡

深さ6cm～10cmで、覆土は住居跡と同様である。底面に壁柱穴が4基検出された。

ビットは6基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.52m×0.37m×0.5m、P2は0.55m×0.38m×0.29mである。P1とP2は主柱穴である。P1よりもP2の方が浅く一定しない。P1には抜柱後の堆積が遺存していた。P3～P6は壁柱穴である。いずれも径0.15m、深さ0.15m前後で、P3とP4、P5とP6と対になるような形で配列されている。

遺物は少なく、3点のみ図化することができた。そのうち、3は床面よりやや上位の4層中から出土した。古墳時代後期の土師器・小型壺・甔が出土した。

1は坏身模倣である。口縁部は内傾し、屈曲部付近に段がみられる。屈曲部に受部はない。身はやや深い。

2は小型壺である。ミニチュア土器ほど小型・デフォルメされた形態ではないが、口径4.5cm、器高8.1cmと小型の壺である。器壁が厚く、口



第225図 第49号住居跡出土遺物

第66表 第49号住居跡出土遺物観察表(第225図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.0)	4.5	—	ABD	65	普通	赤褐色	A 坏身模倣坏	147-2
2	土師器	壺	4.5	8.1	(4.2)	ABEG	70	普通	にぶい褐色	B 小型壺	147-3
3	土師器	皿	(23.2)	[4.4]	—	BDEG	10	普通	灰黄褐色	No.1	

縁部はわずかに外反する。

3は瓶の口縁部である。比較的大型で、口唇部は面取りする。

本住居跡の時期は、5段階（古墳時代後期後半）である。

第50号住居跡（第226～230図）

K・L-8・9グリッドに位置する。攪乱による削平と、第6号井戸跡に壊されている。規模は長軸6.55m、短軸6.28m、深さ0.49m、主軸方位はN-26°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面はカマドから中心にかけて硬化していた。掘り方は床面中央と壁際を「回」の字状に残して、その間を掘り込み、内部に貼床を敷いていた。

床面からはカマド、壁溝、ビット、床下土壌、焼土ブロックが確認された。カマドは右側から焚口にかけて、攪乱により削平されていた。規模は確認範囲で、長軸0.64m、短軸0.33m、深さ0.68mで、北壁中央部に位置する。その構造は、煙道から煙出しは壁面を掘り込み、天井部や袖部は白色粘土で構築している。覆土は焼土や粘土を含む褐色土等が、崩落土と灰層として堆積していた。

壁溝は南東・南西隅を除いて全周する。幅0.16m～0.4m、深さ3cm～8cmで、覆土は住居跡と同様である。

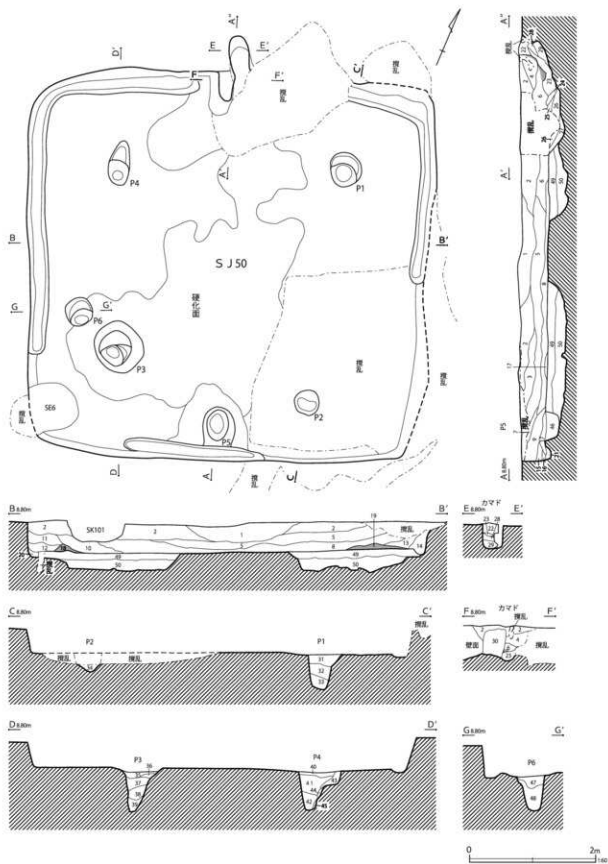
ビットは6基検出された。規模（長径×短径×深さ）は、P1は0.54m×0.51m×0.55m、P2は0.4m×0.39m×0.3m（確認範囲）、P3は0.8m×0.71m×0.7m、P4は0.71m×0.33m×0.62m、P5は0.48m×0.35m×0.22m、P6は0.45m×0.43m×0.56mである。P1～P4・P6は主柱穴である。覆土は住居跡と同様で、抜柱後の堆積状況を示している。それに対し、P2は掘り込みが浅く、位置も他の柱穴に対して南にずれている。P5は入口ビットである。周辺が硬化していた。

床下土壌は貼床の下から検出された。規模は長軸0.83m、短軸0.53m、深さ0.53mで、カマドの南側に位置する。覆土はロームブロックを含む黒褐色土と褐色土で、埋土である。遺物は出土しなかった。

焼土ブロックは壁際、およびP5周辺で検出された（第17・18層）。厚さは20cm～30cmである。炭化材は含まず、床面の被熱等も認められないため、焼失家屋ではなく、この焼土の性格は不明である。

遺物は少なく、散在する。そのうち5・8・11が床面直上出土遺物である。主に奈良時代の須恵器蓋・坏や古墳時代（7世紀後半）の土師器坏・甕・土釜・鉄鎌・鉄釘が出土した。

1～3は須恵器坏蓋である。1は摘み部分で、



第226図 第50号住居跡(1)

5 J30					
1 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10~50mm) 中量 焼土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし	25 暗褐色土	23層に似る 焼土粒子(φ3mm) 少量 粘土粒子(φ1~2mm) 中量 しまりや強い 粘性弱い (灰層)		
2 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm) 中量 炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	26 褐色土	焼土粒子(φ3mm)・粘土粒子(φ1~2mm) 中量 炭化物粒子(φ1mm) 少量 しまりや強い 粘性弱い (灰層)		
3 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm) 中量 炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	27 褐色土	焼土粒子(φ3mm) 多量 しまりや強い 粘性弱い (灰層)		
4 褐色土	焼土粒子(φ10mm) 少量 粘土粒子(φ1~5mm)・粘土ブロック多量 しまりや強い 粘性弱い (カマド構築土・崩壊土)	28 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)・焼土粒子(φ2~4mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (標出しに流入した土)		
5 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ5~10mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm)・炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	29 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)・粘土粒子(φ1~3mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (標出しに流入した土)		
6 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ5~10mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	30 灰白色土			
7 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm) 中量 ロームブロック(φ5~10mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	ビット1~6			
8 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 ロームブロック(φ5~10mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	31 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 焼土粒子(φ1~2mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
9 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 ロームブロック(φ5~10mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	32 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
10 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	33 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ10~30mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
11 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	34 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ10~20mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
12 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm)・炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	35 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 焼土粒子(φ1mm) 少量 ロームブロック(φ10mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
13 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm)・炭化物粒子(φ1mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	36 褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
14 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 焼土粒子(φ1~2mm) 少量 炭化物粒子(φ5mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	37 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
15 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 焼土粒子(φ1~2mm) 少量 炭化物粒子(φ5mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	38 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ20~30mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
16 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)	39 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 ロームブロック(φ20~30mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
17 暗赤褐色土	ローム粒子(φ1mm) 少量 焼土粒子(φ1~2mm) 中量 しまり強い 粘性なし (焼土が多い)	40 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 ロームブロック(φ5mm) 少量 焼土粒子(φ3mm)・炭化物粒子(φ3mm) 微量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
18 暗赤褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・焼土粒子(φ1~2mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (焼土が多い)	41 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10~40mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
19 暗赤褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・焼土塊(φ30~50mm) 少量 焼土粒子(φ30~50mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (18層と同じく焼土が多い)	42 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (粘土)		
20 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (灰層堆積土)	43 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 少量 ロームブロック(φ30mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (灰柱後に堆積した土)		
21 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (灰層堆積土)	44 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (粘土)		
カマド		45 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ50mm) 少量 しまり強い 粘性なし (粘土)		
22 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・白色粘土粒子(φ1~3mm)・炭化物粒子(φ1mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (標出しに流入した土)	46 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・焼土粒子(φ1mm) 少量 ロームブロック(φ20mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (粘土)		
23 暗赤褐色土	焼土ブロック(φ20~30mm)・粘土粒子(φ5mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (カマド内堆積土)	47 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・焼土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1mm) 少量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)		
24 褐色土	粘土ブロック極めて多量 しまりや強い 粘性弱い (カマド構築土の崩壊層)	48 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 多量 ロームブロック(φ30~50mm) 中量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積)		
		49 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10~50mm) 中量 しまり強い 粘性なし (灰柱)		
		50 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm) 中量 ロームブロック(φ30~50mm) 多量 しまりや強い 粘性なし (灰柱)		

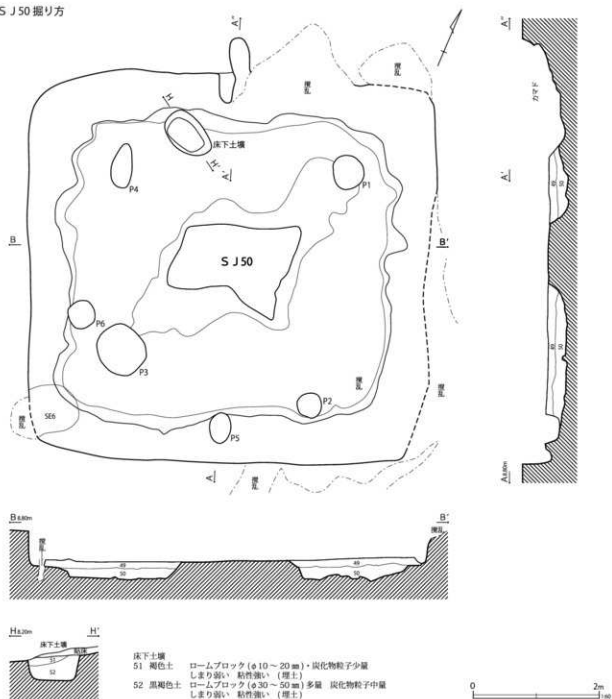
第227図 第50号住居跡(2)

摘み部は扁平で、回転ヘラケズリがみられる。2は端部を折り曲げて受け部を作る。3はかえり付き蓋。1と3は新治窯産か。

4・5は坏である。4は身が深めで、ロクロ目

が強く、底部周辺に回転ヘラケズリを施す。新治窯産。5は身が浅く、胴部はやや厚い。4に比べてロクロ目の間隔は狭い。底部付近には回転ヘラケズリがみられる。

S J 50 掘り方



第228図 第50号住居跡(3)

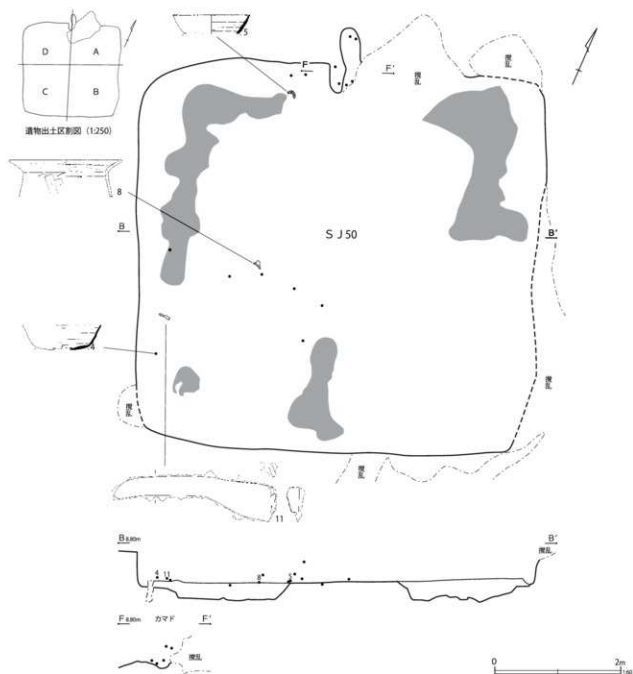
6・7は北武蔵型甕である。6は口径・器高ともに小さい。それに対して7は一回り大きい。

8・9は甕である。8は武蔵型甕で、口縁部は外反し、屈曲部は「く」の字である。薄手で、内外面の調整痕が明瞭に残る。9は常総型甕で、底

部に木葉痕が残る。外面はヘラケズリを施す。

10は土錘である。上半部は欠失する。

11は鉄鎌である。完形で、刃部は中央付近から先端にかけて細く、やや直線的な弧を描く。柄の装着部分は端部を折り曲げることで、柄装着時



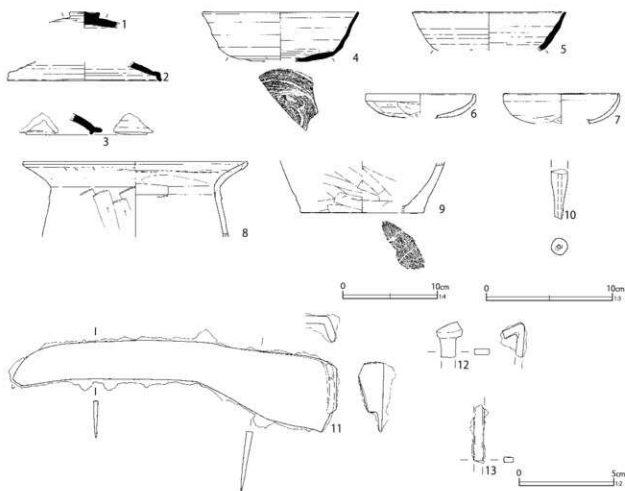
第229図 第50号住居跡遺物出土状況

の結束を強くしている。

12は鉄釘である。方頭釘の先端である。

13は棒状鉄製品である。

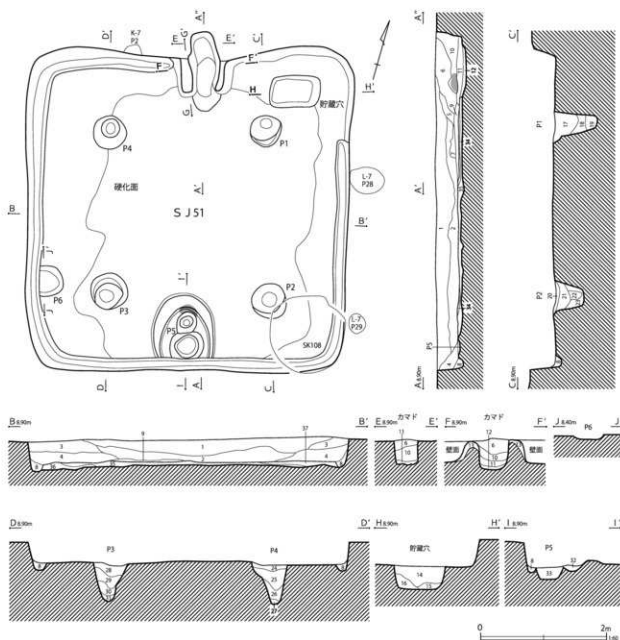
本住居跡の時期は、7段階（7世紀末）である。



第230図 第50号住居跡出土遺物

第67表 第50号住居跡出土遺物観察表(第230図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.7]	—	BEFG	50	良好	にぶい黄橙	D 新治 大粒の白色粒子	147-4 147-5 147-6 147-7 147-8 147-9 170-1 172-1 172-1 172-1
2	須恵器	蓋	(16.4)	[2.0]	—	BEGK	5	普通	灰白	A 白色(焼成がよくない) 全体的に磨減激しい	
3	須恵器	蓋	—	[2.7]	—	BEG	5	良好	楊灰	B 新治 かえり端部貼り付け	
4	須恵器	坏	(16.4)	5.2	—	ABFG	15	普通	黒	Na.13・D 新治 雲母多量	
5	須恵器	坏	(16.0)	[4.1]	(11.8)	BF	50	普通	黒	Na.3 新治 雲母多量	
6	土師器	坏	(11.6)	[2.6]	—	AEDG	20	普通	橙	A 北武藏型坏	
7	土師器	坏	(12.2)	[3.2]	—	BDEF	10	普通	楊	D 北武藏型坏	
8	土師器	甕	(23.6)	[8.0]	—	ABDEFGK	15	普通	にぶい橙	Na.7 武藏型甕 胎土はチャート小石	
9	土師器	甕	—	[5.4]	(13.0)	BF	15	普通	楊	D 常陸型甕 底部木葉底	
10	土製品	土埴	長軸長0.3 最大径4.9 孔径0.3 重さ4.9g		—	AB	60	普通	にぶい黄橙	A	
11	鉄製品	鎌	長さ[17.1] 刃部幅2.0~3.2 背幅0.3~0.4 重さ79.5g						Na.11		
12	鉄製品	釘	長さ[1.8] 頭幅1.2~1.4 身幅0.8 重さ4.3g						C		
13	鉄製品	棒状品	長さ[3.1] 幅0.5 厚さ0.2 重さ2.0g								



第231図 第51号住居跡(1)

第51号住居跡(第231～234図)

K・L-7グリッドに位置する。第108号土壇に壊されている。規模は長軸5.21m、短軸5.19m、深さ0.39m、主軸方位はN-15°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には全面に掘り方と貼床が認められ、周辺を除いて硬化していた。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ピット、粘土ブロックが確認された。カマドは長軸1.27m、短軸0.97m、深さ0.47mで、北壁の中央に位置する。その構造は、煙道から煙出しにかけて北壁を掘り込む。他の住居跡のように、袖部全体には粘土を使用せず、下半部は地山を掘り残して構築していた。ただし、カマドの覆土と床面上に粘土ブロックが検出され、天井部には粘土を使用してい

SJ51		
1 黒褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)中量	ロームブロック(φ5mm)少量
2 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)多量	ロームブロック(φ10~20mm)中量
3 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)多量	ロームブロック(φ10~30mm)少量
4 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)多量	ロームブロック(φ10~20mm)少量
6 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・焼土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
8 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
9 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)中量	ロームブロック(φ10~20mm)少量
カマド		
5 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1mm)少量	ロームブロック(φ3~5mm)少量
7 にぶい黄褐色土	粘土ブロック極めて多量	ロームブロック(φ30mm)少量
10 赤褐色土	焼土粒子(粘土が母体で焼化した10層の下平)	ロームブロック(φ10mm)少量
11 黒褐色土	焼土粒子(φ1mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
12 黒褐色土	焼土粒子(φ1mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
13 黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ5mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
貯蔵穴		
14 暗褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)中量	ロームブロック(φ5~10mm)少量
15 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ5~10mm)中量	ロームブロック(φ30~40mm)少量
16 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)中量	ロームブロック(φ10~20mm)中量
ビット1~5		
17 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量

18 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10~20mm)中量	ロームブロック(φ30mm)少量
19 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)中量	ロームブロック(φ10~20mm)少量
20 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)・ロームブロック(φ10mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
21 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)・ロームブロック(φ10mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
22 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
23 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1mm)・ロームブロック(φ30mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
24 褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ30mm)中量	ロームブロック(φ30mm)少量
25 黒褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
26 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)中量	ロームブロック(φ20~30mm)少量
27 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~2mm)・ロームブロック(φ20~30mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
28 にぶい黄褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ30mm)中量	ロームブロック(φ30mm)少量
29 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)中量	ロームブロック(φ5mm)少量
30 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ5~10mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
31 暗褐色土	ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10mm)中量	ロームブロック(φ30mm)少量
32 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)・焼土粒子(φ1mm)・炭化物粒子(φ1~2mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
33 暗褐色土	ローム粒子(φ1mm)・ロームブロック(φ10mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
竈床		
34 黒褐色土	ローム粒子(φ2~3mm)少量	ロームブロック(φ30mm)少量
35 褐色土	ローム土主体とする	ロームブロック(φ30~40mm)をブロック状に含む
36 暗褐色土	ローム土主体とする	ロームブロック(φ30~40mm)中量
37 褐色土	ローム土主体とする	ロームブロック(φ30~40mm)中量

第232図 第51号住居跡(2)

たと考えられる。覆土には崩落土とともに、燃焼部底面に灰層が堆積していた。内部から土製支脚が倒れた状態で出土した。

貯蔵穴は長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.39mで、北東隅角に位置する。平面は隅丸長方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土・にぶい黄褐色土で、崩落土等が堆積したものである。内部から土師器甕の破片が出土した。

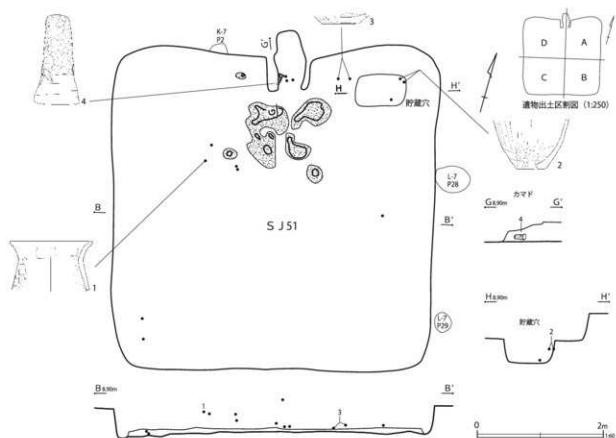
壁溝は貯蔵穴周辺を除いて全周する。幅0.19m～0.38m、深さ3cm～12cmで、覆土は住居跡と同様である。

ビットは6基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.53m×0.5m×0.71m、P2は0.58m(確認範囲)×0.55m×0.5m、P3は0.62m×0.6m×0.67m、P4は0.53m×0.52m

×0.62m、P5は0.75m(確認範囲)×0.54m×0.25m、P6は0.49m×0.38m(確認範囲)×0.07mである。P1～P4は主柱穴である。覆土は抜柱後の堆積状況を示している。P5は入口ビットである。「8」の字状の掘り込みで、深さは0.25mと浅い。ビットの周りには土手状の高まりがある。P6の性格は不明。

粘土ブロックはカマドの正面から検出された。覆土中にまとまっており、カマドが崩落し、その構築材が住居内に堆積したものと考えられる。

遺物は少ない。カマドや貯蔵穴、及びその周辺から破片が出土したに過ぎない。そのうち、4はカマド内、2は貯蔵穴内、3は床面直上出土遺物である。主に古墳時代(7世紀前半)の土師器甕・支脚・管玉が出土した。



第233図 第51号住居跡遺物出土状況

1～3は甕である。1は長胴甕の上半部分で、口縁部の外反度合いは弱く、胴部は肩が張らず、直線的に下がることから、最大径が胴部下半に位置する器形と考えられる。2は長胴甕の胴部下半である。器壁が厚く、ヘラケズリを多用する。3は球胴甕か壺の底部と思われる。

4はカマドの土製支脚である。中実で上半をユビナデとユビ押圧、下半をヨコナデで整形する。

5は土製管玉である。

本住居跡の時期は、出土遺物が少ないが、6段階（7世紀前半）と推定される。

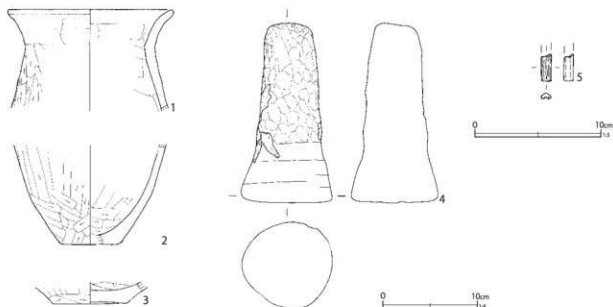
第54号住居跡（第235～238図）

K-6・7グリッド、L-6グリッドに位置する。本住居跡と第52・53号住居跡は、重複しており、第54号→第53号→第52号の順に新しくなる。本住居跡は第53号住居跡と第196号土壌に壊されている。規模は長軸5.73m、短軸5.57m、

深さ0.49m、主軸方位はN-22°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には掘り方と貼床が認められ、カマドから中央部にかけて硬化していた。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ピットが確認された。カマドは長軸1.58m、短軸1.12m、深さ0.58mで、北壁中央に位置する。その構造は、煙道から煙出しにかけて北壁を掘り込み、天井部や袖部は白色粘土で構築している。袖部は床面付近の地山を、山なりに掘り残している。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土の崩落土を主体とする。内部はあまり焼けておらず、遺物は出土しなかった。

貯蔵穴は長軸0.82m、短軸0.6m、深さ0.5mで北東隅角に位置する。平面は隅丸長方形である。覆土は住居跡と同様である。内部から遺物は出土



第234図 第51号住居跡出土遺物

第68表 第51号住居跡出土遺物観察表(第234図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	(17.4)	[10.8]	—	ABEG	25	普通	橙	No.7・A・D 長胴甕 成形は雑	147-10
2	土師器	甕	—	[10.6]	(6.4)	ABE	25	普通	黒褐	No.14・15 長胴甕 大粒の赤色粒子 内面上部剥離	148-1
3	土師器	甕	—	[2.3]	7.9	ABEG	50	普通	にぶい橙	No.4・5 球胴甕か	
4	土製品	支脚	—	18.9	—	ABEG	100	普通	橙	No.13 中実 外面付着物痕	148-2
5	土製品	管玉	長軸長2.7 最大径0.6 孔径0.3 重さ0.4g			B	50	普通	にぶい黄橙	カマド	168-4

しなかった。

壁溝は南西隅角と、東壁の一部を除いて壁際にめぐる。幅0.12m～0.34m、深さ3cm～8cmで、覆土は住居跡と同様である。

ピットは5基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.5m×0.42m×0.34m、P2は0.26m×0.23m×0.28m、P3は0.34m×0.33m×0.24m、P4は0.54m×0.48m×0.25m、P5は0.41m×0.25m×0.21mである。P1～P4は主柱穴、P5は入口ピットである。P2とP5は第53号住居跡によって、上部が削平されていた。覆土は住居跡と同様である。P5は主柱穴よりも規模が小さい。覆土は粒径の大きいローム粒子を含む暗・褐色土の自然堆

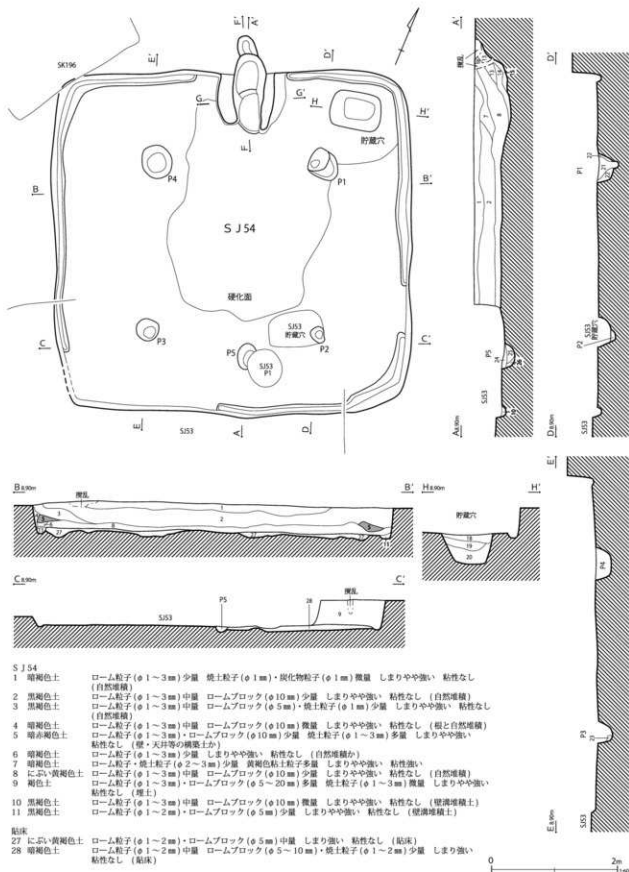
積である。

遺物は少ない。平面的には貯蔵穴周辺と南側に集中して分布する。そのうち、2のみ床面直上出土遺物である。6・7・10・11は、同一レベルでまとまって出土した。6・7は正位、10は逆位、11は破碎した状態で、完形は10のみだった。主に古墳時代後期の須恵器高坏、土師器坏・高坏・鉢・甕・甔・土玉が出土した。

1は須恵器坏蓋である。摘み部分は扁平化せず、整う。上半に回転ヘラケズリを施す。混入か。

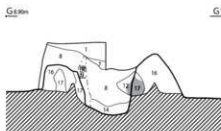
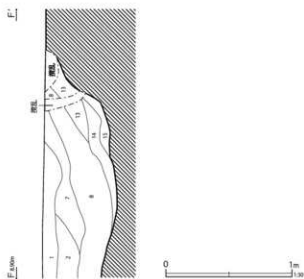
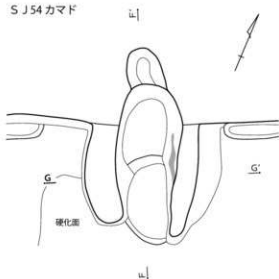
2は高坏か。外面上半はクロク整形で、段部より下位はヘラケズリを施す。内面底部に自然軸がみられる。混入か。

3～5は坏である。3・4は坏身模倣坏である。



第 235 図 第 54 号住居跡 (1)

S J54 カマド



カマド

- | | |
|------------|--|
| 12 褐色土 | 粘土層 炭化物粒子 (φ 2~3mm) 少量 しまり強い 粘性強い |
| 13 暗褐色土 | (カマド天井部崩落土) 焼土ブロック (φ 10mm) 多量 しまり強い 粘性強い |
| 14 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm)・焼土粒子 (φ 2~3mm) 少量 しまりやや強い 粘性強い |
| 15 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm)・焼土粒子 (φ 2~3mm) 少量 しまりやや強い 粘性強い |
| 16 にふい黄褐色土 | ローム粒子 (φ 1~3mm)・ロームブロック (φ 5mm) 中量 灰白色粘土粒子 (φ 5mm) 多量 しまりやや強い 粘性なし (カマド袖網裏土) |
| 17 にふい黄褐色土 | 灰白色粘土主体 しまりやや強い 粘性強い (カマド袖網裏土) |

貯蔵穴

- | | |
|------------|---|
| 18 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm) 少量 焼土粒子 (φ 5mm) 微量 しまり強い 粘性強い |
| 19 褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm)・ロームブロック (φ 20~30mm) 少量 ロームブロック (φ 50mm) 中量 しまり強い 粘性強い |
| 20 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 2~3mm) 少量 ロームブロック (φ 30~40mm) 多量 しまり強い 粘性強い |
| ビット 1・3・5 | |
| 21 にふい黄褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm) 少量 しまり強い 粘性強い |
| 22 褐色土 | ロームブロック (φ 30~40mm) 多量 しまり強い 粘性強い |
| 23 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子 (φ 5mm) 微量 しまりやや強い 粘性強い |
| 24 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm) 中量 しまり強い 粘性強い |
| 25 褐色土 | ローム粒子 (φ 5mm) 少量 ロームブロック (φ 50mm) 多量 しまり強い 粘性強い |
| 26 明褐色土 | ローム土 しまりやや強い 粘性強い |

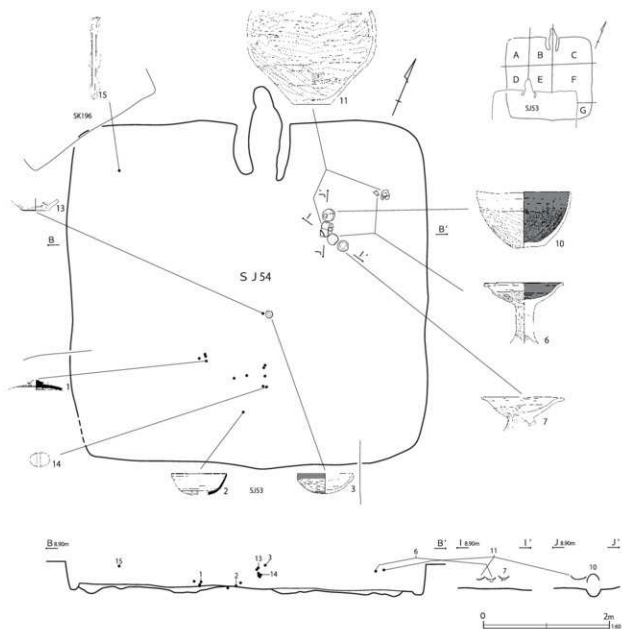
第236図 第54号住居跡(2)

3は口縁部の立ち上がりは短く、わずかに内傾する。口径は大きく、身は深い。外面口縁部に黒漆、底部に黒斑が残る。4は3より一回り小型で、口縁部の内傾度合いがやや強い。5は器壁が厚く、内面にミガキを密に施す。全体的に粉っぽい。

6~9は高坏である。6は有段の坏部に、中実・長脚の脚部がつく。坏部は口縁が大きく外反し、口唇部を面取りするが、ゆがむ。内面は炭素吸着を施す。脚部はヘラケズリで整形する。全体的に

ゆがむ。7は有段の坏部に、中空・長脚の脚部がつく。坏部は6よりも口縁部が外反する。脚部にはヘラケズリを施す。全体的にゆがむ。8・9は脚部片である。

10は鉢である。口縁部は外に開きつつ、上に立ち上がり、ヨコナデを2段施す。外面はヘラケズリ、内面は横方向のミガキの後に放射状のミガキを行う。内面は炭素吸着を施す。底部は平底である。全体的にゆがむ。



第237図 第54号住居跡遺物出土状況

11は壺か球胴甕と推定される。全体的にゆがみが強く、随所に輪積み痕が残る。

12・13は甕である。13は小型甕で、底部外周に接地面が残る。

14は土玉である。

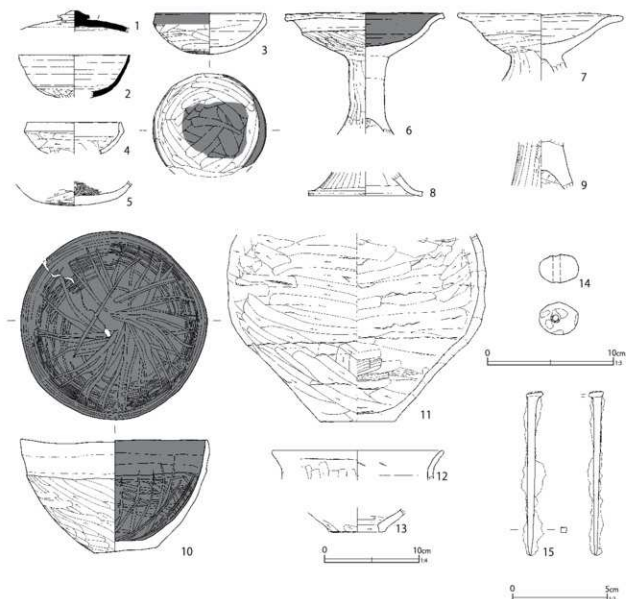
15は方頭釘である。混入と考えられる。

本住居跡の時期は、4段階（古墳時代後期前半）である。

第55号住居跡（第239～242図）

J・K-7・8グリッドに位置する。北側に第58号住居跡が近接している。南側は攪乱により、隅角周辺が削平されている。

規模は長軸5.92m、短軸5.68m、深さ0.42mで、主軸方位はN-22°-Wである。平面はややいびつな方形である。覆土はローム粒子や焼土・炭化物を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面



第 238 図 第 54 号住居跡出土遺物

第 69 表 第 54 号住居跡出土遺物観察表 (第 238 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[2.3]	—	BG	60	良好	灰	No.16 東海 撫み径 3.2 外面自然釉・降灰	148-3
2	須恵器	高坏	(11.6)	[4.6]	—	ABE	25	良好	灰	No.15 東海 内面底部自然釉	148-4
3	土師器	坏	11.6	4.3	—	ABE	90	普通	にぶい・橙	No.7 坏身模散坏 外面漆 外面底部黒底	148-5
4	土師器	坏	(9.8)	[3.4]	—	ABE	30	普通	にぶい・橙	B 成形は雑 坏身模散坏	148-6
5	土師器	坏	—	[2.6]	5.8	ABDG	40	普通	にぶい・橙	B 内面漆か	148-7
6	土師器	高坏	16.6	[12.9]	—	ABDEG	90	普通	にぶい・赤褐	No.3・5 中実・長脚 坏部内面炭素吸着	149-1
7	土師器	高坏	17.4	[7.2]	—	ABDEG	60	普通	にぶい・橙	No.4 中空・長脚	149-2
8	土師器	高坏	—	[2.5]	(12.0)	ABDG	25	普通	にぶい・橙	C 中空	149-3
9	土師器	高坏	—	[5.2]	—	ABE	85	普通	にぶい・黄褐	F 中空・長脚	149-4
10	土師器	鉢	19.4	10.6	6.6	ABDEG	100	普通	にぶい・赤褐	No.1 平底 内面炭素吸着	149-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
11	土師器	甕	—	[19.8]	7.6	ABDEG	40	普通	黄緑	№2・6 球胴甕	149-6
12	土師器	甕	(18.0)	[3.2]	—	ABEF	15	普通	にぶい黄緑	E 夾雑物多量 内面黒色	
13	土師器	甕	—	[2.4]	(6.0)	ABEG	10	普通	にぶい赤褐	№8 外面風化	
14	土製品	土玉	最大高2.3 径2.5～3.0 孔径0.5 重さ15.4g			AB	100	普通	黒	№21 不整形 下からの穿孔	169-2
15	鉄製品	釘	長さ8.7 頭幅0.8～0.9 身幅0.3 重さ7.7g							№20	172-1

は全体に掘り方と貼床がみられ、壁周辺を除いて硬化していた。

床面からはカマド、壁溝、ピット、粘土ブロック・焼土が確認された。カマドは長軸1.2m、短軸1.18m、深さ0.52mで、北壁中央に位置する。他の住居跡に比べて、横幅が大きい。その構造は煙出しから煙道にかけて、北壁を斜めに掘り込み、天井部や袖部は粘土で構築している。袖部の下半は地山を山なりに掘り残している。覆土は崩落土を主体とするが、底面に灰層が認められた。内部は赤く被熱している。遺物は出土しなかった。

壁溝は北西隅角と撓乱により不明な箇所を除いて全周する。幅0.15m～0.38m、深さ4cm～13cmで、覆土は住居跡と同様である。

ピットは6基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は1.18m×1.06m×0.54m、P2は0.66m×0.55m×0.68m、P3は0.97m×0.92m×0.75m、P4は0.91m×0.6m×0.39m、P5は0.42m×0.33m(確認範囲)×0.11m、P6は0.32m×0.3m×0.32mである。P1～P4は主柱穴、P5・P6は入口ピットである。P2以外は掘り込みが大きい。覆土は住居跡と同様である。P5・P6は両者を取り囲むように、土手状の高まりが床面にみられる。P5よりもP6の方が深く、P6が梯子穴、P5はそれを支持する材を立てた穴と想定される。

粘土ブロック・焼土は、カマドの正面から中央部にかけて面的に分布する。カマド構築材の崩落土と考えられる。

遺物は少なく、数点が散在する。そのうち2・

7が床面直上、8はP2内から出土した。主に古墳時代(7世紀後半)の土師器環・高環・甕・土玉が出土した。

1は須恵器蓋環の坏身である。受部が内傾しており、端部とほぼ水平となっている。胴部下半に回転ヘラケズリを施す。焼成はやや悪く、胎土に白色粒子や黒色粒子を多量に含む。産地不明。

2の土師器環は、口縁部が長く外に開き、器壁が厚い。内面と外面口唇部に黒漆の痕跡が残る。全体的に白く粉っぽい。

3は内彎口縁環である。口縁部は内湾しつつも、口唇部が直立する。器壁は薄い。内外面に黒漆の痕跡がみられる。

4は高環の脚部である。中空・長脚で、坏部内面に炭素吸着の痕が残る。内外面にヘラケズリを施し、外面下半はヨコナデを行う。

5・6は長胴甕で、口縁部は「く」の字に外反し、胴部上半は丸みを帯びる。5は口唇部を面取りし、全体的に器壁が厚い。外面に粘土が付着している。6は磨減が激しい。

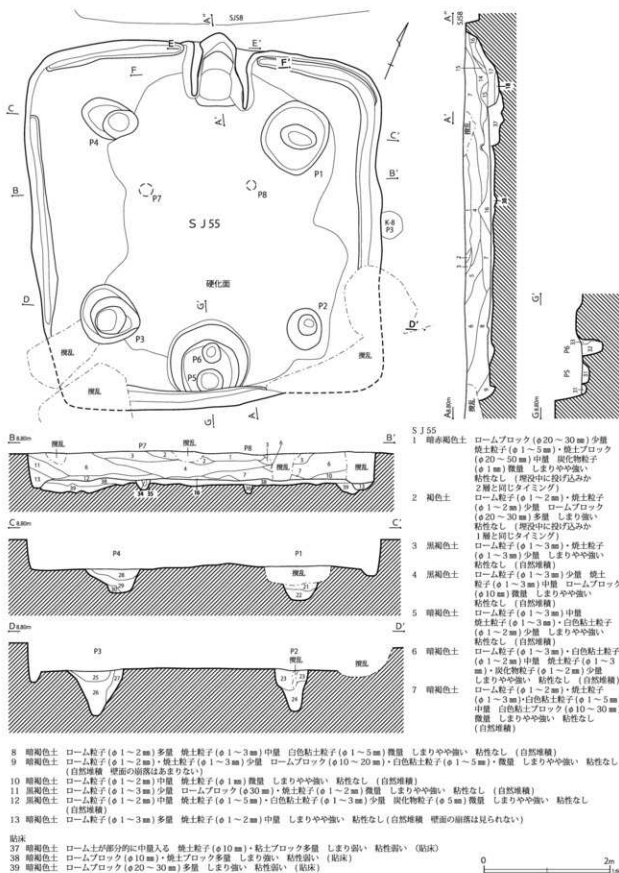
7は常総型甕の胴部下半で、胴部は丸みをもつ。器面に斜め方向のミガキを施す。胎土に大粒の白色小石が多量に混じる。

8は土玉である。径は他の出土例に比べて一回り小さい。

本住居跡の時期は、7段階(7世紀後半)である。

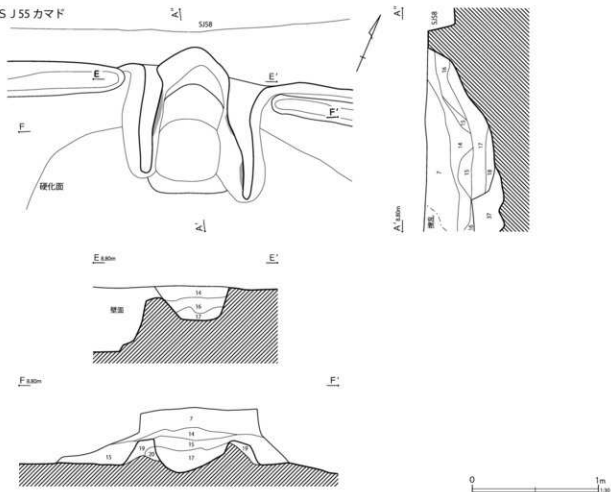
第56号住居跡(第243・244図)

K-5・6グリッドに位置する。南西部は調査区域外で、第137号土壌に壊されているため、カマド周辺のみを確認することができた。規模は



第 239 图 第 55 号住居跡 (1)

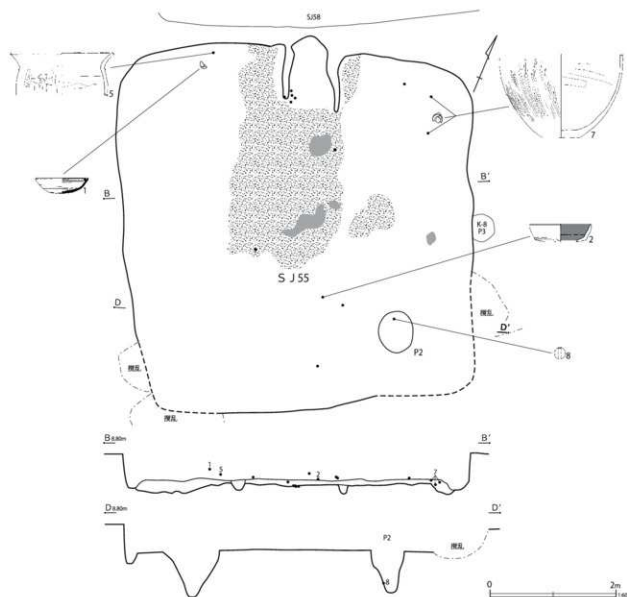
S J55 カマド



カマド

- | | | | |
|---------------------|--|------------|--|
| 14 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 微量 焼土粒子 (φ 1~2mm) 少量 白色粘土粒子 (φ 1~10mm) 中量
しまりやや強い 粘性なし
(自然堆積 カマド由来の粘土を含むようになる
カマド崩落土) | 24 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~3mm)・ロームブロック (φ 5~10mm) 多量 しまりやや強い 粘性弱い
(板柱後に崩落 堆積した土) |
| 15 明黄褐色土 | 明黄褐色粘土ブロック密 焼土ブロック中量
しまり強い 粘性強い (カマド構築土の崩落土
粘土主体) | 25 黒褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm)・ロームブロック (φ 5mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い (板柱後の崩落土) |
| 16 明黄褐色土 | 明黄褐色粘土ブロック密 しまり強い 粘性強い
(カマド構築土の崩落土) | 26 褐色土 | ローム粒子 (φ 1~3mm)・ロームブロック (φ 20~30mm) 多量 しまりやや強い 粘性弱い
(板柱時に崩落 堆積した土) |
| 17 赤褐色土+
にぶい赤褐色土 | 焼土粒子 (φ 1~5mm)・焼土ブロック (φ 30~40mm) 中量 炭化物粒子 (φ 1~2mm) 微量 焼土化した
粘土粒子 (φ 10~20mm) 多量 しまりやや強い
粘性なし
(カマド構築土の崩落土 焼土化した粘土主体 流入土) | 27 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~3mm)・ロームブロック (φ 10mm) 中量 しまりやや強い 粘性弱い
(板柱時に崩落 堆積した土) |
| 18 黒褐色土 | 灰が密に堆積 しまり強い 粘性なし (灰層) | 28 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm)・ロームブロック (φ 10~20mm) 中量 焼土粒子 (φ 1~2mm) 少量 しまり
やや強い 粘性弱い (板柱後に崩落 堆積した土) |
| 19 黄褐色土 | 粘土層 焼土ブロック (φ 30~40mm) 少量
しまり強い 粘性強い | 29 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 中量 ロームブロック
(φ 10~20mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
(板柱後の堆積土) |
| 20 赤褐色土 | 焼土層 しまり強い 粘性弱い | 30 にぶい黄褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm)・ロームブロック (φ 10~20mm) 中量 しまり強い 粘性弱い (柱の裏込土) |
| ビット1~8
21 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 中量 ロームブロック
(φ 10mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
(板柱後の堆積土) | 31 黒褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 微量 しまりやや強い
粘性弱い (壁溝 自然堆積 同時に埋没) |
| 22 暗褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 中量 ロームブロック
(φ 30~50mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
(板柱後に崩落 堆積した土) | 32 黒褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm)・ロームブロック (φ 10mm) 微量 しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積) |
| 23 黒褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 中量 ロームブロック
(φ 5~10mm) 少量 焼土粒子 (φ 1~3mm) 微量
しまりやや強い 粘性弱い (板柱後の堆積土) | 33 黒褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 中量 しまり強い
粘性弱い (壁崩落土) |
| | | 34 褐色土 | ローム粒子 (φ 1~2mm) 少量 しまり強い
粘性弱い (住居埋没前に埋り込まれたビット) |
| | | 35 褐色土 | ローム粒子・焼土粒子 (φ 1~2mm) 少量 しまり強い
粘性弱い (住居埋没前に埋り込まれたビット) |
| | | 36 暗褐色土 | ローム粒子・焼土粒子 (φ 5mm) 多量 ロームブロック
(φ 20~30mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
(住居より古いビット) |

第240図 第55号住居跡(2)



第241図 第55号住居跡遺物出土状況

確認範囲で、長軸 3.06m、短軸 2.08m、深さ 0.24m、主軸方位はN-3°-Eである。耕作等の影響で全体が削平され、掘り込みは浅かった。平面は方形であると思われる。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面の南側に、掘り方と貼床がみつかった。

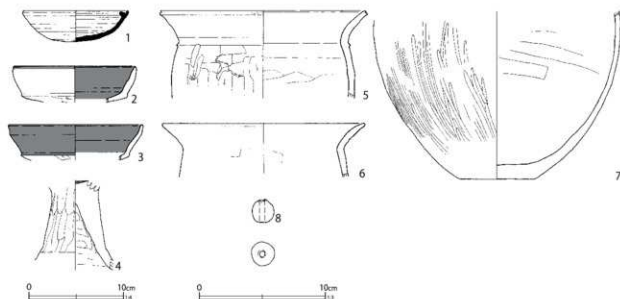
床面からはカマドのみが確認された。カマドは長軸 0.88m（確認範囲）、短軸 0.7m、深さ 0.25mで、北壁中央に位置すると推定される。その構造は、煙道から煙出しにかけて、北壁を掘り込み、天井部や袖部は粘土で構築している。袖部は燃焼

部側が被熱している。内部から長胴甕（3）が横位、小型甕（2）が正位の状態出土した。これらの土器の内部には崩落土が流入しており、土器の下には灰層（第9層）が堆積していた。カマドの左袖の脇には、壺（1）が逆位で出土した。

遺物は上記の3点のみである。

1は壺である。器形は全体的に球形で、口縁部はヨコナデでわずかに内傾させ、胴部と区画する。やや口縁部がゆがむ。器面全体をミガキで平滑にした上で、内面には炭素吸着で黒色処理している。

2は小型甕である。口径に対して最大径が大き



第242図 第55号住居跡出土遺物

第70表 第55号住居跡出土遺物観察表(第242図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	10.9	3.3	—	ABEG	50	普通	灰	No.1 産地不明 胎土は白色粒子や黒色粒子多量	149-7
2	土師器	坏	(12.8)	[3.8]	—	ABDEG	20	良好	灰白	No.8 内外面漆	163-2
3	土師器	坏	(14.0)	[5.7]	—	ABDEG	20	普通	にぶい黄橙	B 内唇口縁坏 内外面漆	163-2
4	土師器	高坏	—	[9.5]	—	ABEG	80	普通	にぶい黄橙	C 坏部内面炭素吸着 中空・長脚	150-1
5	土師器	甕	(21.6)	[9.2]	—	BEG	20	普通	赤	No.2・D 長胴甕 口唇部凹む	150-2
6	土師器	甕	(21.4)	[5.2]	—	BDEG	10	普通	にぶい黄橙	カマド 長胴甕 磨滅	150-3
7	土師器	甕	—	[17.8]	8.0	BCKK	45	普通	黒褐	No.5・6・12・B 常総型甕 胎土は大粒の白色小石多量	150-4
8	土製品	土玉	最大高1.8 径1.7~1.8 孔径0.4~0.5 重さ6.1g			BE	100	普通	にぶい黄橙	No.11	169-2

く、下膨れの器形である。口縁はゆがむ。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

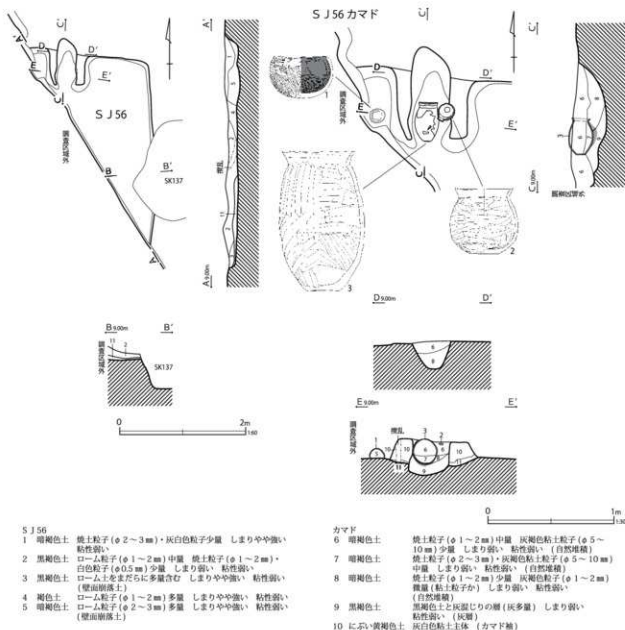
3は長胴甕である。口縁部は短く、胴部は中央付近に最大径が位置し、球胴形である。器壁が厚く、全体的に輪積み痕が残し、器面は凹凸が激しい。また、口縁部と底部の軸が揃わず、全体的にゆがんでいる。

本住居跡の時期は、5段階(古墳時代後期後半)である。

第57号住居跡(第245~248図)

J-6・7グリッド、K-6・7グリッドに位置する。第4号建物跡に壊されている。規模は、長軸5.83m、短軸5.81m、深さ0.33mで、主軸方位はN-30°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には全面に掘り方と貼床があり、壁周辺を除いて硬化していた。

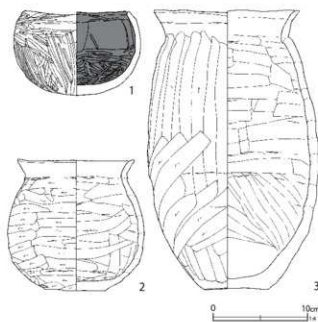
床面からは、カマド、貯蔵穴、壁溝、ピットが確認された。カマドは長軸1.14m、短軸0.92m、深さ0.43mで、北西壁中央に位置する。その構



第243図 第56号住居跡

第71表 第56号住居跡出土遺物観察表 (第244図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	埴	10.8	8.8	—	ABDEG	100	普通	暗赤褐	No.3 内面炭素吸着	150-5
2	土師器	甕	(11.6)	13.9	6.4	ABDEG	60	普通	にぶい赤褐	No.2 小型甕	150-6
3	土師器	甕	14.7	29.5	6.7	ABEI	100	普通	にぶい褐	No.1 長胴甕	150-7



第244図 第56号住居跡出土遺物

造は、北西壁を掘り込み、煙出し付近を造り、天井部や袖部は粘土で構築している。覆土は崩落土と焼土層、灰層が堆積しており、内部は赤く焼け締まっていた。遺物は出土しなかった。

貯蔵穴は長軸0.92m、短軸0.61m、深さ0.29mで、北隅角に位置する。覆土はロームブロックや焼土・炭化物粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。内部から長胴甕の破片(6)が出土した。

壁溝は全周する。幅0.13m～0.33m、深さ4cm～15cmで、覆土は住居跡と同様である。

ピットは5基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.7m×0.7m×0.68m、P2は0.79m×0.7m×0.75m、P3は0.63m×0.62m×0.44m、P4は0.77m×0.68m×0.48m、P5は0.44m×0.34m×0.24mである。P1～P4は主柱穴、P5は入口ピットである。P1・P2に対して、P3・P4はやや浅い。覆土はロームブロックを含む黒・暗褐色土を主体とする自然堆積である。P5は柱穴に比べて小規模で、周辺に土手状の高まりがある。覆土は他のピットと同様である。

遺物は少ない。カマド周辺と貯蔵穴に数点出土した。そのうち、7は床面直上出土、6は貯蔵穴と覆土出土破片が接合した。主に古墳時代(7世紀後半)の土師器・甕・勾玉が出土した。

1～5は坏である。1は坏身模倣坏、2～5は北武蔵型坏である。1は身が浅く、口縁部はわずかに内傾する。2は口縁部が短く、わずかに内傾する。3は丸みを帯びた器形で、口唇部も上に立ち上がる程度で、内面に放射状のミガキを施す。4は口縁部を欠失しているが、外に開き、身は深い。内面に放射状のミガキを施す。5は全体的に磨滅が激しく、調整は不明。

6の長胴甕は、薄手で、口縁部が「く」の字に外反し、胴部上半に最大径が位置する。口唇部は面取りしている。

7は滑石製の勾玉である。形状は「C」字型からやや間延びし、尾部が下がる。長軸にややゆがみがあり、短軸は厚さが大きく違う。尾部は一部欠損しているが、未加工面が残る。穿孔は両側から行っている。

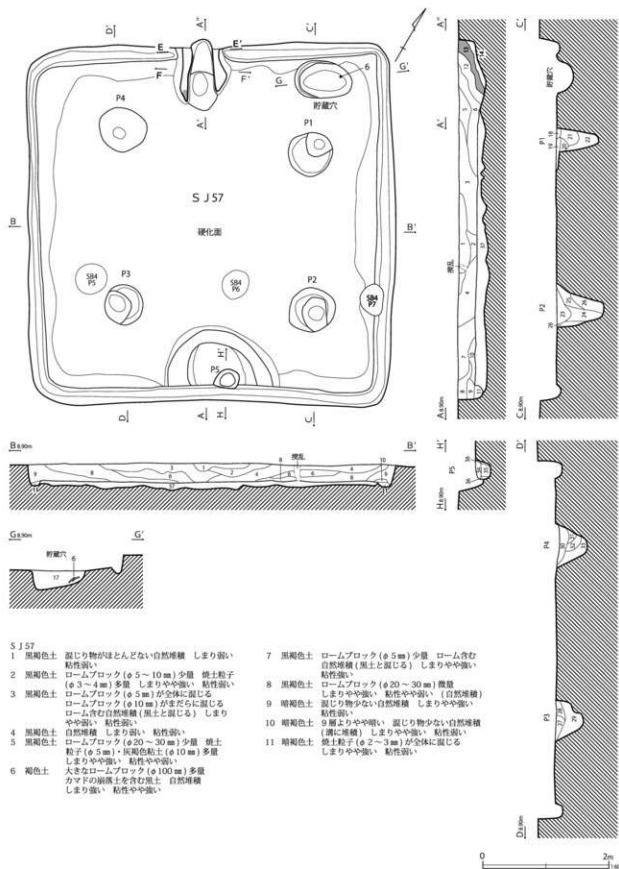
8は棒状鉄製品である。

本住居跡の時期は、6から7段階(7世紀後半)と考えられる。

第58号住居跡(第249～251図)

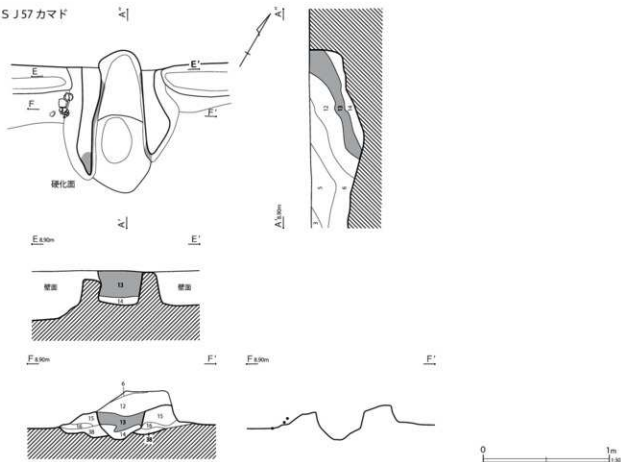
J-7・8グリッドに位置する。すぐ南側に第55号住居跡が造られている。規模は長軸6.17m、短軸6.02m、深さ0.25mで、主軸方位はN-25°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒褐色土等の自然堆積である。床面は全面に掘り方と貼床がみられ、壁面を除いて硬化していた。

床面からはカマド、壁溝、ピット、粘土ブロックが確認された。カマドは長軸1.32m、短軸1.07m、深さ0.35mで、北西壁中央に位置する。その構造は、煙道から煙出しにかけて北西壁を掘り込み、天井部や袖部は粘土で構築している。覆土は粘土や焼土粒子を含む黒褐色土等の崩落土が主体を占



第 245 图 第 57 号住居跡 (1)

SJ57カマド



カマド

- 12 明黄褐色土 カマド崩壊土と暗褐色粘土少量の混合土（粘土層+焼土+炭化物粒子）自然堆積（しまりや強い、粘性弱い）
 13 赤褐色土 焼土層（カマド天井崩壊土+燃焼面 分解できない）しまりや強い、粘性強い
 14 灰黄褐色土 灰主体 焼土粒子（ $\phi 2\text{mm}$ ）微量 粘土粒子（ $\phi 5\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性弱い）（灰層）
 15 明黄褐色土 灰白色粘土主体（しまりや強い、粘性あり（カマド軸））
 16 暗褐色土 ローム粒子（ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ ）中量 ロームブロック（ $\phi 5\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性なし（カマド軸））

貯蔵穴

- 17 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 30\sim 40\text{mm}$ ）中量 焼土粒子（ $\phi 5\text{mm}$ ）炭化物粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性強い）
 ビット1～5
 18 黒褐色土 ローム土をまだらに少量含む 焼土粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性強い）
 19 黒褐色土 ロームブロック（ $\phi 30\sim 40\text{mm}$ ）中量 焼土粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性強い）
 20 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 20\sim 30\text{mm}$ ）多量 焼土粒子（ $\phi 3\sim 4\text{mm}$ ）微量（しまり強い、粘性やや強い）
 21 褐色土 ロームブロック（ $\phi 10\text{mm}$ ）中量 焼土粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）微量（しまり強い、粘性やや強い）
 22 褐色土 ロームブロック（ $\phi 10\text{mm}$ ）多量（しまり強い、粘性やや強い）
 23 暗褐色土 ローム土をまだらに多量（しまり強い、粘性やや強い）
 24 暗褐色土 ロームブロック多量（しまり強い、粘性やや強い）

- 25 褐色土 ロームブロック中量（しまり強い、粘性やや強い）
 26 褐色土 ロームブロック多量（しまり強い、粘性やや強い）
 27 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 20\sim 30\text{mm}$ ）多量（しまりや強い、粘性やや強い）
 28 褐色土 ローム土多量（しまりや強い、粘性やや強い）
 29 暗褐色土 ローム粒子（ $\phi 5\text{mm}$ ）・ロームブロック（ $\phi 30\sim 40\text{mm}$ ）多量（しまり強い、粘性やや強い）
 30 黒褐色土 ローム土をまだらに含む 焼土粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）中量（しまりや強い、粘性やや強い）
 31 暗褐色土 焼土粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性やや強い）
 32 黒褐色土 30層と33層の混合土 ローム粒子（ $\phi 5\text{mm}$ ）中量 焼土粒子（ $\phi 2\sim 3\text{mm}$ ）少量（しまり強い、粘性弱い）（振替後の灰土）
 33 暗褐色土 ローム粒子（ $\phi 5\text{mm}$ ）多量（しまりや強い、粘性やや強い）
 34 黒褐色土 ロームブロック（ $\phi 10\sim 20\text{mm}$ ）中量 焼土粒子（ $\phi 0.5\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性やや強い）
 35 黒褐色土 ロームブロック（ $\phi 10\sim 20\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、粘性やや強い）
 36 暗褐色土 ロームブロック（ $\phi 30\sim 40\text{mm}$ ）少量（しまりや強い、34層・35層より強い）粘性やや強い

結核

- 37 ぶい黄褐色土 ローム粒子（ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ ）多量 ロームブロック（ $\phi 30\sim 50\text{mm}$ ）中量（しまり強い、粘性なし（結核））
 38 ぶい黄褐色土 ローム粒子（ $\phi 1\sim 3\text{mm}$ ）多量 ロームブロック（ $\phi 10\sim 30\text{mm}$ ）中量（しまり強い、粘性なし（結核））

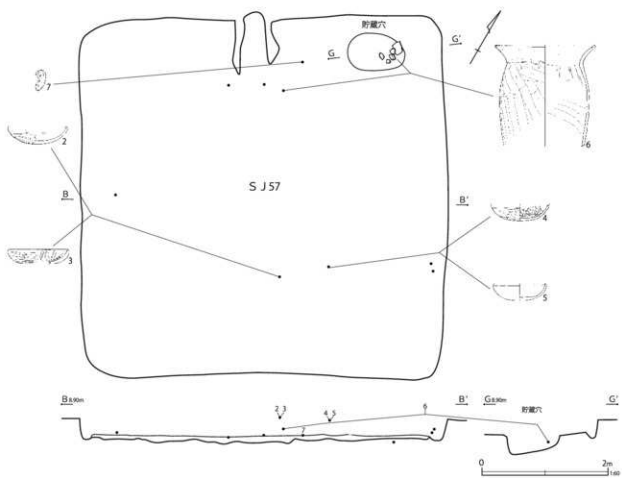
第246図 第57号住居跡（2）

める。燃焼部底面に灰層が堆積していた。内部は焼け締まっており、遺物は出土しなかった。

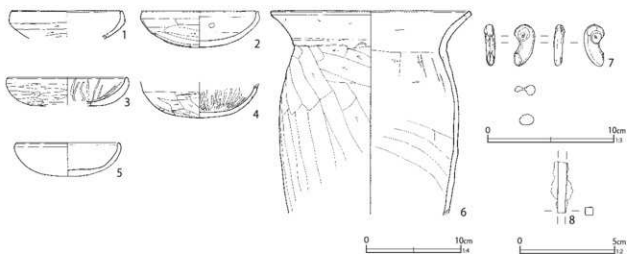
壁溝は西壁と南壁の一部にめぐる。幅0.16m

～0.27m、深さ4cm～7cmで、覆土は住居跡と同様である。

ビットは6基検出された。規模（長径×短径×



第 247 図 第 57 号住居遺物出土状況



第 248 図 第 57 号住居跡出土遺物

第72表 第57号住居跡出土遺物観察表(第248図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(11.6)	[2.9]	—	BDEG	30	普通	にぶい橙	B 坏身模倣坏	151-1
2	土師器	坏	(12.4)	3.8	—	BDEGK	40	普通	淡橙	No.6 北武蔵型坏 胎土はチャート等の小礫	151-2
3	土師器	坏	(12.5)	3.0	—	ABDEG	25	普通	にぶい褐	No.6 北武蔵型坏 口唇部磨滅(再生か)	151-3
4	土師器	坏	—	[3.7]	—	ABEG	40	普通	橙	No.7 北武蔵型坏	151-4
5	土師器	坏	(10.8)	3.6	—	ABDEG	50	普通	にぶい橙	No.7 北武蔵型坏 内外面風化	151-5
6	土師器	甕	21.2	[21.5]	—	ABDEG	65	普通	にぶい褐	No.1・2・A 長胴甕	151-6
7	石製品	勾玉	長さ3.2	幅1.6	厚さ0.8	重さ5.0g				No.1 滑石	168-3
8	鉄製品	棒状品	長さ2.7	幅0.4	厚さ0.4	重さ2.2g				B	172-1

深さ)は、P1は0.51m×0.43m×0.26m、P2は0.67m×0.48m×0.44m、P3は0.61m×0.42m×0.43m、P4は0.48m×0.37m×0.39m、P5は0.54m×0.5m×0.62m、P6は0.37m×0.35m×0.2mである。P2～P5は主柱穴、P6は入口ピットである。P2～P5のうち、P5のみ深い。P6は柱穴に比べて小さく、土手状の高まりは認められない。

粘土ブロックは、カマドとその周辺に堆積していた。カマドの崩落土と考えられる。

遺物は非常に少なく、小片が主体であった。床面直上から出土した遺物は少ない。主に古墳時代(7世紀後半)の土師器坏・甕が出土した。

1は須恵器坏蓋である。かえりは厚く、わずかに受部より低い。湖西窯産か。

2の土師器坏は、口縁部が直線的に開く。全体的に白く粉っぽい。内面と外面口唇部に黒漆の痕跡がある。3は大型の半球形坏である。口縁部は厚く、直立する。

4は長胴甕である。武蔵型甕で、器壁は薄く、口縁部は「く」の字形に屈曲する。

5は棒状鉄製品である。2本の棒状品が合わさり、両端部が折り曲がっている。断面は方形を呈し、鉄鍔の棘状部に近い突起がみられることから、鉄鍔を含む可能性がある。

本住居跡の時期は、7段階(7世紀後半)である。

第59号住居跡(第252～254図)

J-6・7グリッドに位置する。北西隅角付近

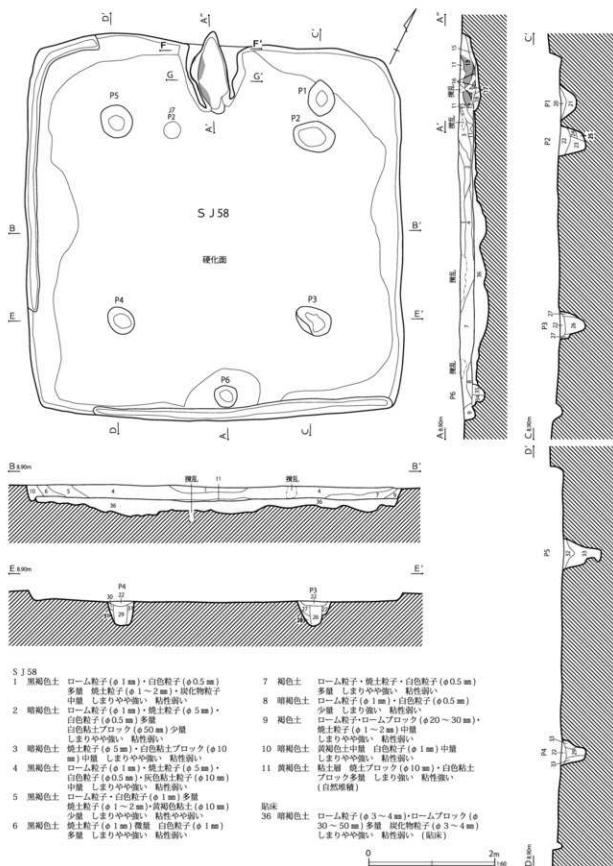
は攪乱により、上部が削平されている。規模は、長軸6.09m、短軸5m、深さ0.28m、主軸方位はN-8°-1Wである。平面は東西方向に長い長方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。第9層上には、焼土ブロックと炭化材(第6層)が検出され、焼失家屋と考えられる。炭化材の一部は樹種同定と放射性炭素年代測定を実施した(第VI章第2節参照)。その結果、樹種はコナラ属クスギ節で、No.23は4世紀中頃～6世紀前半の年代とされる。なお、床面下全面に、掘り方と貼床が認められた。

床面からは炉跡、貯蔵穴、壁溝、ピットが確認された。炉跡は長軸0.39m、短軸0.36m、深さ9cmで、中央からやや北西部に位置する。平面は円形を呈し、覆土は焼土ブロックが主体であった。遺物は出土しなかった。

貯蔵穴は長軸0.87m、短軸0.77m、深さ0.23mで、南西隅角に位置する。平面は楕円形である。覆土は自然堆積である。

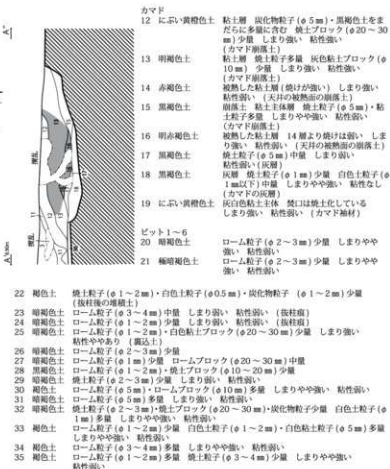
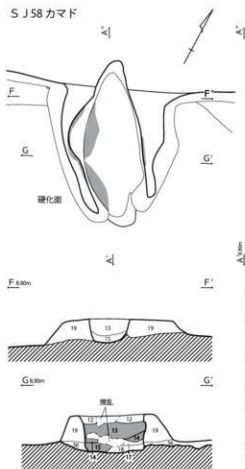
ピットは1基のみ検出された。P1は長径0.37m、短径0.3m、深さ0.31mと小規模で、貯蔵穴付近に位置する。性格は不明である。

遺物は比較的多く出土した。壁周部からの出土例が多く、特に南西隅角付近には、完形・半完形の個体(1・2・5・6)が集中する。1・2・5は正位、6は逆位で出土した。掲載遺物のうち、3・4・7を除いて床面直上から出土した。主に古墳時代中期の土師器甕・高坏・土玉が出土した。



第249図 第58号住居跡(1)

S J58 カマド



第250図 第58号住居跡(2)

1～3は甕である。1は球胴甕で、口縁部は「く」の字形に開く。全体的に薄い。外面はヘラケズリの後にミガキを施し、赤褐色である。内面はヘラナデで調整する。底部は周辺がやや突出し、輪台成形状の輪積み痕も認められる。口縁部と底部の軸は揃わず、ややゆがんでいる。2は1と同様の器形・調整だが、頸部に粘土帯を貼付すること、外面のミガキをより密に施す点が異なる。3は1・2と同様の甕だが、口縁部がゆがむ。

これらの甕は、最低3個体存在したと考えられる。これらは器形や調整の共通点が多く、出土面も床面で共通し、一括性が高い資料といえる。

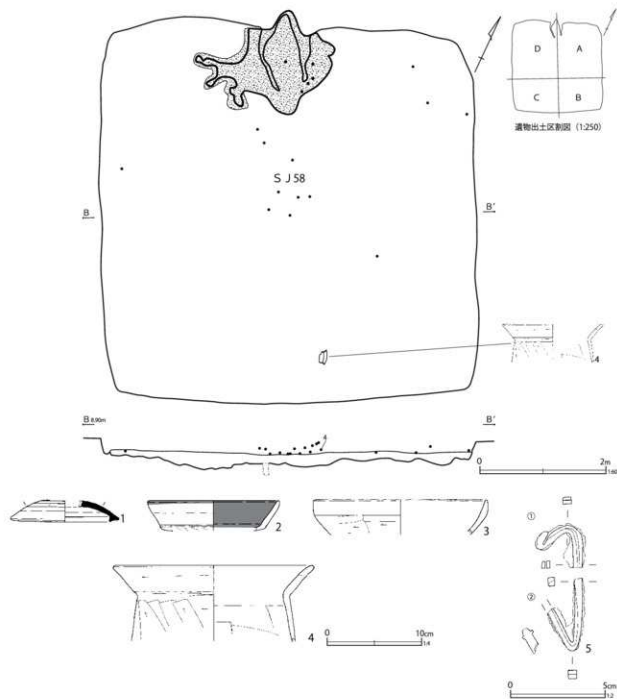
4は底部が突出し、胴部の立ち上がりはより球形を呈し、内面にミガキを施す点が、1・2と異なる。壺の底部か。

5は小型甕である。口縁部は欠失している。胴部は最大径に対して器高が低く、やや扁平な形になる。底部はわずかに上げ底である。外面は密なミガキ、内面はヘラナデを施す。

6は高坏である。坏部は箱形で、屈曲部から口縁部が大きく開く。口縁部はゆがむ。脚部は中空で、柱状にやや丸みを帯びつつ、裾部は「ハ」の字形に開く。外面、坏部はハケ調整後、ミガキを放射状に施すが、内面は口唇部のハケ調整とミガキ以外は剥落しており不明である。脚部の柱状部は外面にミガキ、内面にヘラケズリを施し、裾部はヨコナデで仕上げる。

7～9は土玉である。法量・胎土・焼成・色調はいずれも共通する。

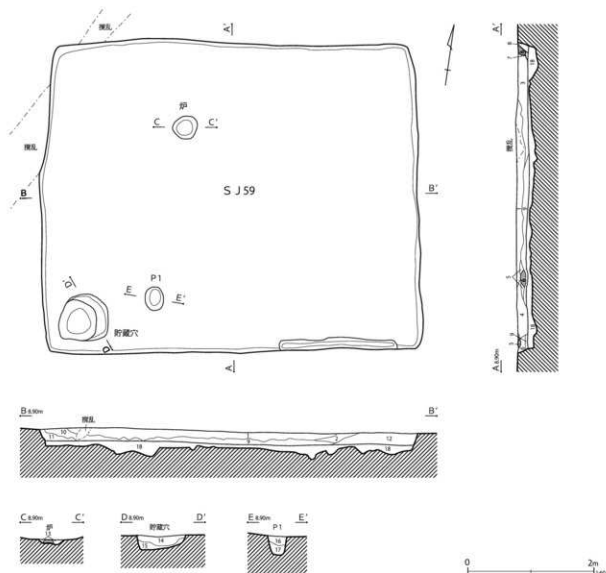
本住居跡の時期は、2段階（古墳時代中期前半）



第251図 第58号住居跡遺物出土状況・出土遺物

第73表 第58号住居跡出土遺物観察表 (第251図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版	
1	須恵器	蓋	(11.4)	[2.2]	—	BOGK	15	良好	灰	B	湖西か、混入か、胎土は白色小石	151-7	
2	土師器	坏	(13.8)	[3.2]	—	BDG	10	普通	褐灰	A	内外面漆		
3	土師器	坏	(18.0)	[3.7]	—	BEG	15	普通	黒褐		半球形坏 口径大きい		
4	土師器	甕	(20.8)	[8.1]	—	ABDGJ	25	普通	橙	№.18	長胴甕 角閃石多量	151-8	
5	鉄製品	棒状品	①長さ [4.2]		幅 0.4～0.5	厚さ 0.5	重さ 3.5g	B 鉄鏝か					172-1
			②長さ [5.7]		幅 0.4～0.5	厚さ 0.5	重さ 8.4g						



S J 59

- 1 黒褐色土 ローム土(φ50~70mm)混じる ローム粒子(φ1~2mm) 中量 白色粒子(φ0.5mm)多量 しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 2 暗褐色土 ローム土中量 ローム粒子(φ2~3mm)多量 しまり強い 粘性強い (自然堆積)
- 3 赤褐色土 焼土ブロックと暗褐色土の混合土 しまり強い 粘性弱い (自然堆積)
- 4 暗褐色土 ローム粒子(φ1~2mm)・炭化物粒子中量 焼土粒子(φ2~3mm)少量 しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 5 褐色土 ローム土と焼土の混合土 焼土ブロック(φ30~40mm)中量 しまり強い 粘性弱い (自然堆積)
- 6 褐色土 暗褐色土上に焼土ブロック・炭化物が堆積する層 しまりやや強い 粘性強い (暗褐色土堆積後、焼けた住居の構築材が焼土と共に堆積)
- 7 暗褐色土 ローム粒子(φ1~2mm)少量 焼土粒子(φ1~2mm)中量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)
- 8 暗褐色土 ローム粒子(φ1~3mm)中量 ロームブロック(φ5mm)少量 焼土粒子(φ1~3mm)多量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)
- 9 暗褐色土 ローム土中量 焼土粒子(φ1~3mm)中量 ロームブロック(φ20~30mm)多量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)
- 10 暗褐色土 ローム粒子(φ2~3mm)・白色粒子(φ0.5mm)多量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)
- 11 暗褐色土 ローム粒子(φ1~2mm)・白色粒子(φ0.5mm)多量 焼土粒子(φ1mm)少量 焼土ブロック(φ10mm)中量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)

- 12 暗褐色土 ローム粒子(φ2~3mm)・白色粒子(φ1mm)中量 ロームブロック(φ20~30mm)少量 しまりやや強い 粘性強い (自然堆積)

P1

- 13 褐色土 焼土ブロック多量 炭化物粒子少量 しまりやや強い 粘性強い

貯蔵穴

- 14 黒褐色土 ローム土中量 ローム粒子(φ5mm)・炭化物粒子少量 しまり強い 粘性強い

- 15 暗褐色土 ローム土多量 焼土粒子(φ1~2mm)微量 炭化物粒子少量 しまり強い 粘性強い

ピット1

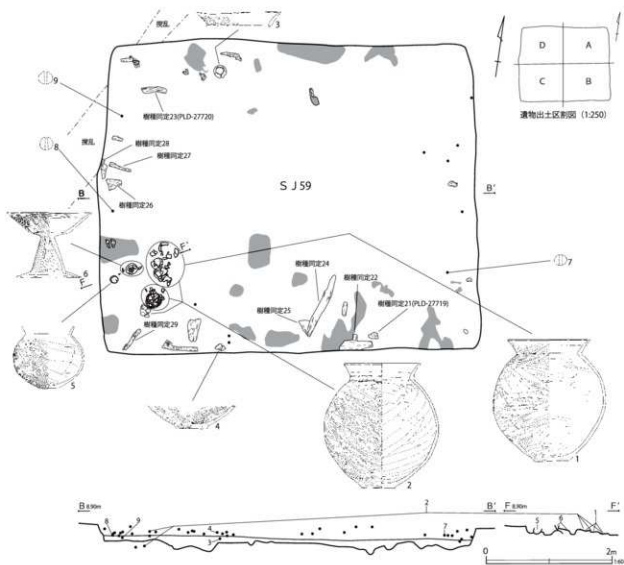
- 16 暗褐色土 焼土粒子(φ1~2mm)・炭化物粒子少量 しまりやや強い 粘性強い

- 17 褐色土 ローム粒子(φ2~3mm)少量 しまりやや強い 粘性強い

貼床

- 18 赤い黄褐色土 ローム粒子(φ1~3mm)・ロームブロック(φ10~30mm)中量 焼土粒子(φ1~3mm)少量 しまり強い 粘性なし (貼床)

第252図 第59号住居跡



第253図 第59号住居跡遺物出土状況

である。

第61号住居跡（第255・256図）

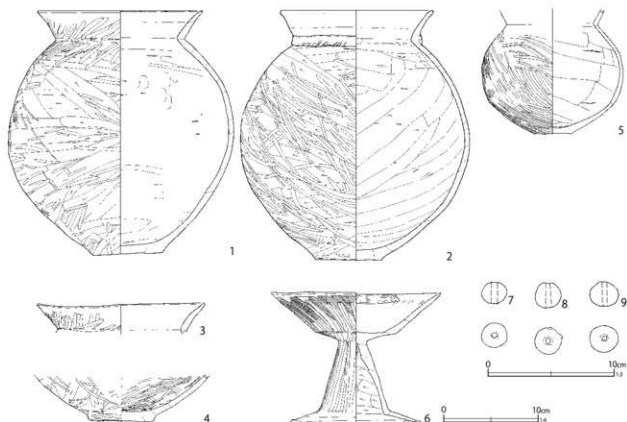
H・I-7グリッドに位置する。東側は調査区域外のため、確認できなかった。攪乱と第4号・5号溝跡により、部分的に削平されている。

規模は、長軸5.86m、短軸5.11m、深さ0.25m、主軸方位はN-18°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子等を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面は全体に掘り方と貼床が認められ、壁際を除いて硬化していた。

床面からはカマド、壁溝、ビット、粘土ブロッ

クが確認された。カマドは長軸1.28m、短軸1.13m、深さ0.27mで、北壁中央に位置すると推定される。遺存状況は良くない。その構造は、煙道から煙出しにかけて、北壁を掘り込み、天井部や袖部は粘土を用いて構築している。覆土は焼土や粘土ブロックを含む黒褐色土等の崩落土である。燃烧部底面に灰層が堆積していた。内部からは土師器小片が出土した。

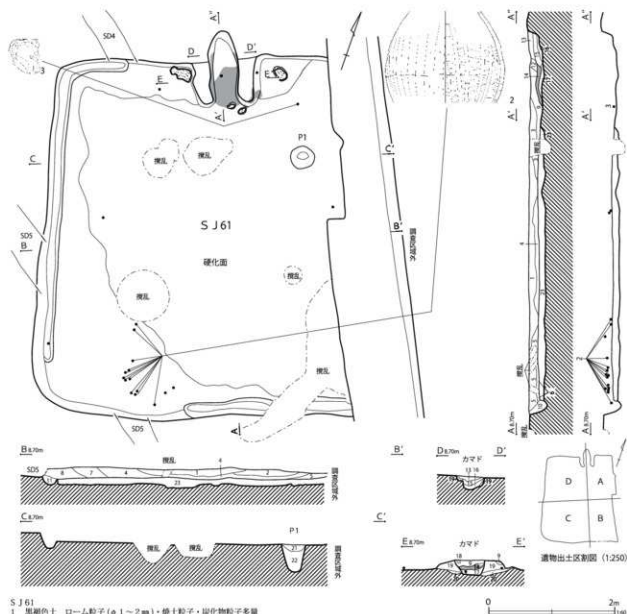
壁溝はカマド周辺と南西隅角を除いて、壁際にめぐる。幅0.18m～0.34m、深さ6cm～12cmで、覆土は住居跡と同様である。



第254図 第59号住居跡出土遺物

第74表 第59号住居跡出土遺物観察表(第254図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	16.9	25.6	7.5	BEG	90	普通	赤褐	No.16・C 胴部最大径23.9(左右で高さが違う) 全体的に赤い 口唇部丸い(面取なし) 2とはほぼ同じ形・調整	152-1
2	土師器	甕	15.9	26.3	7.0	BEG	95	普通	赤褐	No.15・16・43 最大径24.2 赤色 1とはほぼ同じ形・調整 外面頸部粘土帯貼り付け	152-4
3	土師器	甕	17.8	[3.3]	—	ABEG	80	普通	明赤褐	No.14	152-2
4	土師器	甕	—	[5.0]	6.9	BEG	30	普通	赤褐	No.7	152-3
5	土師器	甕	—	[13.1]	3.9	BDEG	90	普通	明赤褐	No.17・C 小型甕	152-5
6	土師器	高坏	17.6	13.9	13.6	BDE	95	普通	橙	No.18 中空	152-6
7	土製品	土玉	最大高1.7			ABEG	100	普通	にぶい赤褐	No.5	169-2
			径2.1 孔径0.4 重さ6.4g								
8	土製品	土玉	最大高2.0			ABEG	95	普通	にぶい褐	No.12	169-2
			径2.1 孔径0.3~0.5 重さ8.0g								
9	土製品	土玉	最大高1.9			ABEG	100	普通	にぶい褐	No.13	169-2
			径2.2 孔径0.4 重さ8.7g								



SJ61

- 1 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子・炭化物粒子多量
しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 2 黒褐色土 ローム粒子($\phi 0.5$ mm)・焼土粒子・ローム土をブロック状に
多量含む しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 3 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)・焼土粒子・白色粒子(1mm)多量
炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 4 暗褐色土 ローム土・焼土粒子($\phi 1$ mm)・白色土粒子多量
しまりやや強い 粘性強い
- 5 暗褐色土 焼土粒子($\phi 1$ mm)・粘土ブロック($\phi 5 \sim 10$ mm)多量
しまりやや強い 粘性強い
- 6 暗褐色土 ロームブロック($\phi 30 \sim 40$ mm)多量 しまり強い 粘性弱い
- 7 暗褐色土 ローム粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・焼土粒子($\phi 1$ mm)多量
しまりやや強い 粘性弱い
- 8 暗褐色土 焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)・ロームブロック・白色粘土($\phi 10$ mm)
多量 しまりやや強い 粘性強い
- 9 黒褐色土 ローム粒子・炭褐色粒子($\phi 1$ mm)・焼土ブロック
($\phi 10 \sim 20$ mm)・白色粘土ブロック多量 しまり強い 粘性強い
- 10 暗褐色土 焼土粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒子多量 しまりやや強い
粘性強い
- 11 黒褐色土 白色粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)多量 粘土ブロック($\phi 30 \sim 40$ mm)
中層 しまり強い 粘性強い

ビット1

- 21 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 ロームブロック($\phi 30$ mm)・
焼土粒子少量 しまり強い 粘性強い
- 22 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量
しまり強い 粘性強い

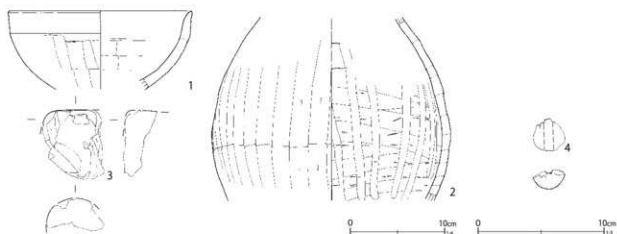
カマド

- 12 にぶい赤褐色土 焼土粒子($\phi 5 \sim 10$ mm)・粘土ブロック・炭化物粒子
($\phi 5$ mm)多量 しまりやや強い 粘性弱い
- 13 褐色土 灰土・焼土粒子($\phi 10$ mm)・白色粘土粒子($\phi 0.5$ mm)多量
しまり強い 粘性強い
- 14 にぶい赤褐色土 粘土ブロック($\phi 20 \sim 30$ mm)・焼土ブロック($\phi 10$ mm)
多量 (カマド崩落土)
- 15 褐色土 焼土粒子・白色粒子・炭化物粒子($\phi 5$ mm)多量
しまりやや強い 粘性強い (カマド煙道部の流入土)
- 16 褐色土 焼土粒子($\phi 5$ mm)・粘土ブロック($\phi 5 \sim 10$ mm)多量
しまり強い 粘性強い (カマド煙道部の流入土)
- 17 灰黄褐色土 灰層 焼土ブロック($\phi 20 \sim 30$ mm)・炭化物粒子($\phi 2$
 ~ 3 mm)多量 しまり弱い 粘性強い
- 18 にぶい褐色土 褐色粒子($\phi 0.5$ mm)多量 しまり強い 粘性弱い
- 19 にぶい褐色土 粘土層 褐色粒子($\phi 0.5$ mm)多量 しまり弱い
粘性弱い (カマド煙道部) 18層よりやや明るい
- 20 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)多量 ロームブロック($\phi 30$ mm)・
ブロックバンド由来のブロック($\phi 30 \sim 50$ mm)中層
しまり強い 粘性強い (粘床)

見床

- 23 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)多量 ロームブロック($\phi 30$ mm)・
ブラックバンド由来のブロック($\phi 30 \sim 50$ mm)中層
しまり強い 粘性強い (粘床)

第255図 第61号住居跡



第256図 第61号住居跡出土遺物

第75表 第61号住居跡出土遺物観察表(第256図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	鉢	(19.2)	[8.3]	—	BFG	15	普通	褐	B	
2	土師器	壺	—	[19.4]	—	ABEG	40	普通	にぶい橙	No. 4・5・6・7・8・9・10・11・14・20・21・22・A	153-1
3	土製品	支脚	長さ [7.0] 幅 [6.4] 厚さ [3.4] 重さ 111.4g			ABDG	20	普通	明褐	No. 16 中実	153-2
4	土製品	土玉	最大高 2.5 径 (2.6) 孔径 (0.6) 重さ 6.0g			ABE	40	普通	灰褐	C	169-2

ビットは1基検出された。P1は長径0.38m、短径0.37m、深さ0.44mで、床面北東に位置し、柱穴と考えられる。しかし、これに対応するその他の柱穴は、攪乱を掘り下げて確認したが、検出できなかった。

粘土ブロックはカマド周辺に散在しており、カマド構築材の崩落土である。

遺物は少なく、カマド周辺と南西部に集中する。そのうち、3のみ床面直上から出土した。主に古墳時代後期の土師器・鉢・カマド支脚・土玉が出土した。

1は鉢である。器壁は厚く、口径が大きい。

2は壺と思われる。胴部上半は肩が張らず、最大径は下半に位置する。

3はカマドの土製支脚である。

4は土玉である。

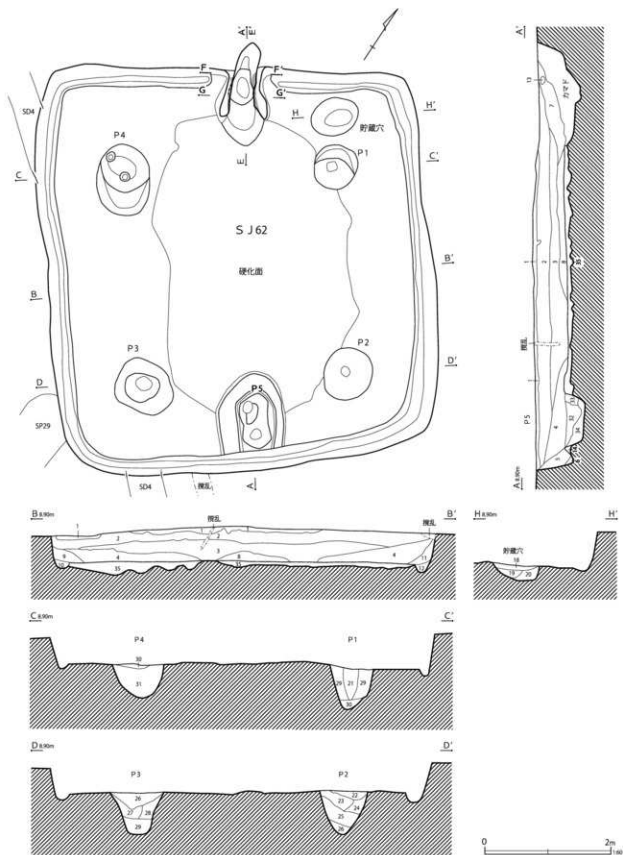
本住居跡の時期は、4段階（古墳時代後期前半）と推定される。

第62号住居跡（第257～262図）

G・H・5・6グリッドに位置する。第29号炉穴を壊し、第4号溝跡に壊されている。

規模は長軸6.57m、短軸6.28m、深さ0.52m、主軸方位はN-35°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子などを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には全面に掘り方と貼床が認められ、カマドから床面中央、P5にかけて硬化していた。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ビットが確



第 257 図 第 62 号住居跡 (1)

1 J62	
1 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)・灰白色ブロック 0.5~10mm 中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまりや中強い 粘性なし(自然堆積)
2 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
3 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)・黄土状土(1mm)中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
4 黒褐色土	黒色土主体 しまりやや中強い ローム粒土(0.1~3mm)・黄土状土(1mm)少量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
5 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)・ロームブロック(0.10mm)少量 ローム粒土(0.1mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
6 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)微量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
7 暗褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)多量 ロームブロック(0.10mm)少量 ローム粒土(0.1mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
8 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)・ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
9 暗褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
10 暗褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
11 暗褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
12 暗褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)
13 黒褐色土	黒色土主体 ローム層土(0.1~3mm)中量 ロームブロック(0.10mm)少量 しまり強い 粘性なし(自然堆積)

16 黒色粘土	焼土ブロック (φ 50 mm)・炭灰物粒子 (φ 1~2 mm) 少量 しまりや強い、粘性弱い
19 暗褐色土	ローム粒子・炭灰物粘土粒子 (φ 2~3 mm) 少量 しまりや強い、粘性弱い
20 暗褐色土	19 層よりやや強い、ローム粒子・炭灰物粘土粒子 (φ 2~3 mm) 少量、しまりやや強い、粘性弱い
ビット 1~5	
21 黒色粘土	ロームブロック (φ 10~20 mm) 少量、しまり強い、 粘性弱い
22 黒色粘土	ローム粒子 (φ 1 mm) 少量、しまりやや強い、粘性弱い
23 暗褐色土	ローム粒子・ロームブロック (φ 20~30 mm) 少量、しまり強い、 粘性弱い
24 黒色粘土	ロームブロック (φ 20~30 mm) 少量、しまりやや強い、 粘性弱い
25 暗褐色土	ローム土・ロームブロック (φ 30~40 mm) 多量、 しまりやや強い、粘性弱い
26 黒色粘土	ローム粒子 (φ 2~3 mm) 中量、ロームブロック (φ 10 mm) 少量 しまり強い、粘性弱い (液状土)
27 褐色土	ローム粒子 (φ 1~2 mm)・ロームブロック (φ 20~30 mm) 少量 しまり強い、粘性弱い (液状土)
28 暗褐色土	ロームブロック (φ 20~30 mm) 多量、しまりやや強い、 粘性弱い (柱間部より方柱土)
29 暗褐色土	ロームブロック (φ 30~40 mm) 多量、しまり強い、 粘性弱い (柱間部より方柱土、液状土)
30 黒色粘土	ローム粒子 (φ 2~3 mm) 中量、 <i>ゴキウ</i> を粒状に含む、しまり やや強い、粘性弱い (自然固結)
31 暗褐色土	ローム粒子 (φ 2~3 mm)・ロームブロック (φ 30~40 mm)・ 暗褐色粘土多量、しまりやや強い、粘性弱い (埋土)
32 黒色粘土	ローム粒子 (φ 1~2 mm) 少量、ロームブロック (φ 2~3 mm) しまりやや強い、粘性弱い (自然固結)
33 褐色土	ローム土 (φ 1~2 mm)・ロームブロック (φ 30~40 mm) 多量、しまり強い、粘性弱い (自然固結)
34 暗褐色土	ローム土 (φ 1~2 mm) 中量、しまりやや強い、粘性弱い、 (自然固結)

35 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 3 \text{ mm}$)多量 ロームブロック($\phi 30 \sim 50 \text{ mm}$)中量 ブラックバンド由来のブロック($\phi 50 \text{ mm}$)・焼土粒子($\phi 1 \sim 3 \text{ mm}$)少量 しまり強い 粘性なし (貼床)

第 258 図 第 62 号住居跡 (2)

認められた。カマドは長軸 1.64m、短軸 0.87m、深さ 0.69m で、北西壁中央に位置する。その構造は、煙道から煙出しにかけて北西壁を掘り込み、天井部と袖部は粘土を用いて構築している。覆土は焼土や粘土ブロックを含む暗褐色土の崩落土で、燃烧部の底面には灰層が堆積していた。袖部の内面は赤く被熱していた。第 15 層中から土師器甕(17・18) が出土した。

貯蔵穴は長軸 0.78m、短軸 0.59m、深さ 0.3m で、北隅角に位置する。平面は楕円形を呈し、覆土は住居跡と同様である。

壁溝は全周する。幅0.22m～0.43m、深さ6cm～12cmで、覆土は住居跡と同様である。

ピットは3基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P 1は0.71 m×0.67 m×0.69 m、P 2は0.85 m×0.76 m×0.71 m、P 3は0.93 m×0.78 m×0.67 m、P 4は1.14 m×0.84 m×0.95 m、P 5は0.88 m×0.45 m×0.32

mである。P1～P4は主柱穴、P5は入口ピットである。P1～P4はほぼ同規模で、覆土は拔柱後の自然堆積である。P5は長楕円形である。ピットの周辺には土手状の高まりがある。

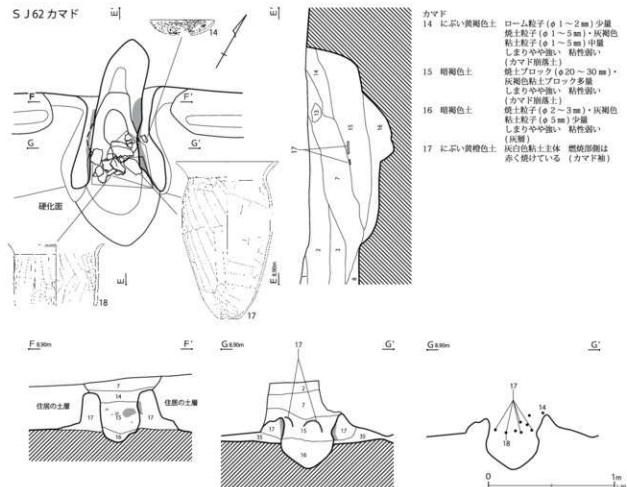
遺物は少ない。カマド内部と北壁隅角に集中する。そのうち16・32が床面直上、17・18がカマド内から出土した遺物である。主に古墳時代（7世紀後半）の土師器・甕・甔が出土した。

1は須恵器坏蓋である。合子状の蓋で、弓張状である。胎土は緻密で、内面に降灰がみられる。湖西窯産か。

2は坯身である。受部はかえりが内側に短く立ち上がる。底部に回転ヘラケズリを施す。胎土は緻密。湖西窯産。

7・8・10は甕である。外面平行タタキで、内面に当て具痕は認められない。湖西窯産。

9の饗は外面に格子目タタキ、内面に同心円当



第259図 第62号住居跡(3)

て具痕が認められる。

11は甕で、外面に同心円文タタキを施し、底部には横方向のヘラケズリを行う。

12は坏である。立ち上がりの角度は高く、クロ目が強い。三和窯産か。12は平安時代の混入遺物である。

13は瓶・壺類の口縁部か。端部は厚く、外反する。

14・15は土器の半球形環である。比較的薄く、口唇部は上に立ち上がるのみで、身は浅い。14は内外面に密にミガキを施し、15は内面にミガキを施す。

16・19は甕である。16は常総型甕である。口縁部は丸く屈曲し、口唇部はわずかに突出する。

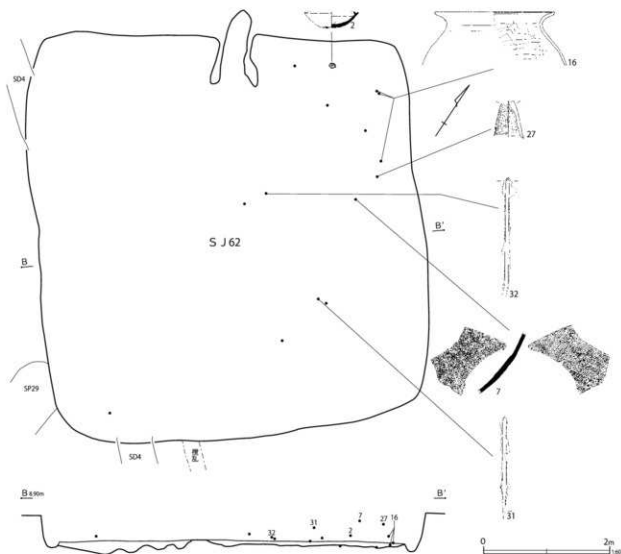
胎土に雲母や白色小石を多量に含み、新治窯産に近い特徴をもつ。17の長胴甕は武蔵型甕で、口縁部は「く」の字に外反し、胴部上半に最大径が位置し、底部は細い。器壁は薄い。18・19は胴部上半の破片で、口縁部が短く外反する。

20～22は甕である。20・21は底部片で、胴部は直線的にすばまる。底径が大きく、大型甕の可能性が高い。22は多孔甕の底部片である。孔は2箇所残存し、刀子による切開痕が残る。

23～27は混入遺物である。23・24は半球形環、25は内彎口縁部、26～28は高坏である。

29・30は焼成粘土塊である。

31は鉄鎌である。刃部は柳葉形、刃部間は無開、頸部は長頸、頸部間は棘状間である。



第260図 第62号住居跡遺物出土状況

32は棒状鉄製品である。先端は刃部の可能性があり、長頸鎌の可能性も残る。

本住居跡の時期は、7段階(7世紀後半)である。

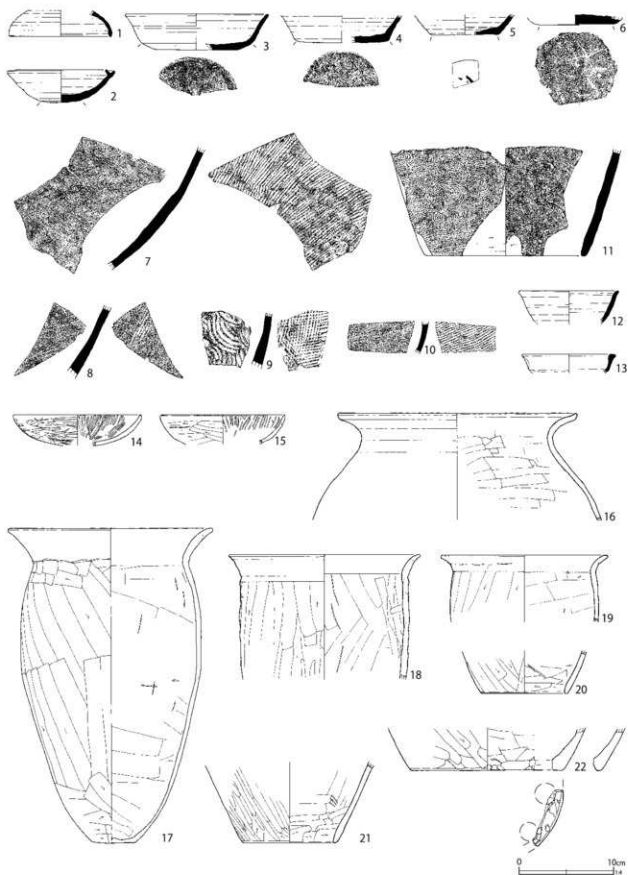
第63号住居跡(第263～266図)

M・N-8・9グリッドに位置する。南東部は調査区域外のため確認できなかった上に、攪乱による削平、および第47号住居跡と第118号土壇に壊されており、遺存状態は良くない。

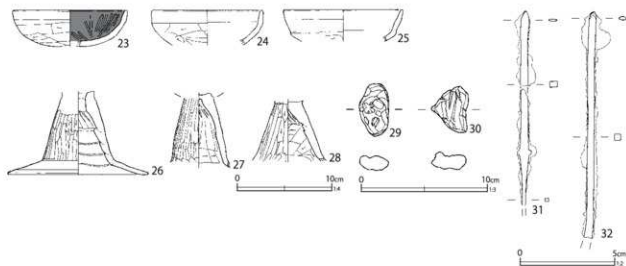
規模は推定で長軸6.67m、短軸6.1m、深さ0.31m、主軸方位はN-35°-Wである。平面は方形であると考えられる。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床

面の掘り方と貼床は明瞭には確認できなかったが、P1にかかる第19層が貼床の可能性が残る。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ピットが確認された。カマドは長軸1.33m、短軸1.14m、深さ0.54mで、北西壁中央に位置する。その構造は、煙道から煙出しにかけて北東壁を掘り込み、天井部と袖部は粘土で構築している。なお、袖部には土師器甕(4～6)が、補強材として逆位に置かれていた。覆土はローム粒子や焼土粒子等を含む暗赤褐色等の崩落土が中心で、燃焼部底面に灰層が堆積していた(第13・14層)。内部から土師器小片が出土した。



第261図 第62号住居跡出土遺物(1)



第262図 第62号住居跡出土遺物(2)

第76表 第62号住居跡出土遺物観察表(第261・262図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(10.8)	[2.8]	(10.8)	ABG	5	普通	オリーブ灰	A 湖西か 内面降灰	153-3
2	須恵器	坏	(9.6)	3.5	—	ABG	70	良好	灰	No.1 湖西 受部径 11.4	153-4
3	須恵器	坏	(15.0)	3.8	(8.8)	BEFG	20	不良	オリーブ黒	C 新治 土師質	153-6
4	須恵器	坏	—	[3.0]	9.6	BEFG	20	普通	明オリーブ	B 新治 内部高 8.9 雲母多量 胎土は大粒の白色小石	153-7
5	須恵器	坏	—	[2.2]	(7.0)	BEFG	10	良好	灰白	B 新治 底部黒書か 胎土は大粒の白色粒子を含まないが雲母が少量入る	153-5
6	須恵器	坏	—	[1.0]	(8.0)	BEFG	90	普通	灰黄	D 新治 胎土は大粒の白色小石 底部磨滅	153-8
7	須恵器	甕	—	[14.9]	—	BEG	5	良好	灰	No.8・D 湖西 内面自然釉・降灰	163-3
8	須恵器	甕	—	[7.8]	—	BEG	5	良好	灰白	B 湖西 外面自然釉	163-3
9	須恵器	甕	—	[5.8]	—	BEG	5	普通	オリーブ灰	A 常総 多孔	163-3
10	須恵器	甕	—	[3.4]	—	ABG	5	普通	灰	C 湖西	163-3
11	須恵器	甕	—	[11.3]	(16.2)	BEFG	10	良好	灰	A 常総 多孔	163-3
12	須恵器	坏	(10.6)	[3.6]	—	ABG	5	良好	灰黄	A 三和 平安の混入	163-3
13	須恵器	甕	—	[2.0]	(9.8)	G	20	良好	灰黄	B 外面自然釉	163-3
14	土師器	坏	(13.4)	[3.3]	—	BEFG	30	普通	橙	No.22・A 北武蔵型坏	153-9
15	土師器	坏	(13.0)	[3.1]	—	ABDEG	15	普通	橙	D 北武蔵型坏	153-10
16	土師器	甕	(25.2)	[11.4]	—	ABEFG	20	普通	にぶい黄橙	No.3・4・6・A 常総型甕 胎土は雲母・石英・大粒の白色小石多量(新治のような土) 薄手 強いくびれ 口唇弱い立ち上がりで丸い	154-1
17	土師器	甕	(21.2)	33.4	4.3	ABDG	40	普通	にぶい褐	No.16・17・19・20・21 長胴甕	154-2
18	土師器	甕	(20.0)	[13.2]	—	ABDEG	30	普通	にぶい赤褐	No.20 外面被熱	154-3
19	土師器	甕	(17.4)	[7.0]	—	ABEG	40	普通	にぶい赤褐	A	154-4
20	土師器	甕	—	[4.5]	(9.0)	ABEG	25	普通	にぶい黄褐	A・B	154-5
21	土師器	甕	—	[8.6]	(9.8)	ABEF	20	普通	にぶい黄褐	A 雲母・石英多量	154-6
22	土師器	甕	—	[4.5]	(16.0)	ABDE	10	普通	暗灰	A 多孔 角安多量	154-7
23	土師器	坏	(12.0)	3.8	—	ABEK	25	普通	明褐	D 半球形坏 内面漆 胎土はチャート小石	154-8
24	土師器	坏	(11.4)	[3.7]	—	BEFG	25	普通	橙	B 半球形坏 内面漆か	154-8

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
25	土師器	坏	(12.4)	[3.4]	—	ABDG	20	普通	にぶい黄橙	A・B 内轡口縁環	155-1
26	土師器	高坏	—	[8.8]	(14.6)	ABDEG	35	普通	にぶい黄橙	D 屈折脚 混入	
27	土師器	高坏	—	[7.9]	—	ABEG	85	普通	にぶい褐	Na.7 屈折脚 混入	
28	土師器	高坏	—	[6.4]	—	ABEG	70	普通	にぶい褐	A 屈折脚 混入	
29	粘土塊	—	長軸長 4.2 最大幅 2.3 厚さ 1.1 重さ 9.3g			B		普通	にぶい橙	D 焼成している	170-1
30	粘土塊	—	長軸長 3.6 最大幅 2.7 厚さ 1.2 重さ 9.2g			B		普通	橙	B 焼成している	170-1
31	鉄製品	鉄鏃	残存長(刀部) [4.0]・(頸部) [6.0] 0.5 頸部長 6.5 頸部幅 0.4 基部幅 0.2 重さ 6.1g				鏃身長 1.1 鏃身幅	Na.11 篠間長頸無間柳葉			172-1
32	鉄製品	棒状品	長さ [12.0] 幅 0.4 厚さ 3.5 重さ 6.4g					Na.9 鉄鏃か			172-1

貯蔵穴は長軸 0.74m、短軸 0.35m、深さ 0.2m で、カマドの東側に隣接する。平面は隅丸長方形を呈し、内部から土師器甕(7)が出土した。

壁溝は確認範囲では全周する。幅 0.14m ～ 0.34m、深さ 4cm ～ 9cm で、覆土は住居跡と同様である。

ピットは2基検出された。P1は長径 0.7m、短径 0.68m、深さ 0.59m、P2は長径 0.43m、短径 0.37m (確認範囲)、深さ 0.25m で、いずれも主柱穴である。P1はローム粒子とロームブロックを含む褐色土で埋め戻されていた。P2は内部から高坏(3)が出土した。

遺物は少なく、カマド周辺に集中する。そのうち、4・5・6はカマド袖部、7は貯蔵穴、3はP2から出土した。主に古墳時代(7世紀後半)の土師器坏・高坏・甕・瓶が出土した。

1・2は坏である。1は有段口縁環である。口唇部内面に沈線があり、口縁部の段部は浅い。比較的薄手で、口径が大きい。2は北武蔵型坏である。薄手で口唇部は上に立ち上がる。

3は高坏である。坏部と脚部の接合部で、分厚い。脚部は中空で、折損部の形状から短脚と思われる。外面はヘラケズリ、内面はハゲ調整を施す。

4～7は長胴甕である。4・5は口縁部が「く」の字形に開く。5はやや口縁部高が低く、口唇部内面をヨコナデにより凹ませている点が異なる。6は屈曲部がカーブし、丸みを帯びる。7の口縁

部は「く」の字形に開くが、器壁が厚い。

8は瓶の底部である。内面にミガキを密に施す。本住居跡の時期は、7段階(7世紀後半)である。

第65号住居跡 (第267・268図)

N・O-8・9グリッドに位置する。東側は調査区域外で、北側から西側にかけて第3号溝跡と第41号住居跡に壊されている。また、全体的に耕作や攪乱により削平されており、遺存状態は良くない。

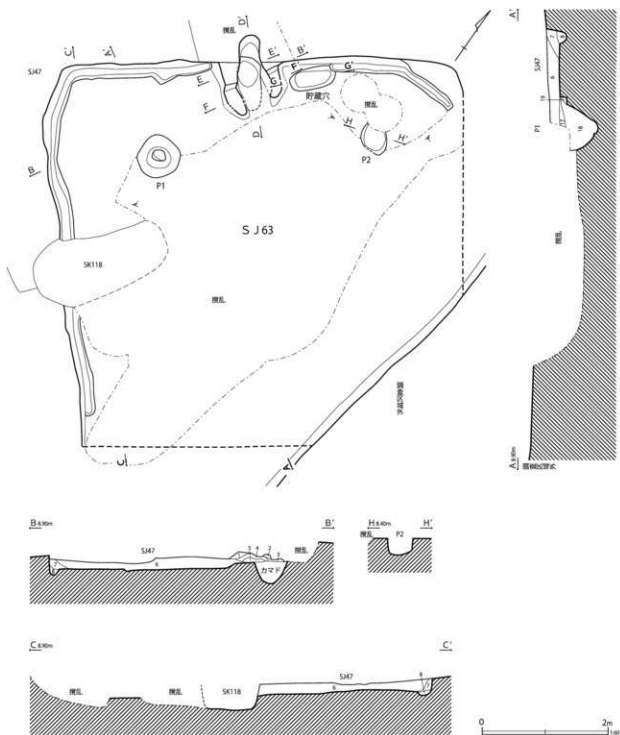
規模は確認範囲で、長軸 2.05m、短軸 1.25m、深さ 0.25m である。主軸方位は、平面形や炉跡が確認できなかったため、不明である。覆土はローム粒子やロームブロックを含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面には、部分的に掘り方と貼床が認められた。

床面からはピットが1基検出された。P1は長径 0.33m、短径 0.16m (確認範囲)、深さ 0.1m と浅い上に、全体を確認できなかったため、柱穴とするには判断材料に欠ける。

遺物は非常に少なく、覆土中から数点の土師器片が出土したに留まる。主に古墳時代前期の土師器甕が出土した。

1～3は台付甕である。1・2は口縁部の破片で、1は直線的に外反し、ハゲ調整後、頸部に粘土帯をめぐらす。2はやや外反の度合いが強い。3は脚部である。内外面全体をハゲ調整する。

本住居跡の時期は、1段階新相(古墳時代前期



S J 63

6 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1\text{mm}$)・焼土粒子($\phi 1\sim 3\text{mm}$)中量 炭化物粒子($\phi 1\text{mm}$)少量 しまりや強い 粘性なし (S J 47 床面下の覆土 自然堆積)

7 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1\sim 5\text{mm}$)中量 焼土粒子($\phi 1\text{mm}$)・炭化物粒子($\phi 1\text{mm}$)微量 しまりや強い 粘性なし (自然堆積・崩落土)

8 暗褐色土 ローム粒子($\phi 1\sim 3\text{mm}$)少量 焼土粒子($\phi 1\text{mm}$)微量 しまりや強い 粘性なし (壁溝)

ビット 1

17 灰・黄褐色土 ローム粒子($\phi 1\sim 2\text{mm}$)少量 ロームブロック($\phi 10\sim 30\text{mm}$)中量 焼土粒子($\phi 2\sim 3\text{mm}$)少量 しまりや強い 粘性なし (埋土)

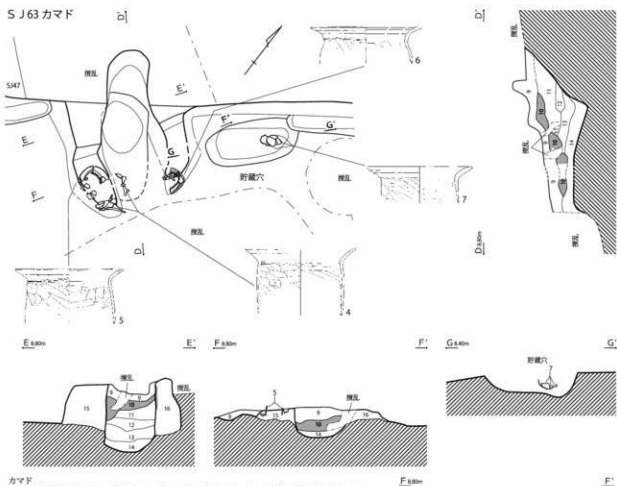
18 褐色土 ローム粒子($\phi 1\sim 2\text{mm}$)・ロームブロック($\phi 10\sim 30\text{mm}$)多量 しまりや強い 粘性なし (埋土)

19 褐色土

ロームブロック($\phi 10\sim 30\text{mm}$)中量 焼土粒子($\phi 1\sim 2\text{mm}$)・炭化物粒子($\phi 1\text{mm}$)少量 しまり強い (貳床)

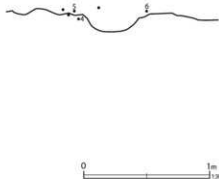
第263図 第63号住居跡(1)

S J63 カマド



カマド

- 1 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)少量 白色粘土粒子($\phi 2 \sim 5$ mm)中量 (煙道に埋されたカマド構築土)
- 2 にぶい黄褐色土 炭化物粒子($\phi 1$ mm)少量 白色粘土ブロック($\phi 10 \sim 15$ mm)中量 (煙道に埋されたカマド構築土)
- 3 暗褐色土 焼土粒子($\phi 3$ mm)中量 焼土ブロック($\phi 10 \sim 30$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 5$ mm)少量 (煙道に埋されたカマド構築土)
- 4 にぶい黄褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 50$ mm)少量 焼土ブロック($\phi 5 \sim 10$ mm)多量 (煙道に埋されたカマド構築土)
- 5 赤褐色土 焼土粒子($\phi 2 \sim 5$ mm)・焼土ブロック($\phi 10$ mm)少量 (煙道に埋されたカマド構築土)
- 9 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 3$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)・焼土ブロック($\phi 10$ mm)中量 しまり強い 粘性なし (自然堆積)
- 10 暗赤褐色土 焼土層 焼土粒子極めて多量 しまり強い 粘性なし (カマド構築土の崩落層)
- 11 にぶい赤褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)多量 白色粘土($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 しまりなし 粘性弱い (カマド内堆積土+崩落土)
- 12 にぶい橙褐色土 焼土粒子($\phi 0.5$ mm)・白色粘土($\phi 1 \sim 5$ mm)中量 しまりなし 粘性弱い (カマド内堆積土+崩落土)
- 13 黒褐色土 灰層 焼土粒子($\phi 5$ mm)微量 地山由来のブラックバンドブロック($\phi 20 \sim 30$ mm)少量 しまり強い 粘性弱い
- 14 灰黄褐色土 灰層 白色粘土($\phi 10 \sim 20$ mm)・地山由来のブラックバンドブロック($\phi 20 \sim 30$ mm)少量 しまり強い 粘性弱い
- 15 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)少量 しまり強い 粘性なし (左袖)
- 16 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 白色粘土ブロック($\phi 30 \sim 50$ mm)極めて多量 しまり強い 粘性弱い (右袖)



第264図 第63号住居跡(2)

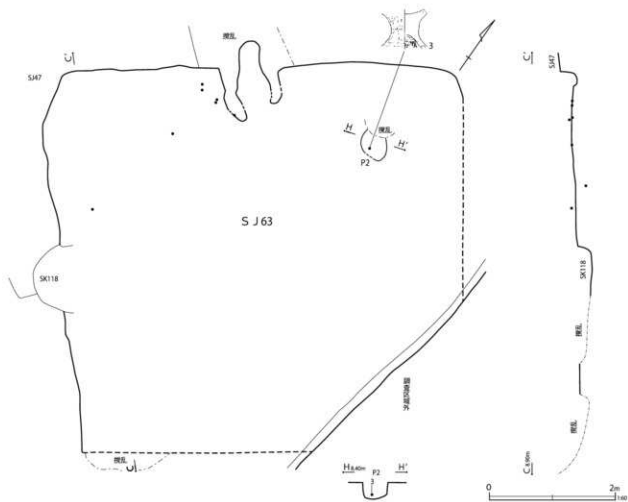
後半)と推定される。

(2) 土壌

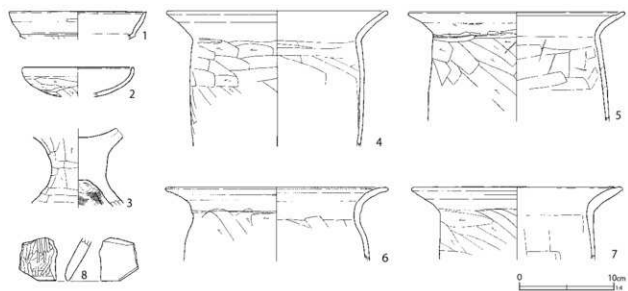
第96号土壌 (第269・270図)

O・P-8グリッドに位置する。第67号住居跡に壊されている。規模は長軸3.28m、短軸2.59m、

深さ0.3m、長軸方位はN-55°-Eである。平面は長方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土等の自然堆積である。底面には焼土の堆積するピットや炭化材が検出された。古墳時代前期の台付甕が出土した。1は口縁部の破片



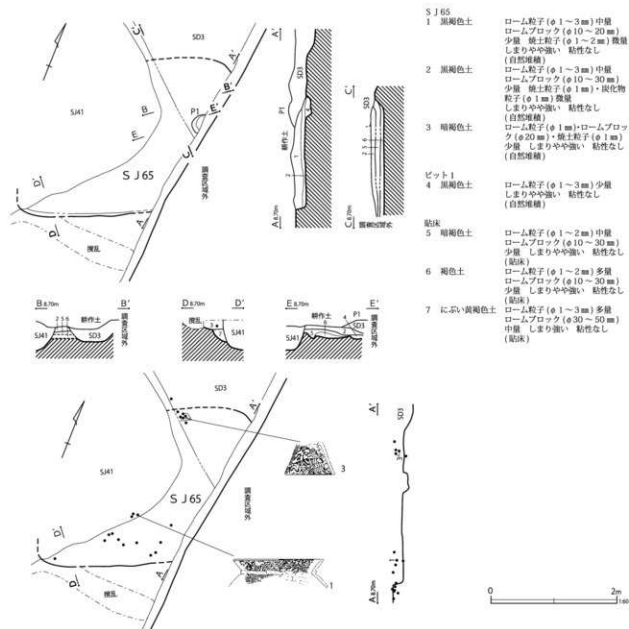
第265図 第63号住居跡遺物出土状況



第266図 第63号住居跡出土遺物

第77表 第63号住居跡出土遺物観察表 (第266図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(14.4)	[2.9]	—	ABG	15	普通	楊灰	有段口縁坏 口縁内面沈溝	
2	土師器	坏	(11.6)	[3.1]	—	BDEG	30	普通	橙	北武蔵型坏	155-2
3	土師器	高坏	—	[8.2]	—	ABE	70	普通	にぶい・赤褐	№12 長脚	155-3
4	土師器	甕	(23.0)	[14.3]	—	ABDEF	20	普通	にぶい・橙	№13・カマド 長胴甕 角安多量・雲母は粒子が細かいものが多量	155-4
5	土師器	甕	22.9	[11.5]	—	ABDEFGR	60	普通	にぶい・赤褐	№15・カマド 長胴甕 角安多量・雲母微量 胎土5mm前後の小石	155-5
6	土師器	甕	(23.2)	[7.8]	—	ABDFG	30	普通	橙	№14 長胴甕 角安多量・雲母微量	155-6
7	土師器	甕	(21.7)	[7.7]	—	ABDEF	10	普通	にぶい・褐	№15・16・17 長胴甕 角安多量・雲母微量	155-7
8	土師器	瓶	—	[4.6]	—	ABDEG	5	普通	にぶい・黄橙	カマド袖 外面磨滅	



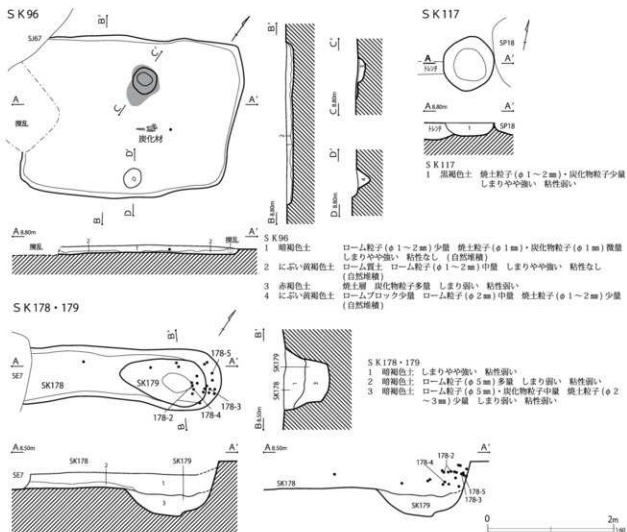
第267図 第65号住居跡



第268図 第65号住居跡出土遺物

第78表 第65号住居跡出土遺物観察表 (第268図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付甕	(18.6)	[6.2]	—	ABE	35	普通	にぶい・黄褐色	No. 4	155-8
2	土師器	台付甕	(17.2)	[3.0]	—	BDEG	30	普通	にぶい・橙		155-9
3	土師器	台付甕	—	[6.9]	(10.0)	ABEG	80	普通	にぶい・褐色	No. 1・3	155-10



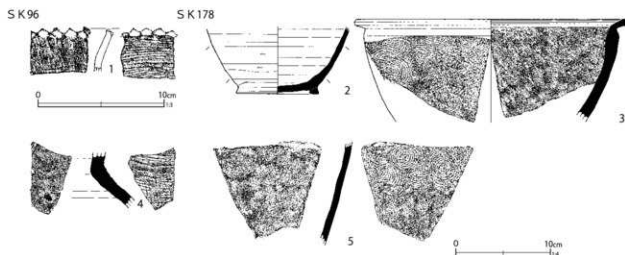
第269図 第96・117・178・179号土坑

で、内外面に粗いハケ調整、口唇部に刻みを施す。

第117号土坑 (第269図)

P-8 グリッドに位置する。第18号炉穴を壊

す。規模は長径 0.85 m、短径 0.81 m、深さ 0.21 m、長軸方位は N-11°-E である。平面は円形である。覆土は焼土粒子や炭化物粒子を含む黒



第270図 第96・178号土壌出土遺物

第79表 第96・178号土壌出土遺物観察表(第270図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	台付壺	—	[3.3]	—	BE	5	普通	にぶい黄橙	SK96 No.1	
2	須恵器	壺	—	[7.1]	(8.4)	ABG	30	良好	灰	SK178 No.7・15 湖西か 内面底部自然釉	164-1
3	須恵器	鉢	(28.0)	[10.9]	—	DEFGK	15	普通	楊灰	SK178 No.13 新治 外面同心円文タタキ 外面割離激しい	164-2
4	須恵器	甕	—	[6.0]	—	ABEFGK	5	普通	灰	SK178 No.16 不明(東毛か) 胎土白色小石	164-2
5	須恵器	瓶	—	[11.0]	—	ABEFGK	5	普通	灰黄楊	SK178 No.10 新治 外面同心円文タタキ 胎土大粒の白色小石	164-2

褐色土の自然堆積である。遺物は出土しなかったが、覆土が堅穴住居跡と共通することから、古墳時代に帰属する土壌と推定した。

第178・179号土壌(第269・270図)

D-4グリッドに位置する。どちらも第7号井戸跡に壊されている。両者の重複関係は、第179号土壌が第178号土壌に壊されている。第178号土壌の規模は、確認範囲で長軸3.08m、短軸0.98m、深さ0.33m、長軸方位はN-54°-Eである。第179号土壌は長軸1.39m、短軸0.73m、深さ0.38m、長軸方位はN-66°-Eである。平面は第178号土壌は長方形、第179号土壌は楕円形である。覆土はローム粒子等を含む暗褐色土の自然堆積である。遺物は第178号土壌の覆土中から出土した。主に奈良時代の須恵器壺・鉢

類が出土した。

2は須恵器壺である。胴部下半に回転ヘラケズリを施す。底部には高台が付く。高台は断面が台形状を呈し、角が無く丸い。内面底部に自然釉がみられる。湖西窯産か。

4は甕か。外面格子目タタキ、内面は不明。胎土に白色小石を含み、器壁が厚いことから、東毛地域産の可能性が考えられる。

3・5は鉢か瓶と推定される。いずれも外面に同心円文タタキが施される。3は口縁部が短く外反し、胴部はカーブが強く、鉢形である。

本土壌の時期は遺物による推定は困難だが、第7号井戸跡との重複関係から、古墳時代(7世紀代)と推定される。

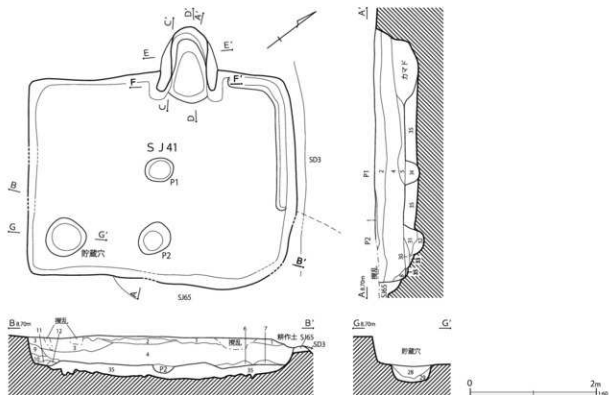
3. 奈良時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第41号住居跡 (第271～275図)

N・O-8・9グリッドに位置する。第65号住居跡を壊す。

規模は長軸4.27m、短軸3.47m、深さ0.54m、主軸方位はN-53°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子や焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面全体に、掘り方と

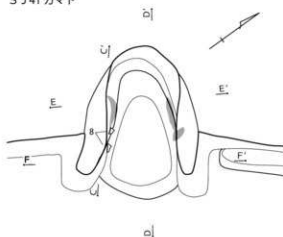


- S J 41
- 1 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 焼土粒子 (φ2mm) 少量
しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 焼土粒子 (φ1mm) 微量
しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
 - 3 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 焼土粒子 (φ2mm) 微量
しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
 - 4 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm)・焼土粒子 (φ2～3mm)
中量 炭化物粒子 (φ1mm) 少量 しまりやや強い
粘性なし (自然堆積)
 - 5 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 多量 焼土粒子 (φ1～2mm)・
炭化物粒子 (φ1mm) 中量 しまりやや強い 粘性なし
(自然堆積)
 - 6 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 多量 焼土粒子 (φ1～2mm)
少量 (自然堆積)
 - 7 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 ロームブロック (φ20～
30mm)・焼土粒子 (φ1mm) 少量 しまりやや強い
粘性なし (自然堆積)
 - 8 にぶい黄褐色土 ロームブロック (φ10～20mm) 中量 しまりやや強い
粘性なし (硬質底土)
 - 9 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 しまりやや強い (硬質底土)
 - 10 にぶい黄褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 多量 ロームブロック (φ10～
20mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (硬質底土)

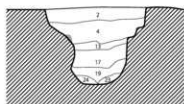
- 11 褐色土 ローム土主体 ロームブロック (φ30mm) 少量 焼土粒子
(φ1～2mm) 微量 しまりやや強い 粘性なし
(硬質底土)
- 12 黄褐色土 ロームブロック しまりやや強い 粘性なし (硬質底土)
- 貯蔵穴
- 28 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm)・焼土粒子 (φ1～3mm) 中量
炭化物粒子 (φ1mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
- 29 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
(自然堆積)
- ビット1・2
- 30 にぶい黄褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 しまりやや強い 粘性弱い
(自然堆積 硬質土と一緒に埋もれる)
- 31 にぶい黄褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 ロームブロック (φ5mm)
少量 しまりやや強い 粘性弱い (自然堆積)
- 32 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 中量 しまり強い 粘性弱い
(自然堆積)
- 33 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 微量 しまりやや強い 粘性弱い
(硬質底土)
- 34 暗褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm) 少量 ロームブロック (φ20mm)
中量 焼土粒子 (φ1～2mm) 微量 しまりやや強い
粘性弱い
- 前床
- 35 黒褐色土 ローム粒子 (φ1～2mm)・ロームブロック (φ30～50mm)
中量 しまりやや強い 粘性なし (前床)

第271図 第41号住居跡 (1)

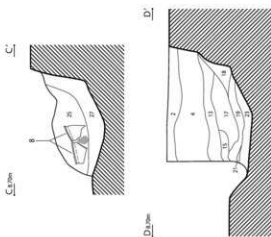
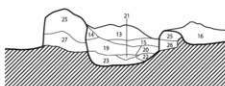
SJ41 カマド



E 0.2m E'



F 0.9m F'



カマド

- 13 極暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)・炭化物粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)少量 白色粘土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)中量 しまりやや強い 粘性なし (カマド内埋積土)
- 14 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)多量 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)中量 しまりやや強い 粘性なし (カマド埋積土)
- 15 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)・白色粘土粒子($\phi 1$ mm)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 炭化物粒子($\phi 1$ mm)微量 しまりやや強い 粘性なし (カマド内埋積土)
- 16 極暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 3 \sim 5$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (カマド埋積土)
- 17 にぶい赤褐色土 焼土粒子($\phi 10$ mm)多量 炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (硬く焼きしまっている)
- 18 暗褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (埋り出し内 自然堆積)
- 19 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)少量 焼土ブロック($\phi 3 \sim 5$ mm)・炭化物粒子($\phi 1$ mm)微量 焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)極めて多量 しまりやや強い 粘性なし (カマド燃焼部付近 灰層1)
- 20 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)少量(剥けている) 焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm)中量 しまりやや強い 粘性なし (カマド内埋積土)
- 21 黒褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)微量 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (黒色系の土主体 カマド内埋積土)
- 22 暗褐色土 ロームブロック($\phi 10$ mm)少量 白色粘土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)中量 しまりやや強い 粘性なし (崩落土)
- 23 暗褐色土 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土粒子($\phi 2 \sim 3$ mm)少量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
- 24 黒褐色土 灰層(バサバサした灰ではない) 焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)微量 しまり弱い 粘性強い (カマド灰層2)
- 25 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・白色粘土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)多量 焼土粒子($\phi 0.5 \sim 3$ mm)中量 しまり強い 粘性強い (カマド埋)
- 26 暗赤褐色土 ローム粒子($\phi 1$ mm)・炭化物粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)少量 焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm)多量 しまりやや強い 粘性なし (カマド埋)
- 27 にぶい黄褐色土 ローム粒子($\phi 1 \sim 2$ mm)・焼土粒子($\phi 1$ mm)少量 白色粘土ブロック($\phi 10 \sim 20$ mm)多量 しまり強い 粘性強い (カマド埋)

0 1m

第272図 第41号住居跡(2)

貼床を確認した。

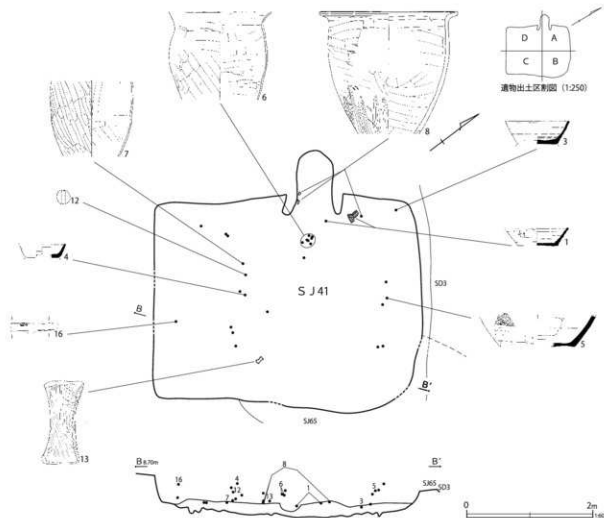
床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ビットが検出された。カマドは規模は長軸1.22m、短軸1.16m、深さ0.65mで、北西壁面中央部に位置する。その構造は、燃焼部から煙出しにかけて壁面を掘り込み、天井部や袖部は白色粘土を用いて構築している。左袖には土師器甕の口縁部破片2点(8)が、補強材に使われていた。覆土はローム粒子や焼土・炭化物粒子を含む黒・暗褐色土で、崩落土が主体

をなす。燃焼部底面には灰層(第19・24層)が堆積していた。内部から遺物は出土しなかった。

貯蔵穴は南隅角に位置する。規模は長軸0.6m、短軸0.59m、深さ0.29mで、平面は円形である。覆土はローム粒子を含む暗褐色土の自然堆積である。内部から遺物は出土しなかった。

壁溝は北隅角から北東壁面にかけてめぐる。幅0.22m～0.33m、深さ5cm～11cmである。

ビットは2基検出された。P1は長径0.45m、



第273図 第41号住居跡遺物出土状況

短径0.37m、深さ0.21m、P2は長径0.55m、短径0.44m、深さ0.36mと、いずれも浅い。覆土はローム粒子やロームブロックを含む暗・にぶい黄褐色土の自然堆積である。P1は主柱穴、P2は入口ピットと考えられる。

遺物は比較的多く出土した。遺物は床面全体に散在しており、まとまりはない。そのうち、1・3・7・13が床面直上出土遺物、8はカマド構築材と床面出土遺物の接合資料である。主に奈良時代の須恵器・甕・土師器・土玉・砥石・鉄釘が出土した。

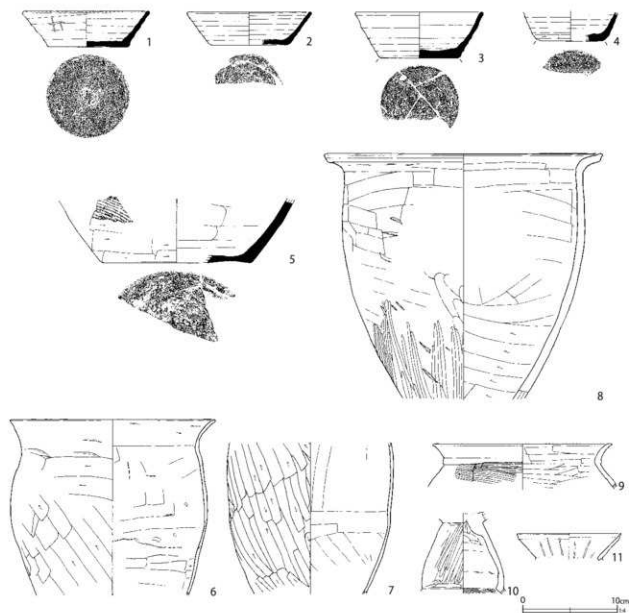
1～4は新治窯産の須恵器である。1は箱形で、ロクロ目が強く、器壁は厚い。外面にヘラ記

号が刻まれる。底部はヘラ切り後未調整で、中心に粘土がたまる。2・3も同例だが、4は胴部下半に回転ヘラケズリを施す。

5は甕である。胴部上半を平行タタキ、下半をヘラケズリで調整している。底部は未調整である。新治窯産。

6～8は土師器甕である。6は武蔵型甕で、口縁部は緩やかに外反する。器壁は薄く、胴部上半に最大径が位置する。7は長胴甕の胴部片で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデを施す。

9～11は古墳時代前期の混入遺物で、東側に位置する第65号住居跡に由来する遺物の可能性が高い。9は台付甕か、10は高坏の脚部、11は



第274図 第41号住居跡出土遺物(1)

埴である。

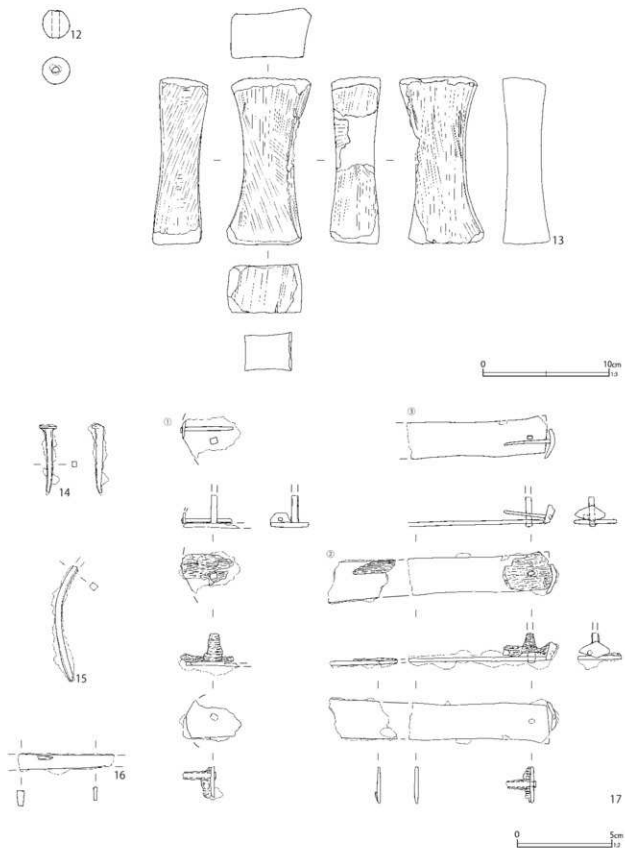
12は土玉である。

13は砥石である。分銅形の砥石で、小口面の一面を除いて、使用している。表裏・右側面には、研磨痕の上に刃痕があり、最終使用面は左側面と考えられる。石材は群馬県南牧村砥沢産の流紋岩である。凝灰岩製の砥石に比べると、やや重い特徴がある。

14は鉄釘である。

15・16は棒状鉄製品である。15は断面は方形で、平面は弧状である。16は折損部両端の断面形状が異なり、左側が厚く、台形である。刀子よりも大型の刃物製品の柄か。

17は不明鉄製品である。延べ板状の鉄地の片側に木質が付着し、その反対側の面から釘で鉄板と木質を固定している。木質の木目は鉄地の長軸と同じ方向に走る。端部にはもう一枚の鉄地が直交して組み合わせり、これも釘で固定される。さ



第275図 第41号住居跡出土遺物(2)

第80表 第41号住居跡出土遺物観察表(第274・275図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	13.2	3.8	8.4	DECK	90	良好	灰	№21・22・A 新治 ヘラ記号あり 内底径7.5・内部高3.2 胎土は大粒の白色小石多量 胎土は粗く密に入っている 底部中心に粘土だまり 底部刀子おこしか	156-1
2	須恵器	坏	(13.0)	3.5	(8.2)	BEGK	25	良好	灰	A・B 新治 内底径(7.2)・内部高3.0 胎土は大粒の白色小石	156-2
3	須恵器	坏	(13.2)	4.9	8.3	BDEG	50	良好	灰白	№19・A 新治 内底径7.7・内部高4.0 全体的に白い	156-3
4	須恵器	坏	—	[3.2]	(7.0)	BK	20	普通	にぶい黄橙	№6 新治 内底径(6.2) 胎土は小礫	156-4
5	須恵器	甕	—	[6.7]	(16.0)	BEPK	25	普通	灰	№17・A 新治 胎土は大粒の白色小石	156-5
6	土師器	甕	21.4	[18.7]	—	ABDEG	65	普通	にぶい赤褐	№23・26・A 武蔵型甕	157-1
7	土師器	甕	—	[16.0]	—	ABDEG	30	普通	にぶい黄橙	№4・D 薄手の長胴甕 北武蔵系か	158-1
8	土師器	甕	(28.8)	[26.0]	—	ABFGK	30	普通	にぶい橙	№20・27・28・カマド 常総型甕 雲母・白チャート多量	156-6
9	土師器	甕	(18.6)	[4.9]	—	ABG	15	普通	にぶい黄橙	A 台付甕か	158-2
10	土師器	高坏	—	[8.6]	—	AEDG	45	普通	暗灰黄	B 屈折脚高坏	158-3
11	土師器	埴	(11.0)	[2.8]	—	ABDEG	15	普通	にぶい黄橙	B 薄手 胎土は緻密	
12	土製品	土玉	最大高2.2 径2.1 孔径0.5～0.6 重さ9.2g			B	100	普通	灰黄褐	№5	169-2
13	石製品	砥石	長さ13.0 幅6.7 厚さ3.9 重さ397.2g						№13 流紋岩 無溝タイプ 分銅形 残存95%		171-1
14	鉄製品	釘	長さ[3.6] 頭幅0.9×0.6 身幅0.3 重さ1.7g						C		172-1
15	鉄製品	棒状品	長さ[6.1] 幅0.3 厚さ0.3 重さ4.4g						C		172-1
16	鉄製品	棒状品	長さ[5.1] 幅0.7～0.8 背幅0.2～0.4 重さ3.8g						№12		172-1
17	鉄製品	不明	長さ[3.1] 幅[2.1] 厚さ0.2 重さ4.5g						C		
	鉄製品	不明	長さ[3.6] 幅2.0 厚さ0.2 重さ3.8g						C		173-1・2
	鉄製品	不明	長さ[7.4] 幅1.9 厚さ0.2 重さ11.8g						C		

らにこれに接合しない破片が2片ある。1片は鉄地の一面に木質が付着する。もう一つの破片には、木質と釘が錆着している。鉄地は折損部の反対側は弧状である。本製品の部位や機能は不明だが、木材に鉄板をあて、釘で固定することから、方形の容器や枠のような木製品に付随するものと考えられる。覆土からの出土のため、混入遺物の可能性もある。

本住居跡の時期は、8段階(奈良時代中葉)である。

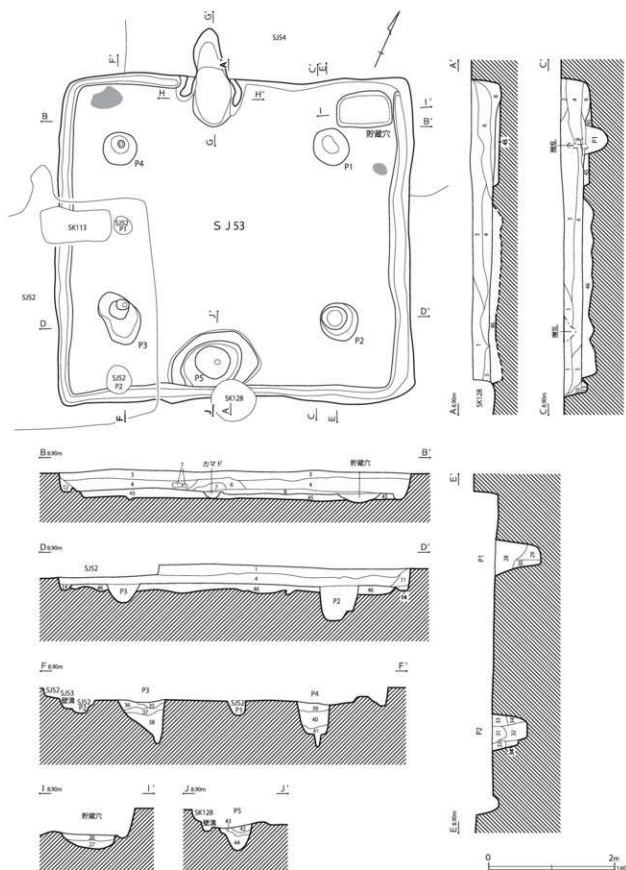
第53号住居跡(第276～281図)

K・L-6グリッドに位置する。第54号住居

跡を壊し、第52号住居跡・第113号土壇・第128号土壇に壊されている。

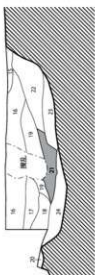
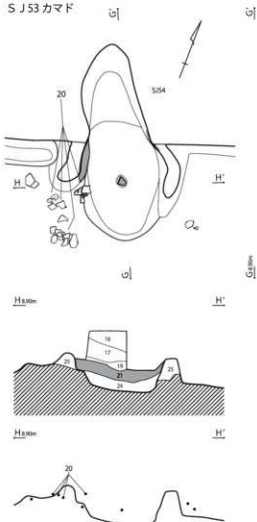
規模は、長軸5.73m、短軸5.3m、深さ0.35m、主軸方位はN-23°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロック、焼土・炭化物を含む暗褐色土を主体とする自然堆積土である。床面には掘り方と貼床が認められ、一部、第54号住居跡の覆土を床としていた。明瞭な硬化面はなかった。

床面からはカマド、貯蔵穴、壁溝、ピットが確認された。カマドは長軸1.57m、短軸1.11m、深さ0.5mで、北西壁中央に位置する。その構造は、



第276図 第53号住居跡(1)

S J53 カマド



- カマド
- 15 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm)・焼土粒子 (φ 1~2 mm)・白色粘土粒子 (φ 2 mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積)
- 16 暗褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm)・白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 中量 焼土粒子 (φ 2~5 mm) 少量 しまり強い 粘性なし (自然堆積)
- 17 に近い黄褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm) 中量 焼土粒子 (φ 2~5 mm) 少量 白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 多量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積+カマド崩落土)
- 18 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm) 少量 焼土粒子 (φ 2~5 mm) 中量 白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 多量 しまりやや強い 粘性なし (自然堆積+カマド崩落土)
- 19 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm)・焼土粒子 (φ 2~5 mm) 少量 白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 微量 しまりやや強い 粘性なし (カマド崩落土)
- 20 に近い黄褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm) 多量 ロームブロック (φ 30~50 mm) 中量 しまりやや強い 粘性なし (陥床か)
- 21 赤褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm) 微量 焼土粒子 (φ 2~5 mm) 極めて多量 白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 多量 しまり強い 粘性なし (カマド天井部崩落土)
- 22 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm)・白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 中量 焼土粒子 (φ 2~5 mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (湧出しからの流入土)
- 23 黒褐色土 ローム粒子 (φ 1~2 mm)・白色粘土粒子 (φ 2~10 mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (湧出しからの流入土)
- 24 黒褐色土 灰土層 ローム粒子 (φ 1~2 mm)・白色粘土粒子 (φ 5~10 mm) 少量 しまりやや強い 粘性なし (灰層)
- 25 に近い黄褐色土 焼土粒子 (φ 3~5 mm) 少量 灰白色粘土ブロック極めて多量 しまりやや強い 粘性強い (カマド底)



第278図 第53号住居跡 (3)

遺物である。主に奈良時代の須恵器蓋・高台付
杯・瓶類・土師器杯・高杯・甕・甗・鉄釘が出土
した。

1~4は須恵器蓋である。1はかえり付蓋で、
扁平宝珠摘みが付く。上半は回転ヘラケズリを施
す。全体が赤色を呈し、胎土に白色小石等を含む。
産地不明。2はかえり付蓋。新治窯産。3は端部
を折り曲げる。湖西窯産。4は端部が緩やかに折
り曲がり、丸みを帯びる。湖西窯産か。

5・6は杯である。5は口径が小さく、小型の
杯である。器壁は厚く、ロクロ目が強い。底部は
回転ヘラケズリを施す。口縁部がややゆがむ。新

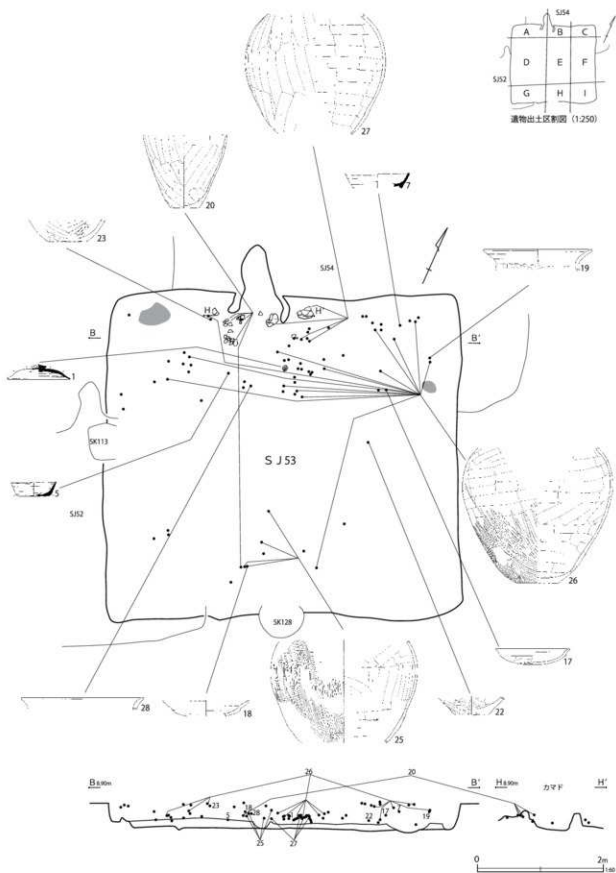
治窯産。6は大きさは5と近いが、ロクロ目がな
く、全体的に滑らかである。底部に回転ヘラケズ
リを施す。東海地域産か。

7は高台付杯である。大型で、台部は台形であ
る。湖西窯産。

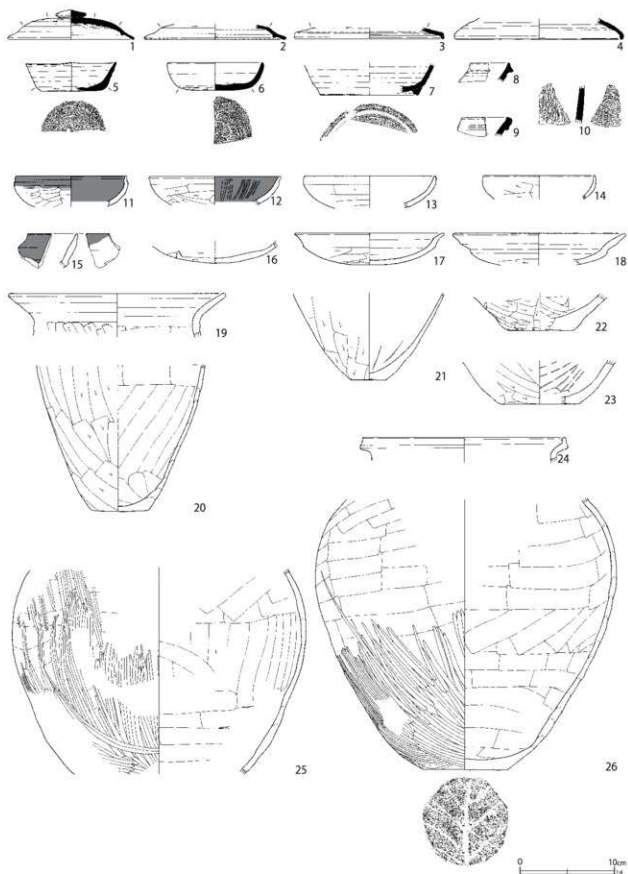
8・9は瓶類の口縁部である。湖西窯産か。

10は甕の胴部片である。

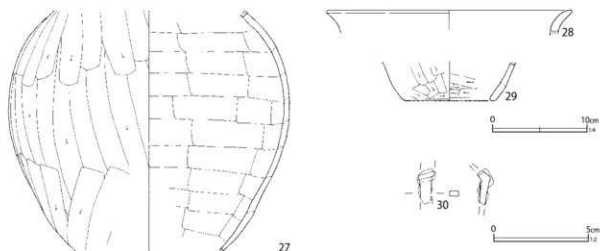
11~16は土師器杯である。11は杯身模倣杯、
12は半球形杯、13・14は北武蔵型杯である。11
は口唇部がわずかに立ち上がり、内外面に黒漆の
痕跡がある。12は口唇部が外反する。内面に炭
素吸着の痕跡がある。



第279図 第53号住居跡遺物出土状況



第280図 第53号住居跡出土遺物(1)



第281図 第53号住居跡出土遺物(2)

第81表 第53号住居跡出土遺物観察表(第280・281図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	(13.2)	3.1	—	ABEFGK	35	良好	にぶい赤褐	№.73 産地不明 扁平宝珠積み 横み径3.2・内部高1.7 赤色 胎土は3～5mmの小石・大粒の白色小石	158-4
2	須恵器	蓋	(14.8)	[1.6]	—	BFG	10	普通	黄灰	I 新治 大粒の白色粒子多量 断面赤色	
3	須恵器	蓋	(15.7)	[1.2]	—	BG	10	良好	灰	F 湖西	
4	須恵器	蓋	(17.5)	[2.2]	—	ABG	10	良好	灰	F 湖西か 内外面自然釉	158-5
5	須恵器	坏	(9.4)	3.0	—	BEFGK	40	良好	黄灰	№.40 新治 大粒の白色粒子多量	158-6
6	須恵器	坏	(10.0)	2.9	—	ABEG	25	良好	黄灰	F 東海 内部高23 底面凹溝(ヘラケズ)	158-7
7	須恵器	高台付坏	—	[3.4]	(10.4)	BG	25	良好	灰白	№.5 湖西	158-8
8	須恵器	長頸瓶	—	[2.0]	—	BG	5	良好	灰	G 湖西か 内面自然釉	
9	須恵器	長頸瓶	—	[2.0]	—	BG	5	良好	灰	F 湖西か 白色粒子多量	
10	須恵器	甕	—	[4.0]	—	ABG	5	良好	灰	G	
11	土師器	坏	(11.6)	[3.2]	—	BG	15	良好	にぶい黄	F 内外面漆 胎土は緻密 口唇部沈線	165-1
12	土師器	坏	(13.8)	[3.0]	—	BDG	15	普通	にぶい黄	D 半球形坏 内面炭素吸着 分厚い	165-1
13	土師器	坏	(13.8)	[3.4]	—	ABDG	10	普通	橙	E・G 北武蔵型坏	165-1
14	土師器	坏	(11.7)	[2.5]	—	ABDG	10	普通	にぶい赤褐	E・カマド 北武蔵型坏	165-1
15	土師器	坏	—	[3.6]	—	BG	5	普通	灰黄	E 内外面漆	165-1
16	土師器	坏	—	2.3	—	BDG	30	普通	灰白	C・F・SJ54 E 黒線か 器面風化	159-1
17	土師器	坏	(15.7)	3.4	—	ABDG	25	普通	橙	№.14・F	159-2
18	土師器	高坏	(18.2)	[3.4]	—	ABDG	20	普通	にぶい黄橙	№.58・H 有段の高坏 全体的に磨減 白っぽい 粉っぽい	165-1
19	土師器	甕	(22.6)	[4.7]	—	ABEFG	20	普通	にぶい黄褐	№.2 長胴甕 角安多量 21と同一個体か	165-1
20	土師器	甕	—	[15.6]	6.1	ABDEFGJ	70	普通	橙	№.59・81・84・85・86・カマド 長胴甕	159-3
21	土師器	甕	—	[9.3]	(3.6)	ABDEG	15	普通	にぶい黄	G 長胴甕 薄手 19と同一個体か	159-4
22	土師器	甕	—	[4.0]	(6.6)	ABEFG	25	普通	にぶい黄	№.66 外面底部煤付着か	159-5
23	土師器	甕	—	[4.6]	(8.0)	ABDEG	20	普通	にぶい黄褐	№.45 長胴甕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
24	土師器	甕	(21.2)	[2.7]	—	ABDEG	20	普通	にぶい橙	B 常総型甕 口唇部直立する	165-1
25	土師器	甕	—	[21.6]	—	ABDEF	20	良好	にぶい黄	№.58(59カ)・61・62・70・H 常総型甕 雲母多量	157-2
26	土師器	甕	—	[28.6]	8.8	ABCDEF	65	普通	橙	SJ53 №.1・3・6・9・13・16・18・19・28・32・44・48・53・64・カマド・C・D・E・F SJ54 №.12・D・F 常総型甕 底部木葉痕	157-3
27	土師器	甕	—	[25.7]	—	ABDEFG	40	普通	橙	№.36・38・74・76	157-4
28	土師器	甕	(25.7)	[2.7]	—	BEFG	5	普通	にぶい橙	№.42	165-1
29	土師器	甕	—	[4.2]	(8.8)	ABDEG	10	普通	にぶい橙	C	165-1
30	鉄製品	釘頭	長さ [1.7] 頭幅 0.6 ~ 0.9 身幅 0.5 重さ 1.0g							D	172-1

17は皿である。口縁部は外反し、明瞭な屈曲部を作る。

18は高坏か。

19～27は甕である。19は武蔵型甕の口縁部、20・21はその底部である。24は常総型甕の口縁部、25・26は常総型甕の胴部、27は球胴甕の胴部である。25・26は胴部下半が丸く、直線的ではない。いずれもミガキを密に施す。26は底部に木葉痕が残る。

28・29は甕である。28は大型甕の口縁部である。29は小型甕の底部である。

30は鉄釘である。

本住居跡の時期は、8段階（奈良時代前半）である。

第60号住居跡（第282～284図）

1・Jー7グリッドに位置する。南西部は攪乱により、覆土上層が削平されている。

規模は、長軸 3.94m、短軸 3.65m、深さ 0.47m、主軸方位はN-8°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子やロームブロック、焼土粒子を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面は全体に浅い掘り方と貼床が認められ、壁際を除いて硬化していた。

床面からはカマドと壁溝が確認された。カマドは長軸 0.97m、短軸 0.83m、深さ 0.46mで、北壁中央からやや東寄りに位置する。その構造は燃焼部から煙出しにかけて北壁を掘り込み、天井部と

袖部は白色粘土で構築している。袖部の遺存状態は比較的良好で、内部の被熱面から天井部に至るカーブまでを確認することができた。覆土は粘土ブロックや焼土を含む灰黄・暗赤褐色土の崩落土で、底面に灰層（第20層）が堆積していた。内部から遺物は出土しなかった。

壁溝は北西隅角を除いて全周する。幅 0.15m ~ 0.25m、深さ 15cmで、覆土は住居跡と同様である。

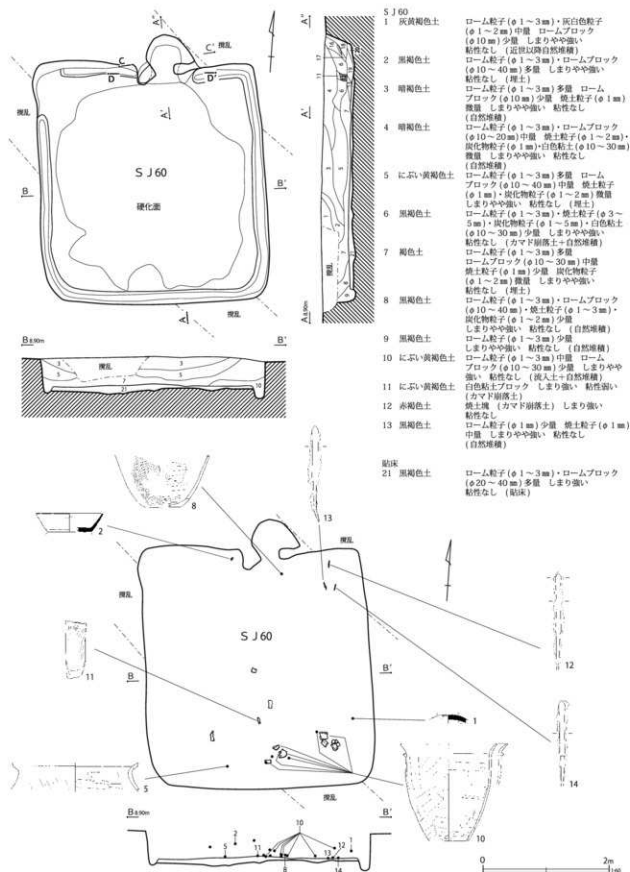
ピットや貯蔵穴はみつからなかった。

遺物は少ないが、カマド周辺と南東側に集中する。そのうち、5・8・10・11～14が床面直上出土遺物である。主に、奈良時代の須恵器蓋・土師器甕・甕・砥石・鉄鏝・貝窠穴痕泥岩が出土した。

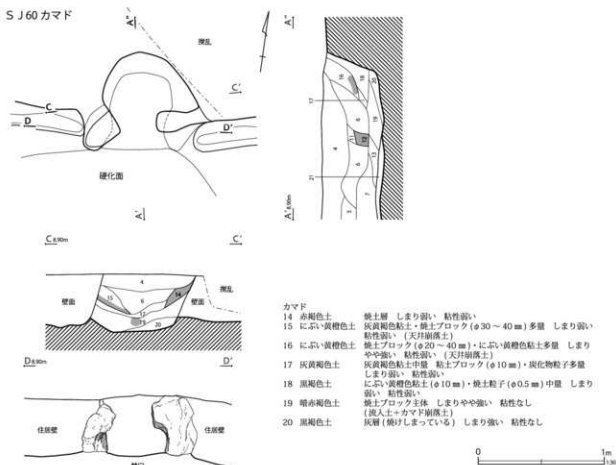
1は須恵器蓋である。摘み部分が剥落し、渦巻き状の接合部がみられる。器面には回転ヘラケズリを施す。新治窯産か。

2は坏である。箱形でクロロ目が強い。底部は周辺部をナゲ消している。新治窯産か。

3～9は甕である。3は球胴甕の口縁部と考えられる。混入か。4は口縁部片。5～9は常総型甕である。5は口唇部がわずかに突出し、頸部は鋭角に屈曲する。6・7は口唇部がより突出し、頸部は丸く屈曲する。8は胴部下半がやや直線的で、最下段付近で丸みを帯びる。外面にミガキを密に施す。9は底部のみだが、木葉痕とミガキが



第282図 第60号住居跡(1)



第283図 第60号住居跡(2)

顕著に残る。

10は甕である。薄手で、口縁部は短く外反する。頸部に筒み状の粘土が貼付されているが、把手としては小さく、一箇所のための、機能は不明である。

11は砥石である。置砥を再利用し、折損部を穿孔して提砥とした製品である。小口面を除いた4面を使用しており、表面が刃痕等がなく、最終使用面と考えられる。表面は黒色だが、折損部を観察すると、内部は白色である。石材の種類は不明である。

12~14は鉄鏝である。角閼端刃形の鏝で、13は茎部に木質が残る。

15は貝巢穴痕泥岩である。

本住居跡の時期は、8段階(奈良時代前半)で

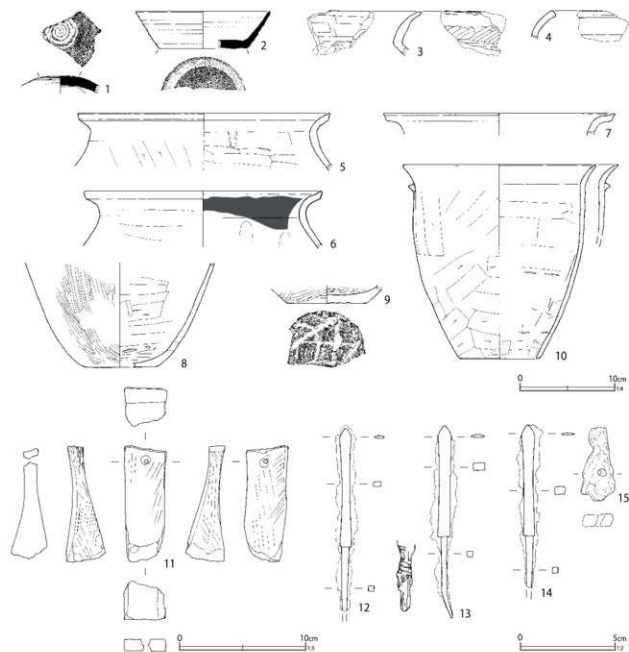
ある。

第66号住居跡(第285・286図)

H・I-4グリッドに位置する。中央から北側にかけて、耕作により削平されており、東側を第147号土壌に壊されている。

規模は、長軸3.53m、短軸3.4m、深さ0.51m、主軸方位はN-18°-Wである。平面は方形である。覆土はローム粒子や焼土・炭化物等を含む黒・暗褐色土の自然堆積である。床面は部分的に掘り方と貼床が認められ、壁周辺を除いて硬化していた。

床面からはカマド、壁溝、ピットが確認された。カマドは確認範囲で、長軸0.96m、短軸0.92m、深さ0.68mで、北壁中央に位置する。北壁が削平されており、その構造は明らかでないが、北壁



第284図 第60号住居跡出土遺物

第82表 第60号住居跡出土遺物観察表(第284図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	蓋	—	[1.9]	—	BEGK	25	普通	灰白	Na.5 新治か 胎土は白色小石	
2	須恵器	坏	(14.0)	3.9	9.2	BGK	40	良好	灰	Na.10 新治か 内底径8.6・内部高(3.1) 胎土は小石	159-6
3	土師器	甕	—	[4.6]	—	ABDEG	5	普通	にぶい黄橙	掘り方 球胴甕	165-2
4	土師器	甕	—	[2.8]	—	ABDG	5	普通	褐色	C	165-2
5	土師器	甕	(26.6)	[6.1]	—	ABEFK	20	普通	にぶい黄褐色	Na.9 常総型甕(新治周辺) 胎土は大粒の白色小石 内面黒色	165-2

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
6	土師器	甕	(25.0)	[6.0]	—	ABEFK	15	普通	にぶい黄橙	C 常総型甕(新治周辺) 内面煤付着 胎土は大粒の白色小石	165-2	
7	土師器	甕	(24.4)	[2.5]	—	ABEFK	10	普通	にぶい褐	D 常総型甕(新治周辺) 大粒の白色 小石 雲母多量	165-2	
8	土師器	甕	—	[10.1]	(7.8)	ABEFK	20	普通	にぶい褐	Na.4・カマド 常総型甕(新治周辺) 胎土は大粒の白色小石 雲母多量	157-5	
9	土師器	甕	—	[1.9]	(8.8)	ABEFK	55	普通	褐	C 常総型甕(新治周辺) 胎土は大粒 の白色小石 雲母多量 底部木葉痕	165-2	
10	土師器	甕	(20.2)	20.5	(8.6)	ABEG	70	普通	にぶい赤褐	Na.6・12・13・14・15・17・20・B床・B・ C 小型甕 器面被熱し剥離	157-6	
11	石製品	砥石	長さ[9.1]	幅3.3	厚さ3.0	孔径0.8	重さ78.9g			Na.7 凝灰岩か	171-2	
12	鉄製品	鉄鐙	全長[9.7]	鐙身長1.2	鐙身幅0.6	頸部長5.1	頸部幅0.4	基部幅0.3	重さ9.7g	Na.1 角間端刀形	172-1	
13	鉄製品	鉄鐙	全長10.2	鐙身長1.1	鐙身幅0.7	頸部長4.8	頸部幅0.6	基部幅0.4	基部幅0.3	重さ10.7g	Na.2 角間端刀形 木質あり	172-1
14	鉄製品	鉄鐙	全長[8.6]	鐙身長1.2	鐙身幅0.7	頸部長4.7	頸部幅0.5	基部幅0.3	重さ8.6g	Na.3 角間端刀形	172-1	
15	石製六輪形器	—	長軸長5.9	最大幅2.6	厚さ1.0	重さ12.7g			A		170-1	

を掘り込み、煙道と煙出しを構築していたと推定される。天井部と袖部は粘土を用いている。覆土は焼土粒子や粘土粒子を含む暗褐色土など、崩落土が主体を占める。内部から遺物は出土しなかった。

壁溝は確認範囲では全周する。幅0.15m～0.27m、深さ3cm～9cmで、覆土は住居跡と同様である。

ピットは4基検出された。規模(長径×短径×深さ)は、P1は0.31m×0.27m×0.22m、P2は0.29m×0.25m×0.17m、P3は0.42m×0.38m×0.44m、P4は0.4m×0.29m(確認範囲)×0.05mである。P1は主柱穴である。P2は小規模で、配列もP1と並列しないが、柱穴と推定される。P3・P4は入口ピットである。ピットの周辺には、土手状の高まりがあり、入口施設に伴うものと推定される。

遺物は非常に少なく、須恵器・土師器の小片が出土したに留まる。主に奈良時代の須恵器杯・土師器杯・甕が出土した。

1～3は須恵器杯である。1は箱形の杯で、ロクロ目は強く、底部は周辺回転ヘラケズリを施す。

2はやや小型。3は底部をヘラケズリで調整している。

4はロクロ土師器の杯である。器面は薄く、口縁部が外反する。

5は常総型甕の口縁部で、口唇部が突出する。頸部はやや丸い。

6は甕か。口縁部がわずかに外反する。本住居跡の時期は、8段階(奈良時代前半)と推定される。

(2) 井戸跡

第7号井戸跡(第287～289図)

D-4グリッドに位置する。第178号土壌を壊し、畝跡に壊されている。

規模は、掘り込み面で長軸2.2m、円形に掘り下がる箇所で径1.2mである。深さは確認範囲で2.48mである。覆土は埋め戻し土や崩落土が主体で、内部から土師器・須恵器片が比較的多く出土した。

そのうち15が最下層から出土し、16・17・19は異なる堆積層から出土した複数破片が接合した。主に奈良時代の須恵器壺・鉢(甕)・甕・土師器杯・壺・甕・甕が出土した。

第83表 第66号住居跡出土遺物観察表(第286図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	坏	[14.6]	[3.6]	—	BFGK	10	普通	灰	C 新治 胎土は大粒の白色小石 内面の色調やや暗い	165-3
2	須恵器	坏	[11.8]	[2.8]	—	BGK	20	普通	灰	A・B 新治 胎土は大粒の白色小石	165-3
3	須恵器	坏	—	[0.7]	—	BFGK	40	良好	灰	B 新治 胎土は大粒の白色小石	165-3
4	ロクロ土師器	坏	[15.2]	[2.8]	—	ABDG	10	普通	にぶい黄褐色	C 角安多量	
5	土師器	甕	[26.0]	[3.7]	—	ABFGK	5	普通	にぶい黄褐色	C 常総型甕 胎土は大粒の白色小石 雲母多量	
6	土師器	甕	[25.0]	[4.4]	—	ABDEG	10	普通	にぶい橙	C	

1は須恵器壺である。器高は厚く、頸部は上に立ち上がる。外面に自然釉がかかる。湖西窯産か。

2は鉢か。外面に同心円文タキが施される。雲母や大粒の白色粒子を多量に含む。

3～7は甕の口縁部である。5と14の底部は同一個体の可能性が高い。4は外面格子目タキ、内面同心円当てで具痕が残る。5は口唇部を折り返し、頸部の屈曲は3・4ほど強くない。器面は赤っぽく、大粒の石英・白色小石を多量に含む。新治窯産か。

8～13は甕類の胴部である。8～12は平行タキ、13は格子目タキで、13のみ内面に明瞭な同心円当てで具痕が残る。8・11は湖西窯産。

14・15は甕の底部である。14は胴部下半をケズリ調整する。15は底部が剥落した胴部下半の破片で、外面は磨滅する。いずれも新治窯産。

16は内彎口縁部である。器壁は厚く、内面と外面口縁部に黒漆の痕跡がある。

17は小型壺か。球形の胴部で分厚い。

18は甕である。長胴甕の底部と考えられ、木葉痕が残る。

19は甕である。長胴形の胴部で、口縁部はわずかに外反し、口唇部は突出し、面取りしている。器壁は厚い。磨滅が激しいが、外面はヘラケズリ、内面は縦方向のミガキを密に施す。

本遺構の時期は、第178・179号土壌を壊していること、及び出土遺物から奈良時代前半(8世紀前半)以降と推定される。

(3) 土壌

第83号土壌(第290図)

O-8グリッドに位置する。第40号住居跡を壊す。規模は長軸1.31m、短軸0.79m、深さ0.43mで、長軸方位はN-15°-Eである。平面は楕円形である。出土遺物は土師器甕(1)や土鉢(2)などである。

第40・67号住居跡との重複関係と覆土の状況から、奈良時代の土壌と推定した。

(4) グリッド出土遺物

グリッド出土遺物については、各グリッドの遺構確認面から出土した須恵器を第291図に掲載した。その大半はD-4グリッドから出土しており、第7号井戸跡との関連が窺われる。

1は高台付坏である。比較的薄手で、口唇部や屈曲部は鋭く明瞭に作っている。雲母を多量に含む。新治窯産。

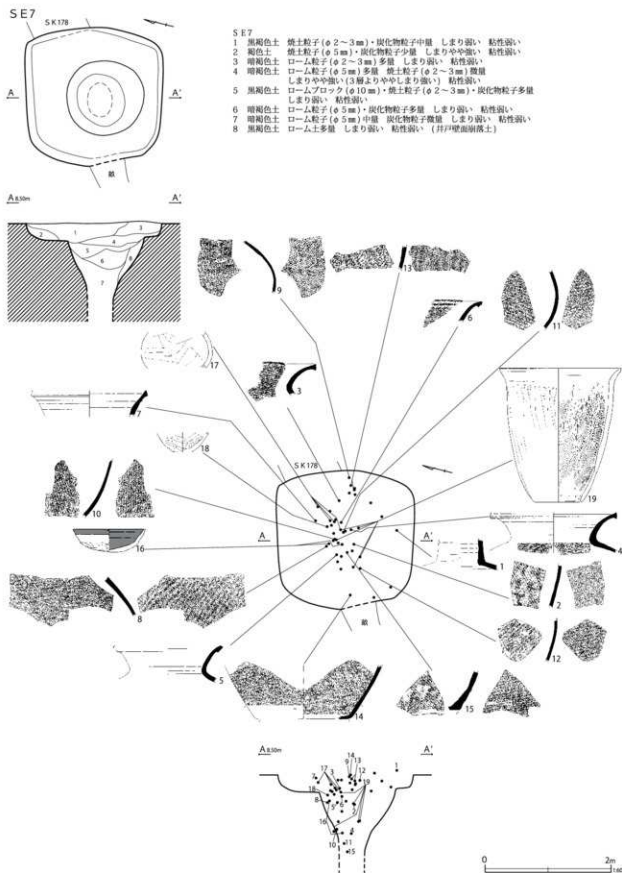
2は短頸壺である。内外面に自然釉がかかる。

3は長頸甕か・長頸壺の頸部である。湖西窯産。

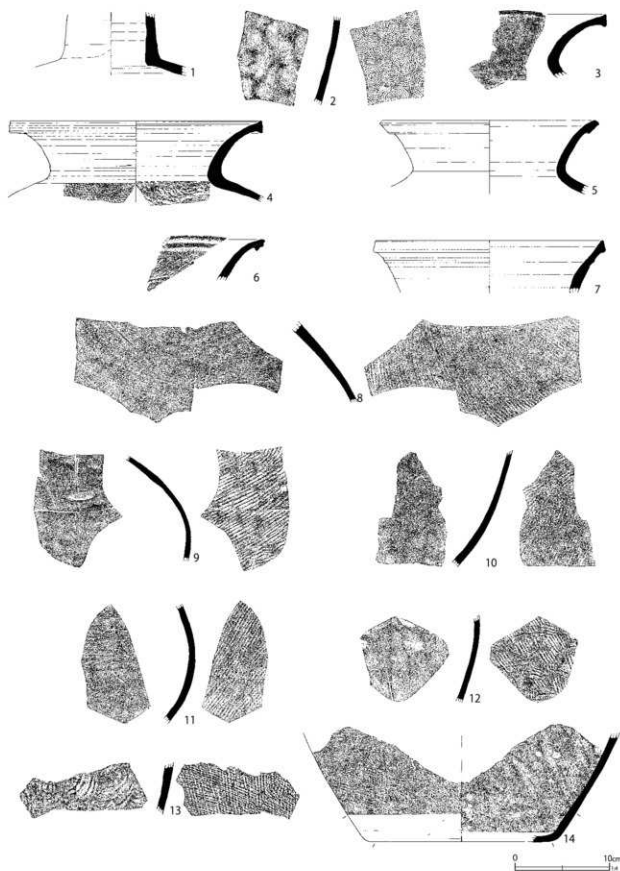
4は甕である。口径が小さく、小型甕の口縁部か。口唇部は2段の土線が入る。

5は鉢である。球形で、口縁部は横方向に開く。口唇部は斜めに面取りする。胴部に同心円文タキを施し、頸部はヨコナデでそれをナデ消して屈曲部を形成している。内面はヘラナデ。胎土に大粒の白色小石を多量に含む。新治窯産。

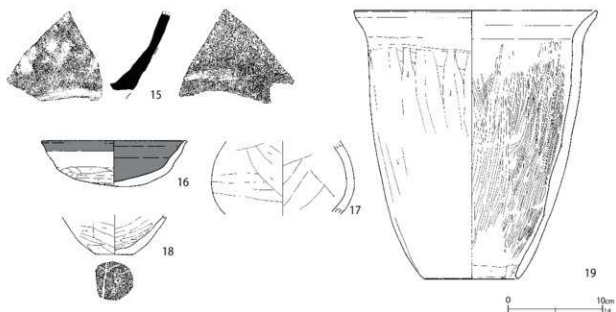
6は甕の底部か。底径が小さく、5のような鉢ではなく、小型器種の底部である。外面は回転へ



第287図 第7号井戸跡



第 288 図 第 7 号井戸跡出土遺物 (1)



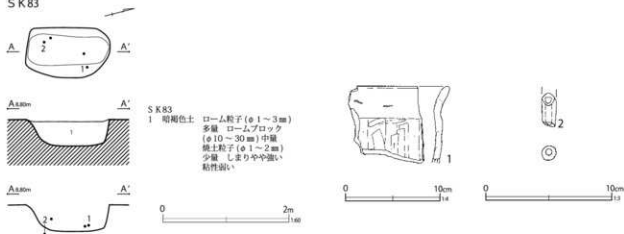
第289図 第7号井戸跡出土遺物(2)

第84表 第7号井戸跡出土遺物観察表(第288・289図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	甕	—	[6.8]	—	BG	20	良好	灰	№.8 湖西 胎土緻密 外面一部自然釉	166-1
2	須恵器	鉢	—	[9.4]	—	BEFGK	5	良好	灰	№.33 新治 雲母多量 大粒の白色小石多量	166-1
3	須恵器	甕	—	[6.7]	—	ABG	5	良好	灰	№.15	166-1
4	須恵器	甕	(26.4)	[8.6]	—	ABEG	10	良好	灰	№.27 白色粒子多量 口唇部二段回む 口縁強い屈曲	160-1
5	須恵器	甕	(22.2)	[7.7]	—	BEFK	20	普通	灰褐	№.38 新治か 赤色 大粒の石英・大粒の白色小石多量 口唇部磨減 口縁薄い粘土帯貼り付け 14と同一個体か	160-2
6	須恵器	甕	—	[4.3]	—	AREK	5	普通	暗灰	№.24 大粒の白色小石多量 内面自然釉	166-1
7	須恵器	甕	(23.9)	5.6	—	BEG	10	良好	灰白	№.18 湖西 内面降灰	166-1
8	須恵器	甕	—	[8.6]	—	BEG	5	普通	灰白	№.36・SK178 №.4 湖西	166-1
9	須恵器	甕	—	[11.2]	—	BEG	5	普通	灰白	№.14 接点のない同一個体あり (SK103 №.28)	166-1
10	須恵器	甕	—	[12.4]	—	ABE	5	普通	にぶい黄橙	№.35 赤色	166-1
11	須恵器	甕	—	[9.2]	—	BEG	5	良好	灰	№.32 湖西 外面自然釉	166-1
12	須恵器	甕	—	[9.3]	—	ABE	5	良好	灰	№.4 白色粒子多量	166-1
13	須恵器	甕	—	[5.4]	—	ABEG	5	普通	灰	№.13 接点のない同一個体あり (№.12) 三鑫か 粉っぽい 胎土は細かい	166-1
14	須恵器	甕	—	[11.5]	(18.8)	BEFK	10	普通	灰褐	№.1 新治 大粒の石英・大粒の白色小石多量 5と同一個体か	160-3
15	須恵器	甕	—	[8.4]	—	ABEFGK	10	普通	灰	№.45 新治 大粒の白色小石 外面磨減	160-4
16	土師器	坏	15.0	4.9	—	ABDEG	70	普通	浅黄橙	№.37・44 内口口縁部 内外面漆	160-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
17	土師器	壺	—	[7.8]	—	ABDG	20	普通	にぶい黄橙	No.17・19・20・25 小型壺 角閃石多量 全体的に磨滅 内面赤色	
18	土師器	甕	—	[4.2]	4.0	ABDEG	70	普通	にぶい褐	No.23 底部木炭痕	160-6
19	土師器	甕	(25.4)	28.5	9.5	ABEG	70	普通	にぶい橙 い	No.25・26・41・42・43 外面刻線激しい	160-7

SK83



第290図 第83号土壺・出土遺物

第85表 第83号土壺出土遺物観察表 (第290図)

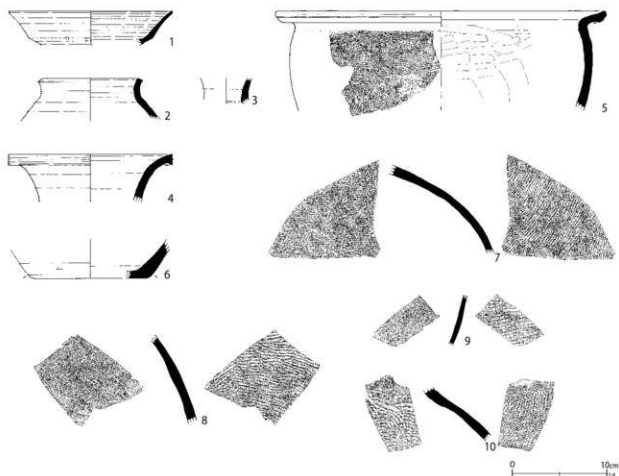
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	甕	—	[8.1]	—	ABEG	5	普通	にぶい橙	SK83 No.1	
2	土製品	土鏝	長軸長2.5 孔径0.5	最大径1.1 重さ3.7g	1.1	DEG	40	普通	にぶい赤褐	SK83 No.4	

ラケズリを施す。胎土に大粒の白色小石を多量に含む。底部は磨滅している。新治窯産。

7~10は甕である。7は甕の胴部上半部分の破片か。比較的薄手で、外面を平行タキで調整する。8も胴部上半部分の破片で、外面を平行タキで調整する。9は胴部中ほどの破片で、外面

は平行タキで調整する。7~9は湖西窯産。10は胴部が頭部との屈曲部にさしかかる部分の破片である。外面に格子目タキ、内面に同心円当て具痕が残る。外面はタキ目の上にカキメが廻り、屈曲部分にはヨコナデを施している。胎土に白色小石を含む。断面はサンドイッチ状の焼成である。

第4次調査



第 291 図 第4次調査区グリッド出土遺物

第 86 表 第4次調査区グリッド出土遺物観察表 (第 291 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	須恵器	高台付杯	(17.2)	[3.7]	—	ABFG	15	良好	灰	D-4 新治 雲母多量	
2	須恵器	短頸壺	(10.0)	[4.5]	—	BEG	20	良好	灰白	D-4 内外面自然釉 口唇部面取り	
3	須恵器	長頸瓶	—	[2.6]	—	BG	25	普通	オリーブ黄	E-4 湖西 長頸瓶(壺) 頸の頸部	
4	須恵器	甕	(17.2)	[5.0]	—	BEG	20	良好	灰	D-4 口唇部2段の沈線	
5	須恵器	鉢	(34.4)	[10.6]	—	BFGK	10	普通	灰	D-4 新治 外面同心円文タタキ 胎土は大粒の白色小石多量	
6	須恵器	甕	—	[4.0]	13.2	EFGK	20	不良	楊灰	D-4 №1 新治 胎土は大粒の白色小石多量 内面赤い 外面底部磨滅	
7	須恵器	甕	—	[9.3]	—	BG	5	良好	灰	D-4 №3 湖西	
8	須恵器	甕	—	[9.4]	—	BG	5	良好	灰	D-4 湖西	
9	須恵器	甕	—	[5.3]	—	G	5	良好	灰	D-4 №2 湖西	
10	須恵器	甕	—	[6.0]	—	BGK	5	普通	灰	D-7 胎土は5mmの白色小石	

報告書抄録

ふりがな	まきのじきたいせき							
書名	植野地北遺跡							
副書名	首都圏記濫区域堤防強化対策（幸手市）事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書							
シリーズ番号	第434集							
編著者名	青木 弘							
編集機関	公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4丁目4番地1 TEL 0493-39-3955							
発行年月日	西暦2017（平成29）年11月22日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
	市町村	遺跡番号						
植野地北遺跡	埼玉県幸手市 大字植野地字 東山783-1他	11420	13	36° 03' 42"	139° 47' 06"	20130701～ 20140331 20140401～ 20141231	10,466	堤防強化
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
植野地北遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 土壇 灰穴	3軒 7基 29基	縄文土器 石器 土製品	縄文時代前期の地点貝塚が検出された。		
		古墳時代	竪穴住居跡 土壇	53軒 4基	土師器 須恵器 土製品 鉄製品		古墳時代前期では大型住居跡が検出された。 古墳時代後期では集落跡が検出された。	
		奈良時代	竪穴住居跡 土壇 井戸跡	9軒 1基 1基	土師器 須恵器 土製品 鉄製品		奈良・平安時代では新治窯・湖西窯など他地域産の須恵器が出土した。	
		平安時代	竪穴住居跡	2軒	土師器 須恵器		石製品	
		中・近世	掘立柱建物跡 井戸跡 溝跡 土壇 畠跡 ビット	4棟 7基 9条 177基 1箇所 478基	瓦質陶器 陶磁器 銭貨 鉄製品			
要約	植野地北遺跡は江戸川堤防右岸の下総台地宝珠花支台上に立地している。本遺跡は過去に第1・2次調査を幸手市教育委員会が実施し、今回は平成25・26年度に、当事業団が着手した第3・4次調査の成果報告である。調査の結果、縄文時代から中・近世にかけての各種遺構・遺物が検出された。 縄文時代については、早期後葉の灰穴や前期諸儀式期の竪穴住居跡、黒浜式期の地点貝塚が確認された。地点貝塚では、17万点に及ぶ貝が検出され、本地域有数の確認数となった。貝種はアサリを主体とし、マガキやサルボウ、ハイガイ、ハマグリ等、豊富な種類で構成される。 古墳時代については、数多くの竪穴住居跡が検出された。前期の大型住居跡は一辺13mを超える県内最大級の規模を誇る。竪穴住居跡の多くは、古墳時代後期以降に集中し、出土土師器は埼玉県域以外にも、栃木県域や千葉県域の特徴が強い。 奈良・平安時代については、竪穴住居跡から茨城県新治窯跡群や三和窯跡群、栃木県三義窯跡群、静岡県湖西窯跡群といった埼玉県外の地域で生産された須恵器が出土した。国界地域における活発な交流が推定される。 中・近世については、掘立柱建物跡や井戸跡などが検出された。							

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第434集

榎野地北遺跡

首都圏近畿区域堤防強化対策（幸手市）事業地内

埋蔵文化財発掘調査報告

（第1分冊）

平成29年11月2日 印刷

平成29年11月22日 発行

発行／公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493（39）3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／山進社印刷株式会社